

蛭川坊田遺跡

2007

本庄市遺跡調査会

ひる かわ ぼう だ い せき
蛭 川 坊 田 遺 跡

2007

本庄市遺跡調査会

巻頭図版



1.調査区全景（西より）



2.調査区全景（真上より）

序

埼玉県北部に位置する本庄市は、昨年1月10日の旧本庄市と旧児玉町の合併により、人口約82,000人あまりの県北地域の中心的な都市となりました。その市域は、北側の群馬県との県境の利根川から、南側の上武山地内の皆野町との境の出牛峠付近まで、最長約19.3kmの細長い形状で、面積は89.71km²に及びます。

この本庄市が所在する児玉地方は、古墳をはじめとする多くの遺跡が所在し、古くより文化財の宝庫として学術的にも注目されてきました。中でも本庄市に所在する埋蔵文化財の数は500箇所を越え、当地方の個性ある歴史や文化を物語る重要な遺跡が数多く存在しています。今後もこれらの貴重な遺跡や文化財を大切に保護し、その資料を学校教育や生涯学習の場で積極的に活用していくところですが、同時に新本庄市の新たなアイデンティティの形成と、地域の再編による新たな地域づくりに資するものとして、再評価していかねばならないもののひとつと考えます。

本書は、平成2年に旧児玉町農業協同組合によるライスセンター建設に伴う事前の記録保存を目的として発掘調査された、児玉地域（旧児玉町）に所在する蛭川坊田遺跡の調査の成果を記したものです。調査した区域からは、平安時代中期の竪穴式住居跡を主体とした集落跡と、後期以降の掘立柱建物跡を主体とする屋敷跡が発見されており、当地方の古代末から中世への移行期の様相を知ることのできる数少ない貴重な資料として、県内外から注目されています。

最後に、現地の発掘調査から整理・報告書の刊行にあたり、郷土の文化財保護に対して深いご理解と多大なご協力を賜りました旧児玉町農業協同組合をはじめ、様々なご教示やご尽力を賜りました関係各位に、心から感謝申し上げます。

平成19年3月15日

本庄市遺跡調査会
会長 茂木孝彦

例 言

1. 本書は、本庄市児玉町蛭川字坊田239番地他に所在する蛭川坊田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、ライスセンター建設に伴う事前の記録保存を目的とし、平成2年5月14日から7月13日の期間に実施した。
3. 発掘調査は、旧児玉町遺跡調査会が行い、その調査担当には恋河内昭彦があたった。
4. 発掘調査から本書刊行に要した経費は、すべて委託者が負担した。
5. 本書の執筆及び編集は、恋河内が行った。
6. 本書で使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1・2万5千分の1、旧児玉町役場発行の2千5百分の1である。
7. 本書第4図中に記載したXY座標値は、調査当時の日本測地系の旧座標値を、国土地理院の座標変換ソフトにより、世界測地系の新座標値に変換したものである。また、抄録中の北緯・東経の数値も同様である。
8. 本書中の出土遺物観察表に記した記号は、以下のとおりである。
A－法量、B－成形、C－整形・調整、D－胎土、E－色調、F－残存度、G－出土層位、H－備考
9. 発掘調査及び本書刊行に際して、下記の方々や機関からご助言・ご協力を賜った。記して感謝いたします。
赤熊 浩一、浅野 晴樹、荒川 正夫、金子 彰男、小林 康幸、駒宮 史朗、坂本 和俊、
篠崎 潔、外尾 常人、田中 広明、田村 誠、富田 和夫、鳥羽 政之、中沢 良一、
中村 倉司、長滝 歳康、増田 久江、丸山 修、宮本 直樹、矢内 勲
埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
10. 発掘調査及び本書刊行のための整理作業には、下記の者が参加した。
青木 フク、飯島 満江、池田 芳野、岩上 モト、梅沢トモ子、大谷 文子、小賀野フジ、
黒崎百合子、小島 森平、小林 節子、小林八重子、沢本スミ江、清水かず江、杉山セツ子、
鈴木 美江、鈴木 利一、関根喜久子、高橋 桂、出牛イネ子、戸沢ミチ子、永尾 君代、
中島 トミ、中 よし江、中里 広子、野沢 公代、長谷川光広、福島恵美子、福島 礼子、
藤重千恵子、山田 松枝、分須 一三、分須 真作、渡辺 裕子

目 次

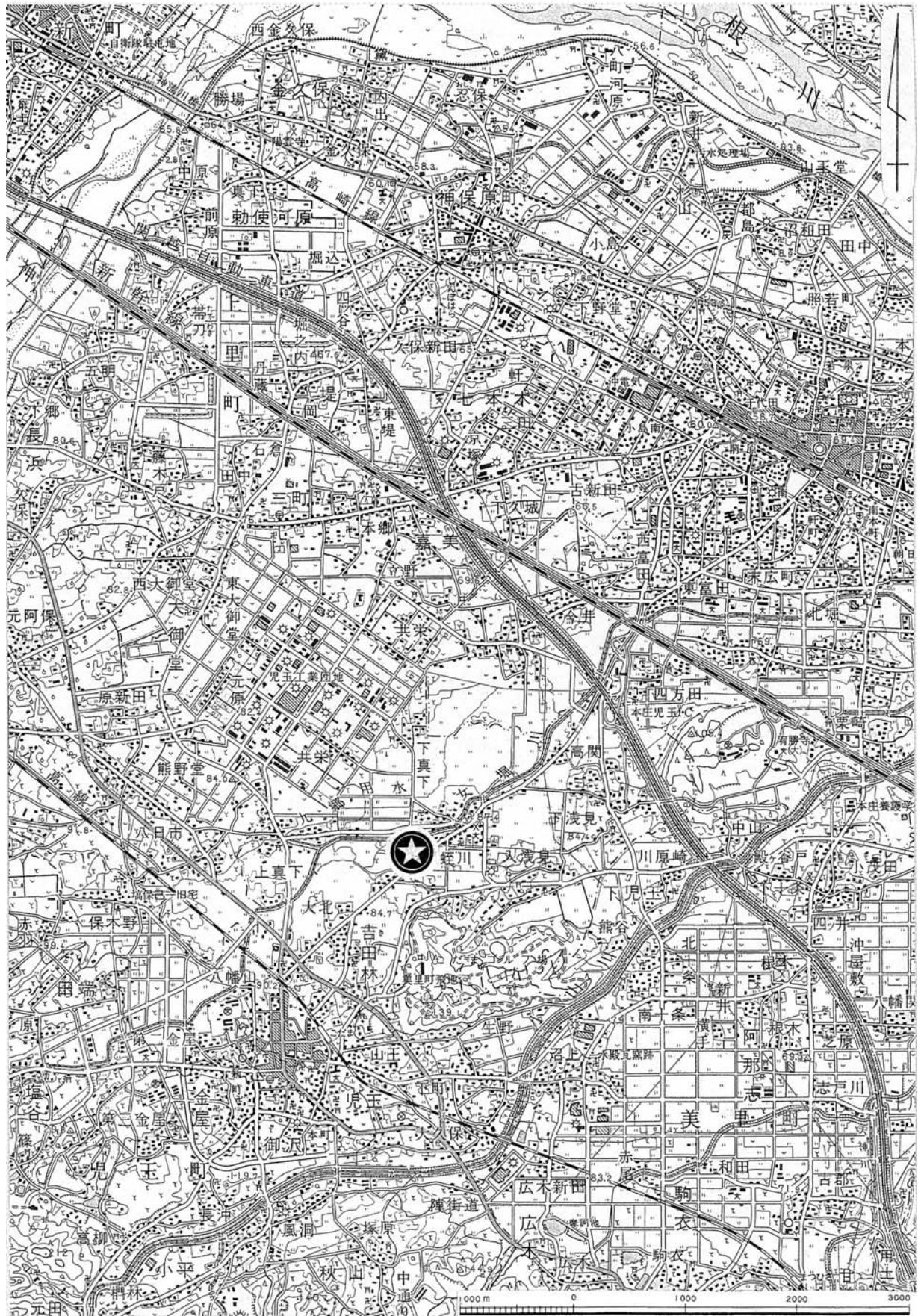
序

例言

第Ⅰ章	発掘調査に至る経緯	1
第Ⅱ章	遺跡の立地と歴史的環境	3
第Ⅲ章	遺跡の概要	5
第Ⅳ章	検出された遺構と遺物	7
	1. 竪穴式住居跡	7
	2. 掘立柱建物跡	24
	3. 土 壙	37
	4. 溝 跡	46
	5. 柵 列 跡	54
第Ⅴ章	結 語	55
参考文献	56

写真図版

報告書抄録



第1図 遺跡の位置

第 I 章 発掘調査に至る経緯

平成元年12月1日、児玉町大字蛭川（現本庄市児玉町蛭川）字坊田239番地外に、ライスセンターの建設を予定している児玉町農業協同組合（組合長富丘庫之助）より、同開発予定地内の埋蔵文化財の所在とその取り扱いについて、児玉町教育委員会に照会があった。

町教育委員会では、照会のあった開発予定地を埼玉県教育委員会発行の『児玉町遺跡分布地図』と照合したところ、現状では埋蔵文化財包蔵地の範囲には該当していないが、文化財の所在が十分把握されていない場所であり、また開発面積が比較的大規模であることから、埋蔵文化財の所在確認については試掘調査を実施して明確にする必要がある旨を回答した。

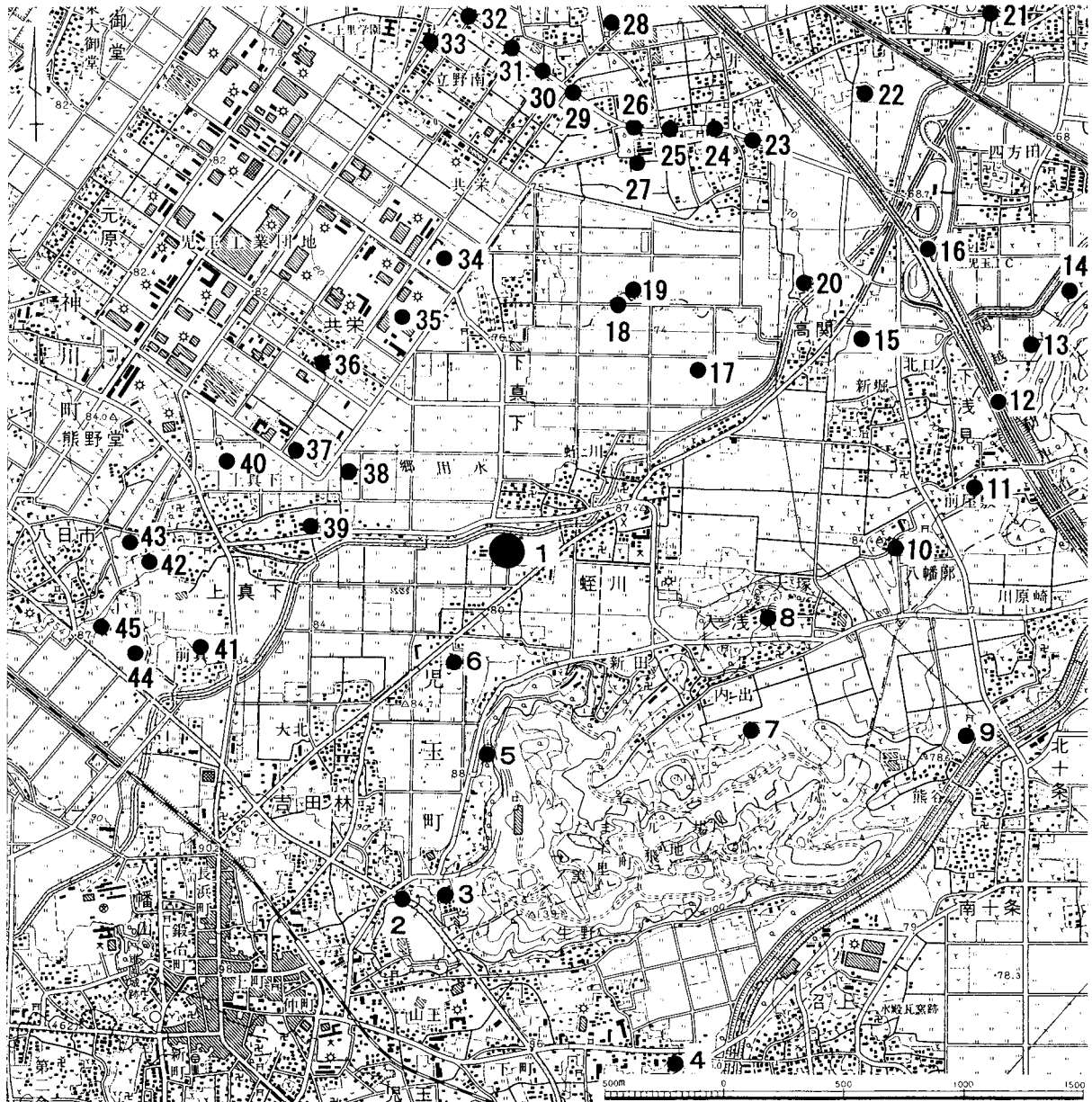
その後、日程の調整を行って平成2年2月27日～3月12日の期間に、同開発予定地の試掘調査を実施したところ、開発予定地内の北西側を主体に、平安時代の竪穴式住居跡や古代から中世の掘立柱建物跡・溝跡・土壇等の多くの遺構が確認され、古代末から中世の集落跡や屋敷跡が存在することが判明した。そのため、文化財が確認された範囲（埋蔵文化財包蔵地）については、開発予定地から除外し現状保存することが望ましいが、やむをえず現状変更する場合は、事前に発掘調査を実施して記録保存の措置をとる必要があり、町教育委員会と事前に協議するよう平成2年3月26日付児教社第447号によって回答した。そして、両者で協議を重ねた結果、すでに工事計画が進行しており、計画変更が困難であることから、やむをえず発掘調査を実施して記録保存の措置をとることになった。

発掘調査の実施にあたっては、児玉町農業協同組合と児玉町遺跡調査会との間で、平成2年5月11日に発掘調査に関する委託契約を締結し、同5月14日から現地での発掘調査が実施された。

発掘調査に関わる届出は、平成2年4月10日に児玉町遺跡調査会会長より「埋蔵文化財発掘調査の届出について」が、同じく児玉町農業協同組合組合長より「埋蔵文化財発掘の届出について」が、児玉町教育委員会と埼玉県教育委員会を経て、文化庁長官に提出されている。



第2図 試掘調査トレンチ配置図



第3図 周辺の奈良・平安時代遺跡

1. 蛭川坊田遺跡
2. 御林下遺跡
3. 阿知越遺跡
4. 大久保遺跡
5. 吉田林割山遺跡
6. 南街道遺跡
7. 向田A遺跡
8. 新屋敷遺跡
9. 宮ヶ谷遺跡
10. 鷲山南遺跡
11. 南ノ前遺跡
12. 雷電下遺跡
13. 根田遺跡
14. 山根遺跡
15. 東牧西分遺跡
16. 後張遺跡
17. 柿島遺跡
18. 藤塚遺跡
19. 前田甲遺跡
20. 今井川越田遺跡
21. 社具路遺跡
22. 地神・塔頭遺跡
23. 北廓遺跡
24. 今井遺跡群B地点
25. 今井遺跡群C地点
26. 今井遺跡群D地点
27. 今井原屋敷遺跡
28. 往来北遺跡
29. 今井遺跡群F地点
30. 今井遺跡群G地点
31. 熊野太神南遺跡
32. 八幡太神南遺跡
33. 立野南遺跡
34. 将監塚遺跡
35. 古井戸遺跡
36. 南共和遺跡
37. 新宮遺跡
38. 坊田遺跡
39. 上真下東遺跡
40. 辻ノ内遺跡
41. 金佐奈遺跡
42. 真下境東遺跡
43. 真下境西遺跡
44. 反り町遺跡
45. 八荒神遺跡

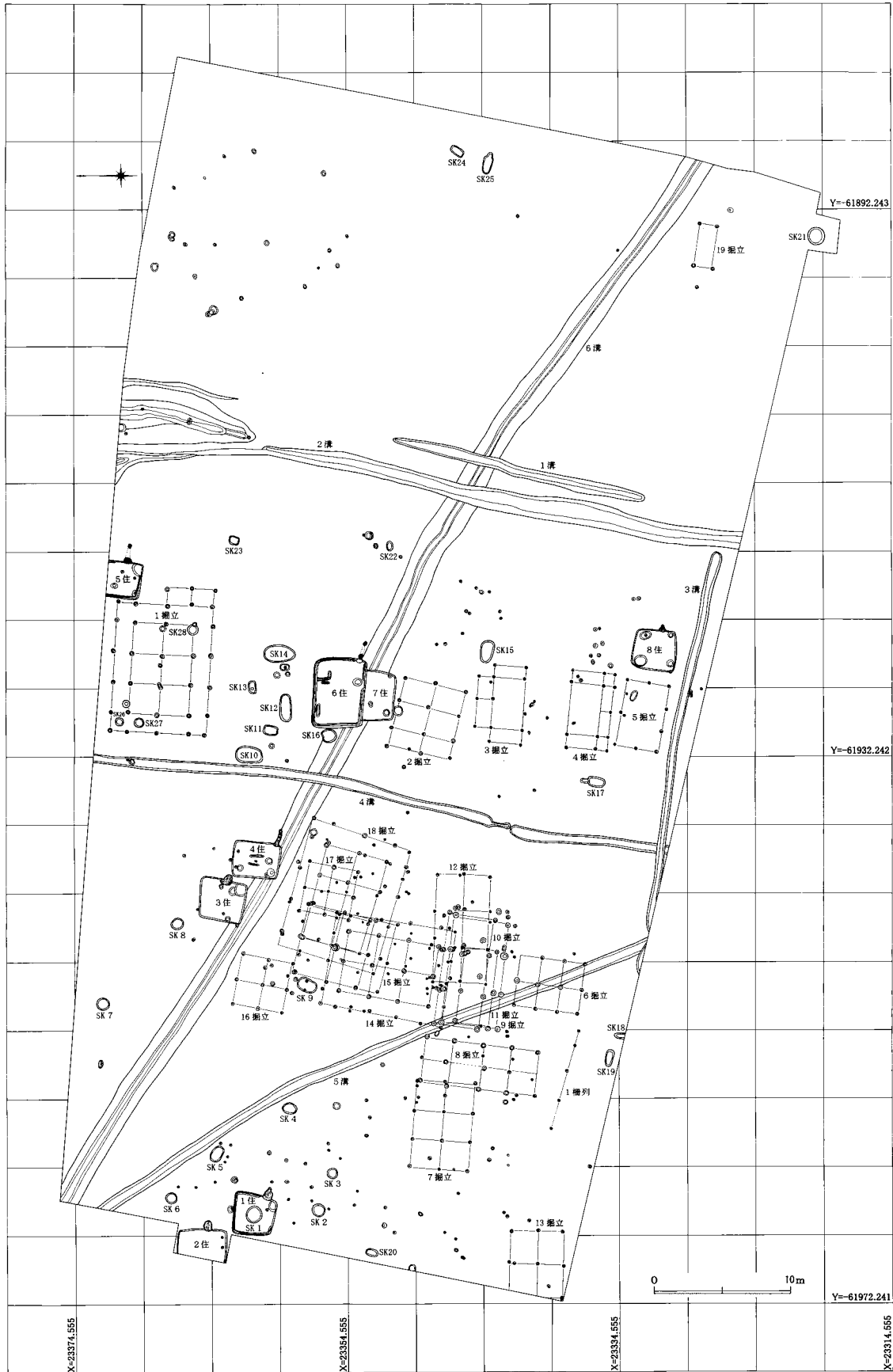
第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

本遺跡は、女堀川中流域右岸の現女堀川の南側に沿った東西方向に細長い標高79mを測る自然堤防上に立地している。この女堀川の中流域は、神流川扇状地の扇央部東端付近にあたり、地形的には女堀川を中心としてその両岸に帯状に沖積低地が広がり、北西側には低地に沿って低地部とあまり比高差のない平坦で広大な本庄台地が延び、南東側には児玉丘陵から分離独立した生野山・鷲山・大久保山の残丘が、同じく低地に沿って列状に並んでいる。

女堀川中流域の遺跡は、主に低地内の狭小な自然堤防や微高地上と、低地に面する本庄台地の縁辺部、及び残丘上やその周辺に広がる狭い低台地上を中心に立地している。古い時代の遺跡では、本庄台地上の将監塚遺跡（石塚1986）・古井戸遺跡（宮井1989）と塚畠遺跡（増田1992）や、生野山残丘北側斜面下の城の内遺跡（鈴木1981）など、少量ながら旧石器時代の石器を出土した遺跡があり、また縄文時代中期後半には本庄台地上に将監塚遺跡・古井戸遺跡・新宮遺跡（恋河内1995）の3つの大規模な環状集落が近接して営まれるなど注目される遺跡も多く存在するが、中流域の遺跡の分布は概して弥生時代以前は比較的希薄な状況で、古墳時代前期以降になって急激に遺跡数が増加する現象が認められる。

古墳時代の遺跡は、前期になって沖積低地内への集落の進出が顕著に認められ、該期以降積極的に低地とその周辺の開発を行っていたことが窺える。当初の集落は、複数系統の外來系土器をもつ比較的小規模な集落が主体であったようで、弥生時代集落の生産基盤を継承する丘陵（残丘）部の集落を取り込みながら、集落規模を拡大させ安定的な集落を形成していったようである。この前期からの低地開発を基盤にして、その後の中・後期も川越田（富田・赤熊1985、恋河内1993）・後張（立石1982・1983、恋河内2005）・今井川越田遺跡（磯崎1995、伴瀬1996、滝瀬1997）、辻堂（恋河内1996）・南街道遺跡（恋河内1996）、共和小学校校庭遺跡（恋河内1989）などの低地内に立地する大規模集落を中心に、その周辺に小規模集落が展開する様相が見られるが、南東側の低地を見下ろす残丘上は、前期には鷲山古墳（坂本他1986）や塚本山遺跡（増田1977）・生野山遺跡（埼玉県1982）などの方形周溝墓（群）、中期には物見塚古墳（大熊2002）・金鑽神社古墳（坂本他1986）、後期には生野山銚子塚古墳（田口他1975）や生野山古墳群（菅谷・駒宮1973）・塚本山古墳群（増田1977）などの大規模群集墳が造営されており、古墳時代を通して当地域社会の墓域（奥津城）として意識されていた場所のようである。

7世紀後半の白鳳時代になると、東牧西分遺跡（恋河内1995）など一部低地内に残存する集落もあるが、これまでの低地内の大半の集落は廃絶され、低地を取り囲むように西側の本庄台地縁辺部や東側の生野山・鷲山・大久保山などの残丘西側斜面下の低台地上に移動して、集落の再編成が行われる。本庄台地縁辺部の将監塚・古井戸遺跡（井上1986、赤熊1989）や南共和遺跡（恋河内1995）などの集落は、9世紀前半までさらに周辺部に拡散して帯状の大規模な居住域を形成するが、9世紀後半以降になるとその規模を縮小して急速に衰退し、10世紀にかけて低地内の自然堤防上や微高地上に本遺跡のような小規模な集落が再び形成される。これに対して東側の生野山や大久保山などの西側斜面下の低台地上に立地する雷電下遺跡（駒宮1979、恋河内1990・1999）や阿知越遺跡（鈴木1983・1984）などの集落は、10世紀以降まで継続的に営まれるものが多く、古墳時代からの伝統的な居住域として比較的安定した場所であったことが窺える。



第4図 調査区全体図

第三章 遺跡の概要

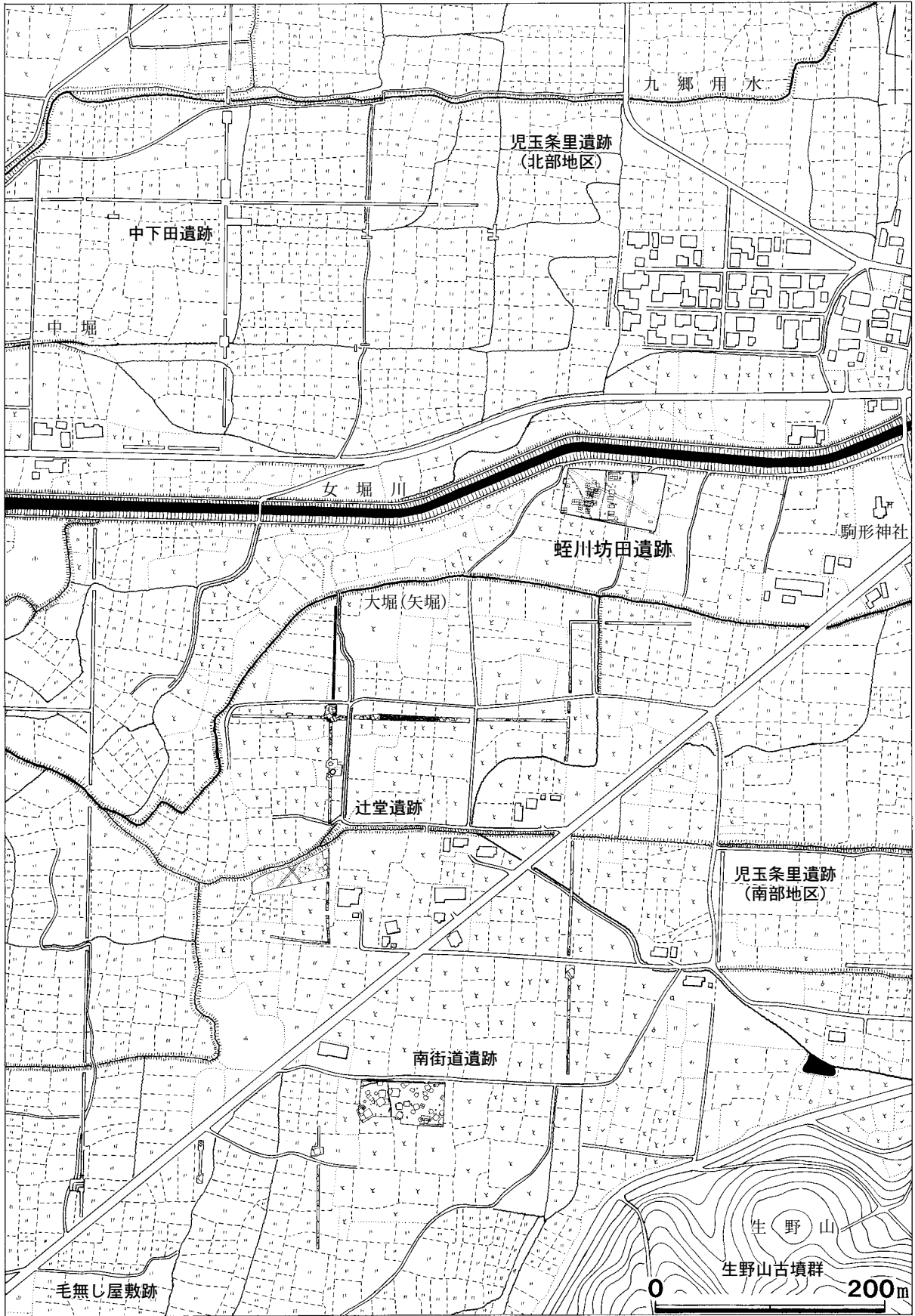
今回の発掘調査で検出された遺構は、竪穴式住居跡8軒、掘立柱建物跡19棟、土壇28基、溝跡5条、柵列跡1条である。これらの遺構の分布は、調査区の西側に顕著に見られ、調査区の東側は比較的希薄である。時期は、古墳時代のものと、一部9世紀に遡る可能性のあるものも見られるが、概ね10世紀以降の平安時代中期から中世初頭頃のものである。

古墳時代の遺構は、確実なものは調査区中央部の第6号溝跡だけである。この溝は、上幅約2m・深さ約1m程度で、断面「V」字状のいわゆる薬研堀の形態を呈する比較的規模の大きな溝で、地形の等高線に並走するように、調査区の北西コーナーから南東コーナーのほぼ対角線に直線的な流路をとっている。時期は、他の遺構との新旧関係や出土遺物からみて前期～中期の所産と考えられるが、掘り返された痕跡が見られないことから、比較的短期間しか機能していなかったようである。この本遺跡の第6号溝跡と同一の溝ではないが、類似した形態でほぼ平行した同じ流路方向をとる溝は、本遺跡の南西側約1kmに位置する高縄田遺跡（恋河内1995）でも調査されており、両溝跡とも古墳時代における女堀川中流域の低地開発を考える上で注目される遺構である。該期の遺物は、前期～中期の土器片の他に、後期の埴輪の破片も極少量出土している。

平安時代以降の遺構は、その大半が調査区の中央から西側にかけて分布しており、調査区の東側は遺構の分布が比較的希薄である。周辺の試掘調査（第2図）の結果においても、該期の遺構の分布は調査区外にあまり広がらないようであり、比較的小規模な集落と考えられる。

平安時代中期（10世紀代）の遺構は、竪穴式住居跡6軒（第1・2・3・5・7・8号住居跡）、掘立柱建物跡5棟（第2・9～11・15号建物跡）、土壇8基（第1～3・6・7・20～22号土壇）である。これらの遺構は、住居跡の近接した位置関係や建物跡の重複に見られるように、単一時期ではなく2～3時期にわたるものであるが、調査区内では中央の建物群を中心に、その周りに竪穴式住居を配置するような分布傾向が窺える。竪穴式住居跡は、いずれも東側にカマドをもつ規模が3m前後の方形を基調とする形態である。建物跡は、東西か南北方向に長軸をもつ2～3間程度の小規模なもので、第2号掘立柱建物跡と第15号掘立柱建物跡は一面に庇を伴っている。出土遺物は、土器が主体であるが、この中で第8号住居跡からは「常総型甕の影響をもつ甕」（末木2006）に類似した甕が出土しており注目される。

平安時代後期以降（11世紀末以降）の遺構は、竪穴式住居跡2軒（第4・6号住居跡）、掘立柱建物跡14棟（第1・3～8・12～14・16～19号掘立柱建物跡）、土壇17基（第4・5・8～19・26～28号土壇）、溝跡4条（第2～5号溝跡）、柵列跡1条である。これらの遺構は、いずれもその覆土中に多量の浅間山系B軽石を含んでおり、B軽石の降下年代（1108年）を前後する時期の遺構群と考えられるもので、複数の掘立柱建物跡と1軒程度の竪穴式住居跡によって構成される屋敷跡のようである。この屋敷地は、周囲の条里形地割りとほぼ平行する直線的で小規模な溝によって区画されており、特に第4号溝跡は、南北方向の条里坪線の位置とほぼ一致している。この屋敷跡には、ほぼ同規模で同形態の母屋的建物である2間3間4面庇付の建物が3棟（第1・14・18号建物跡）見られることから、2～3時期の変遷が推測される。遺物は、全体的に非常に貧弱で、土師器の埴・皿や鉄製品などが少量出土しただけであり、その遺物の様相は本遺跡の階層性を反映している可能性もある。



第5図 蛭川坊田遺跡と周辺の既発掘調査遺跡 (昭和44年測量旧児玉町役場1/2500の地図を使用)

第IV章 検出された遺構と遺物

1. 竪穴式住居跡

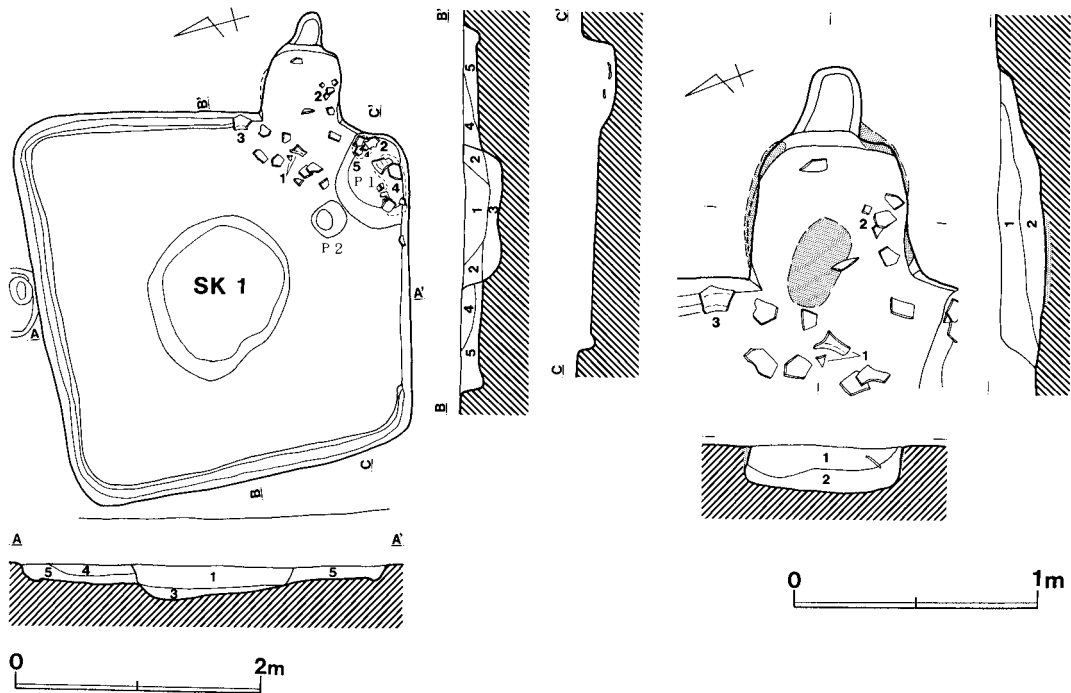
第1号住居跡（第6図、図版3）

調査区西端のやや北寄りに位置し、第2号住居跡と近接している。北側には第6号土壙、北東方向には第5号土壙、第5号溝跡があり、南側には第2号土壙がある。住居跡の中央部を、第1号土壙に切られている。

平面形は、方形を基調としているが、南壁が北壁より短く、やや台形ぎみである。規模は、東西・南北とも3.1mを測り、主軸方向は、N-102°-Eをとる。

壁は、直線的にわずかに開いて立ち上がり、確認面からの深さは16cmである。各壁下には、幅18cm、深さ5cm前後の壁溝が、カマド部分と南壁を除いて途切れずに巡っている。

床は、住居中央付近は土間状に硬く締まっているが、壁際はやや軟弱である。ピットは、住居内から2箇所検出されている。P1は、いわゆる貯蔵穴と言われているもので、カマド右側の南東コーナー部



第6図 第1号住居跡

第1号住居跡・第1号土壙土層説明

〈第1号土壙〉

第1層：暗茶褐色土層（白色粒子・ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第2層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第3層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

〈第1号住居跡〉

第4層：暗黄褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）

第5層：暗茶褐色土層（白色粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

〈第1号住居跡カマド土層説明〉

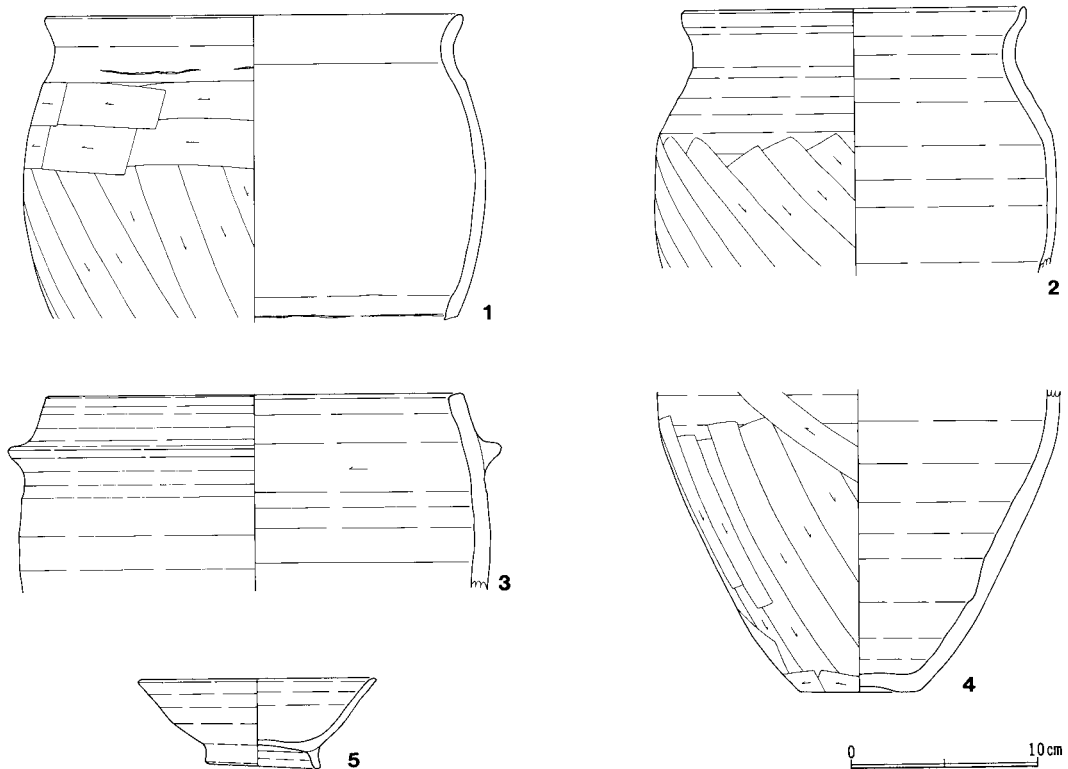
第1層：暗褐色土層（白色粒子・ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

に位置している。平面形は、楕円形ぎみの形態で、規模は62cm×78cm、床面からの深さは15cmある。P 1の壁際掘り込みはほぼ垂直で、底部は平坦であるが、住居内部に向かってはなだらかに立ち上がる。中からはNo.2・4・5の土器が出土している。P 2は、住居南東部のP 1と接する位置にある。平面形はやや方形に近く、規模は25cm×27cmを測る。床面からの深さは12cmである。

カマドは、住居東側壁の南東コーナー部寄りの位置に、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長173cm、幅122cmを測る。燃烧部は、住居の壁を掘り込んで構築されている。燃烧部底面（火床）は、住居の床面とほぼ同じ高さであり、燃烧部内面は非常によく焼けて赤色化している。煙道部は、燃烧部底面から緩傾斜で立ち上がり、煙道部底面・壁面とも焼けていない。住居跡内に袖部の痕跡は見られない。

出土遺物は、住居床面上からNo.1・3の土器が出土し、P 1の貯蔵穴内からNo.2・4・5の土器が出土している。



第7図 第1号住居跡出土遺物

第1号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径(22.2)、残存高16.0。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、黒色粒、白色粒。E.内外-明橙褐色。F.口縁部1/3。G.床面直上。
2	甕	A.口縁部径(18.4)、残存高14.0。B.粘土紐積み上げ成形。C.内外面回転ナデの後胴部下半ケズリ、内面回転ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.暗茶褐色。F.1/4。G.貯蔵穴内。H.酸化焰焼成。
3	羽 釜	A.口縁部(22.2)、残存高10.4。B.粘土紐積み上げ(鏝貼り付け)。C.内外面回転ナデ。D.赤色粒、黒色粒、白色粒。E.内外-淡褐色。F.口縁部1/5。G.床面直上。H.酸化焰焼成。
4	羽 釜	A.底部径6.2。残存高16.0。B.粘土紐積み上げ。C.胴部外面回転ナデの後下半ケズリ、内面回転ナデ。D.片岩粒、白色粒、赤色粒。E.内外-淡茶褐色。F.1/2。G.貯蔵穴内。H.酸化焰焼成。
5	高台付坏	A.口縁部径12.6、器高4.8、高台径6.7。B.ロクロ成形、高台部貼り付け。C.内外面回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外-暗茶褐色。F.3/4。G.貯蔵穴内。H.酸化焰焼成。

第2号住居跡（第8図、図版4）

調査区西端の北寄りに位置し、第1号住居跡と近接している。住居跡の西側半分は調査区外に位置するため、本住居跡の全容は不明である。

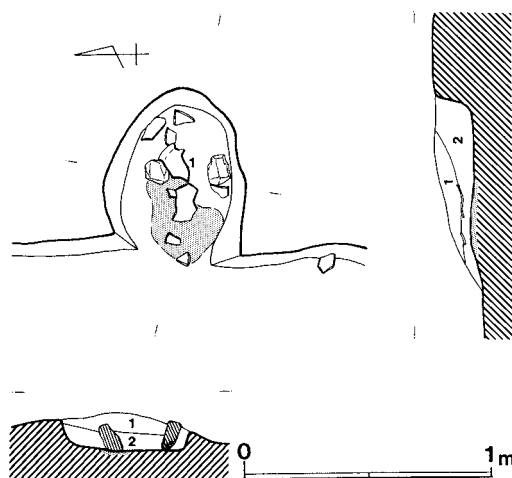
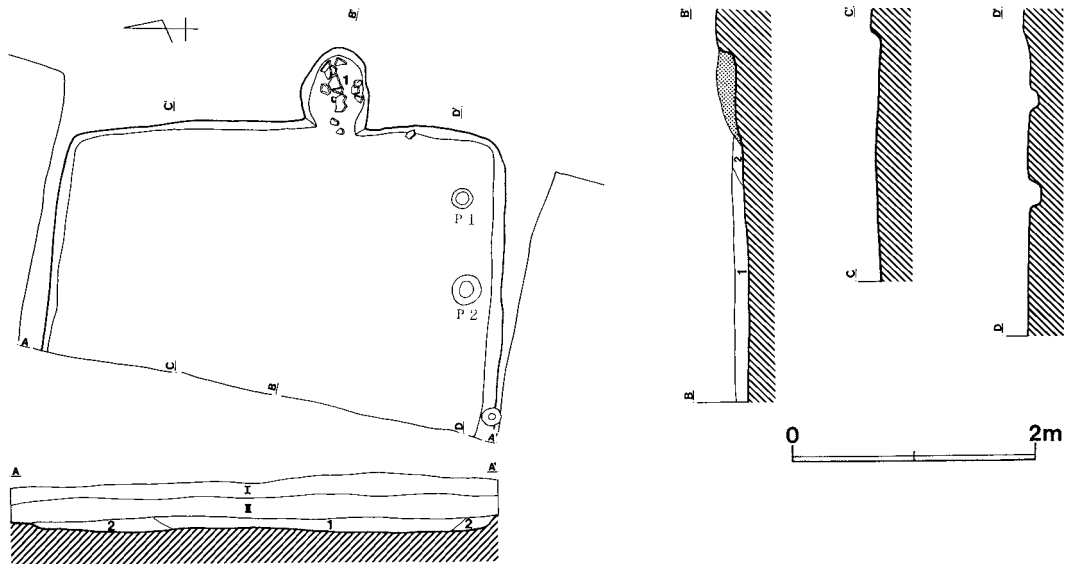
平面形は、方形かあるいは長方形を基調とするものと思われる。規模は、南北方向が3.66m、東西方向は2.38mまで測れる。住居の主軸方向は、N-92°-Eをとる。

壁は直線的に開いて立ち上がり、確認面からの深さは10cmある。調査区内で検出された各壁下には壁溝は確認されなかった。

床面は、わずかに起伏が見られるが、ほぼ平坦である。

ピットは、2箇所検出されている。P1・P2とも平面形は円形で、P1は、南東コーナー部寄りの位置にあり、直径17cmを測り、床面からの深さは8cmある。P2は、P1の西側にあり、直径23cm、深さ10cmである。いわゆる貯蔵穴と呼ばれる土壇状のピットは検出されていない。

カマドは、住居東壁の中央よりやや南側に寄った位置に、壁に対してほぼ直角に付設されている。規



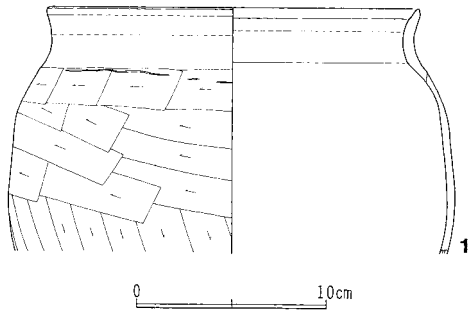
第2号住居跡土層説明

- 第I層：淡灰色土層（A軽石を多量含む。現耕作土。）
- 第II層：暗灰色土層（A軽石を均一に含む。水田層。）
- 第1層：暗褐色土層（白色粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第2層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第2号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色土層（焼土粒子を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第8図 第2号住居跡



第9図 第2号住居跡出土遺物

模は、全長136cm、最大幅60cmを測る。焼部は、住居の壁を掘り込んで構築されている。火床は、掘り込みがほとんどなく、住居の床面とほぼ同じである。焼部の中央よりやや左寄りの位置に、石製支脚を1個伴う。煙道部はすでに削平されており、確認されなかった。

出土遺物は、非常に少なく、カマド内からNo.1の土器が出土しただけである。

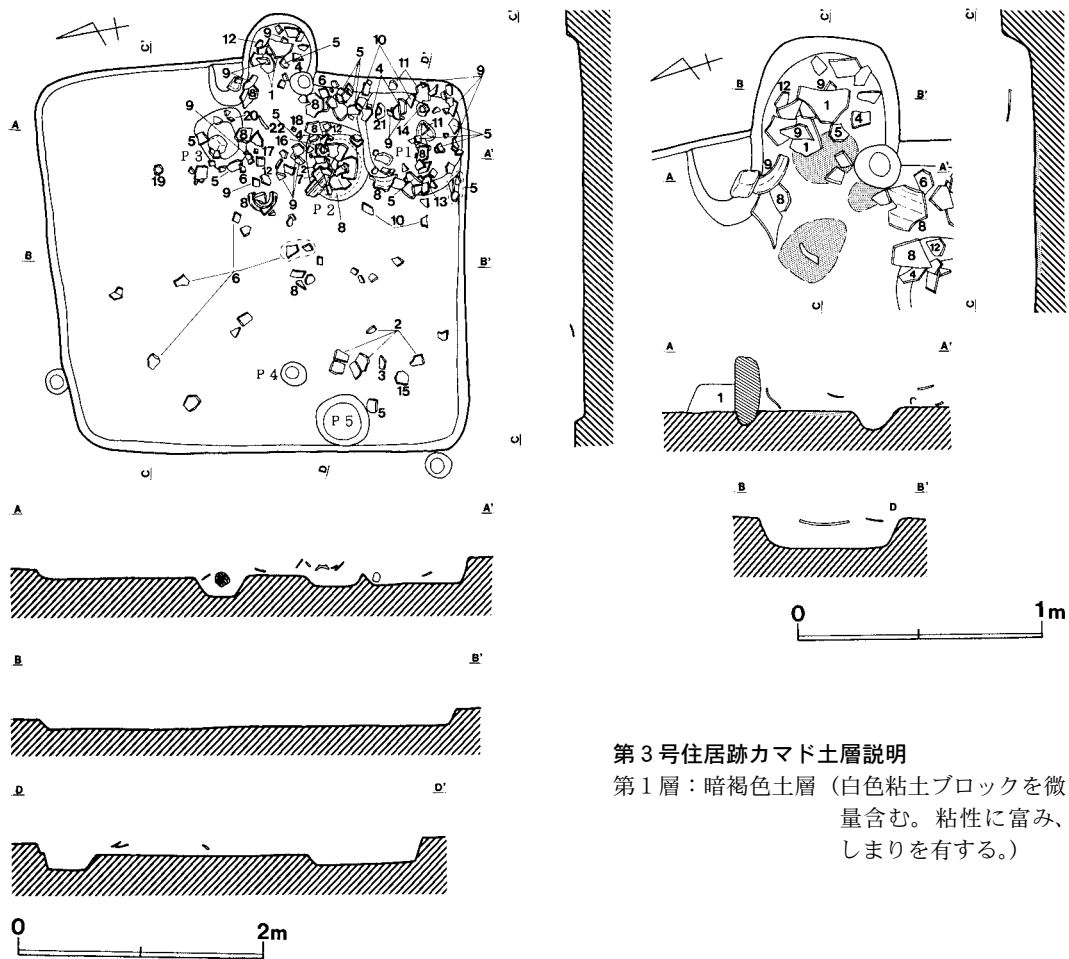
第2号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径(19.8)、残存高13.0。B.粘土紐積み上げ成形。C.口縁部内外ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外-淡褐色。F.1/2。G.カマド内。
---	---	--

第3号住居跡(第10図、図版5)

調査区の中央からやや北西側寄りに位置し、第6号溝跡を切っている。南東側に第4号住居跡が近接し、南西側には第16号掘立柱建物跡、南側には第17号・第18号掘立柱建物跡がある。

平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ正方形もしくは台形を呈している。住居の東側壁が西側壁に



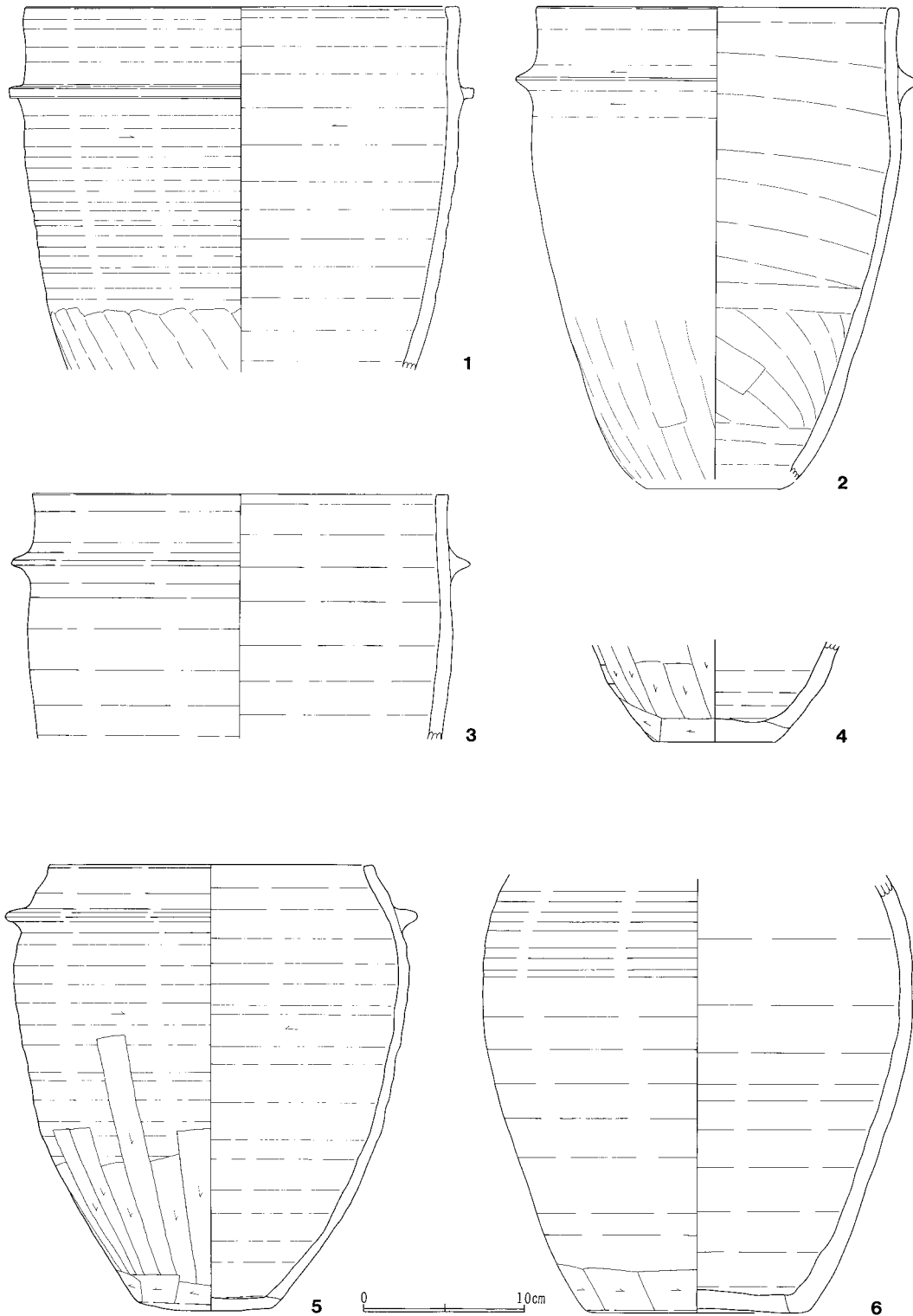
第3号住居跡カマド土層説明

第1層：暗褐色土層（白色粘土ブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第10図 第3号住居跡

比べて長いため、北西コーナー部が北に開いている。規模は、南北方向3.44m、東西方向3.12mであり、主軸方位はN-99°-Eをとる。

壁は、直線的にわずかに開いて立ち上がり、確認面からの深さは10cmを測る。住居の各壁下には壁溝

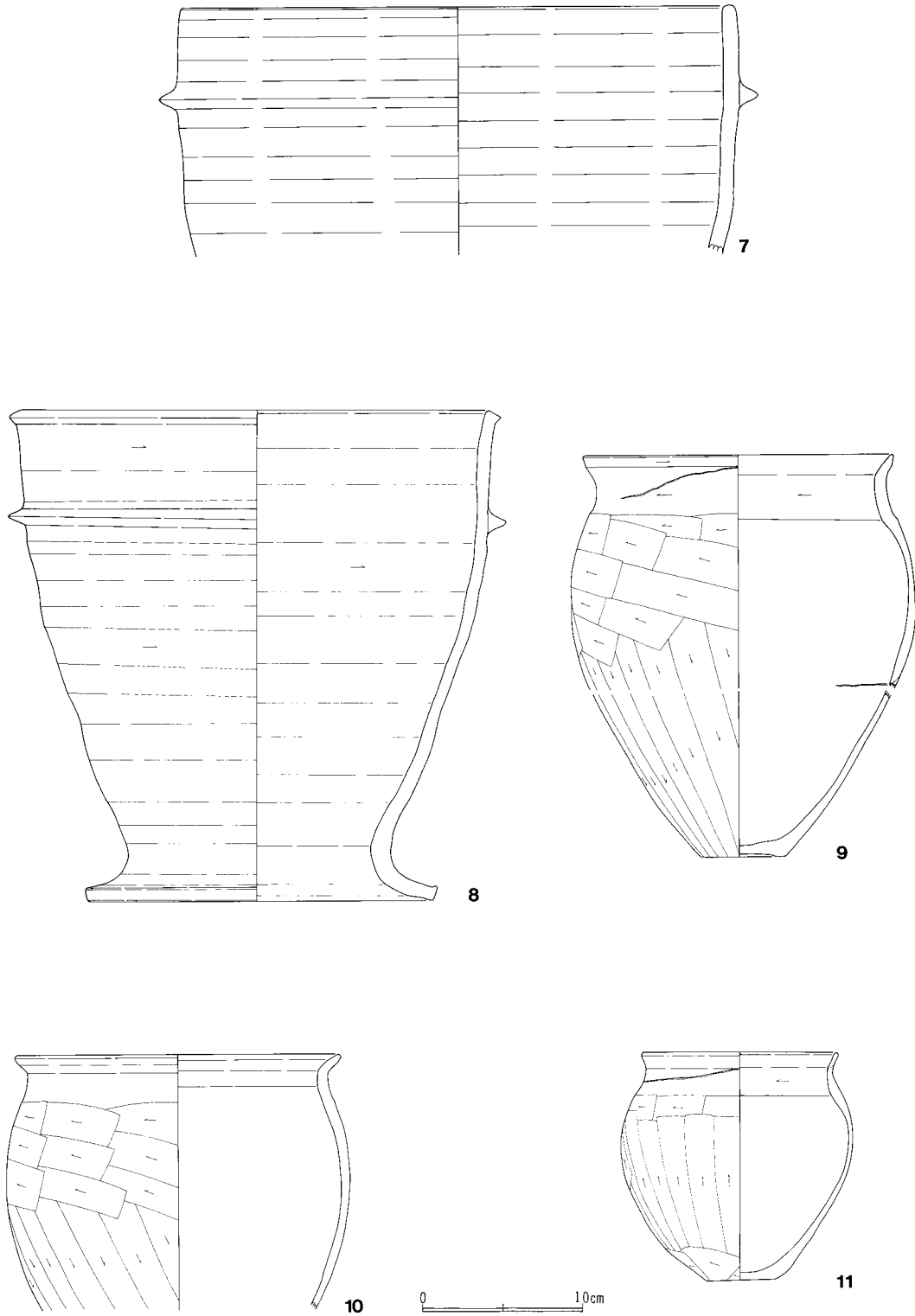


第11図 第3号住居跡出土遺物(1)

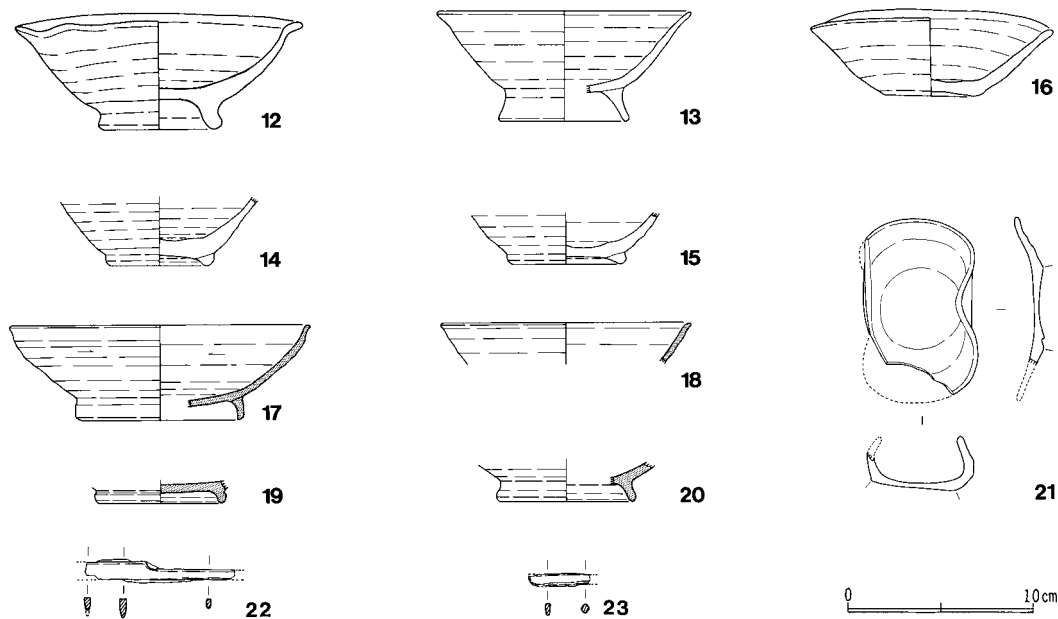
は検出されなかった。

床面はほぼ平坦であるが、全体的にやや軟弱である。

ピットは、5箇所確認されている。P 1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、住居の南東コーナー



第12図 第3号住居跡出土遺物(2)



第13図 第3号住居跡出土遺物(3)

部にある。平面形は隅丸方形で、規模は80cm×80cm、深さは床面から7cmある。ピット内の底面は平坦で、壁はわずかに外傾して立ち上がる。中からはNo.5・11・14・21などの多くの土器が破片になって出土している。P2は、カマド右前面にあり、規模は62cm×47cm、確認面からの深さは7cmである。P3は、カマド左前面にあり、規模は40cm×47cm、深さ18cmである。P4は、住居の西側壁寄りにあり、直径20cm程度の円形を呈している。深さは床面から26cmを測る。P5は、住居の西側壁に接した位置にある。直径42cm程度の円形を呈し、深さは11.5cmある。

カマドは、住居東側壁の中央部に位置し、壁を直角に掘り込んで構築されている。規模は、全長152cm、最大幅166cmを測る。燃烧部は、住居の壁外に位置する。燃烧部床、及び焚き口付近が焼けて赤化していた。袖部は、左側袖が残存している。白色粘土ブロックを含む粘質土で築かれており、その補強のため角柱上の石を内側に立てている。カマド奥壁は急角度で立ち上がっているが、煙道部はすでに削平されているため不明である。

出土遺物は、カマドの内外から住居の南東コーナー部付近にかけて、接合可能な多くの土器が破片になって出土している。土器以外では、鉄器の破片も2個体見られる。

第3号住居跡出土遺物観察表

1	羽 釜	A.口縁部径 (26.6)、残存高22.3。B.粘土紐積み上げ (鏝貼り付け)。C.内外面回転ナデの後、胴部外面下半ナデ。D.片岩粒、白色粒、赤色粒。E.内外一茶褐色。F.1/4。G.カマド内。
2	羽 釜	A.口縁部径 (22.2)、残存高29.0。B.粘土紐積み上げ (鏝貼り付け)。C.口縁部ヨコナデ、胴部外面ケズリ後ナデ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒、赤色粒、小石。E.外一淡灰褐色、内一暗褐色。F.1/5。G.P2内出土、床面直上、床付近。H.酸化焰焼成。
3	羽 釜	A.口縁部径 (25.4)、残存高15.0。B.粘土紐積み上げ (鏝貼り付け)。C.口縁部ヨコナデ、胴部内外面回転ナデ。D.小石、白色粒。E.外一暗灰褐色、内一淡茶灰色。F.口縁部1/4。G.床面直上、床面付近。H.還元焰焼成 (生焼け)。
4	羽 釜	A.底部径7.4、残存高6.2。B.底部円盤外周で粘土紐積み上げ。C.外面回転ナデの後ケズリ、内面回転ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外一淡灰色。F.底部のみ。G.カマド内、P1 (貯蔵穴) 内、P2内。H.須恵質、外面にススの付着あり。

5	羽 釜	A.口縁部 (19.8)、底部径8.8、器高27.3。B.粘土紐積み上げ。C.内外面ヨコナデ、胴部下半はヨコナデ後ケズリ、底部外面ナデ。D.小石、白色粒、黒色粒。E.内外-淡灰褐色。F.2/3。G.カマド内、床面直上、P1 (貯蔵穴)、P2、P3、床付近。H.須恵質。
6	須恵器 甕	A.底部径13.7、残存高26.5。B.粘土紐積み上げ。C.内外面ナデ、胴部下端ケズリ。D.片岩粒、白色粒、黒色粒。E.内外-淡灰褐色。F.1/3。G.床面直上、床付近、P2内。
7	大形甕	A.口縁部径 (34.0)、残存高15.2。B.粘土紐積み上げ (鏝貼り付け)。C.内外回転ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.外-淡灰色、内-淡灰褐色。F.1/4。G.P2内。H.還元焰焼成 (不良)、器表面は風化している。
8	大形甕	A.口縁部径28.5、器高30.1、底部径20.95。B.粘土紐積み上げ。C.内外面ヨコナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外-淡灰褐色。F.3/4。G.床面直上、カマド内、P2内、覆土。H.胴上半は淡灰褐色、下半は橙褐色、接合部で色が違うことから破碎後二次焼成を受けたと思われる。
9	甕	A.口縁部径19.0、推定高 (24.6)、底部径5.2。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ、外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒、黒色粒。E.外-淡茶褐色、内-暗茶褐色。F.3/4。G.カマド内、床付近、P1 (貯蔵穴)、P2内、覆土。H.外面にスス付着。
10	甕	A.口縁部径 (20.0) 器高 (15.6)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒、黒色粒。E.内外-暗橙褐色。F.1/4。G.床面直上、床付近、P1 (貯蔵穴)、覆土内。
11	小形甕	A.口縁部径 (12.0)、器高14.05、底部径4.2。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外-暗茶褐色。F.1/3。G.P1 (貯蔵穴) 内、覆土。
12	須恵器 高台付坏	A.口縁部径 (13.5~15)、器高6.1~5.6、高台径6.6。B.ロクロ成形。C.高台貼り付け後ヨコナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外-淡灰色。F.1/2。G.P2、カマド内、床面付近。H.かなり歪んでいる。
13	高台付坏	A.口縁部径 (13.4)、器高5.8、高台径 (7.0)。B.ロクロ成形 (高台部貼り付け)。C.内外回転ナデ。D.小石、赤色粒、白色粒。E.外-暗褐色、内-淡褐色。F.1/4。G.P1 (貯蔵穴) 内。H.酸化焰焼成、器表面は荒れている。
14	高台付坏	A.高台径5.8。B.ロクロ成形、高台部貼り付け。C.内外面とも回転ナデ。D.片岩粒、赤色粒。E.内外-暗茶褐色。F.体部下半のみ。G.P1 (貯蔵穴) 内。H.酸化焰焼成、器表面は荒れている。
15	高台付坏	A.高台径6.4。B.ロクロ成形、高台部貼り付け。C.回転ナデ。D.赤色粒、小石、白色粒。E.内外-淡褐色。F.体部下半のみ。G.覆土中。H.酸化焰焼成、器表面は荒れている。
16	須恵器 坏	A.口縁部径 (11~13)、器高 (4~4.7)、底部径5.2。B.ロクロ成形。C.回転ナデ。D.白色粒。E.内外-淡灰色。F.2/3。G.P2内。H.器表面は荒れている。
17	灰釉陶器 碗	A.口縁部径 (16.0)、器高5.0、高台部径 (9.0)。B.ロクロ成形、高台部貼り付け。C.高台部内面回転ナデ。D.白色粒。E.内外-淡白灰色。F.1/2。G.床面付近。H.内外面に部分的に灰釉が付いている。
18	灰釉陶器 碗	A.口縁部径 (13.4)。B.ロクロ成形。D.白色粒。E.内外-淡灰褐色。F.1/5。G.床面付近。H.内外に施釉。
19	灰釉陶器 碗	A.高台径7.0。B.ロクロ成形。C.底部回転ナデ (右回り)。D.白色粒。E.内外-淡灰白色。F.底部のみ。G.床面付近。H.ロクロ回転右回り。
20	灰釉陶器 碗	A.高台径 (7.4)。B.ロクロ成形。C.回転ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.外-淡灰褐色、内-淡灰色。F.1/4。G.P3内。H.内面の一部に釉あり。
21	耳 皿	A.底部径4.4、器高2.9。B.ロクロ成形、口縁部曲げ。D.片岩粒、白色粒、赤色粒。E.内外-暗褐色。F.3/4。G.P1 (貯蔵穴) 内。H.酸化焰焼成、器表面は風化している。
22	刀 子	A.残存長7.9、残存刃部長3.2、刃部幅1.1。G.床面直上。H.地金中心まで錆が浸透。
23	鉄製品	A.残存長3.24、残存幅0.7。G.覆土。H.地金中心まで錆が浸透。

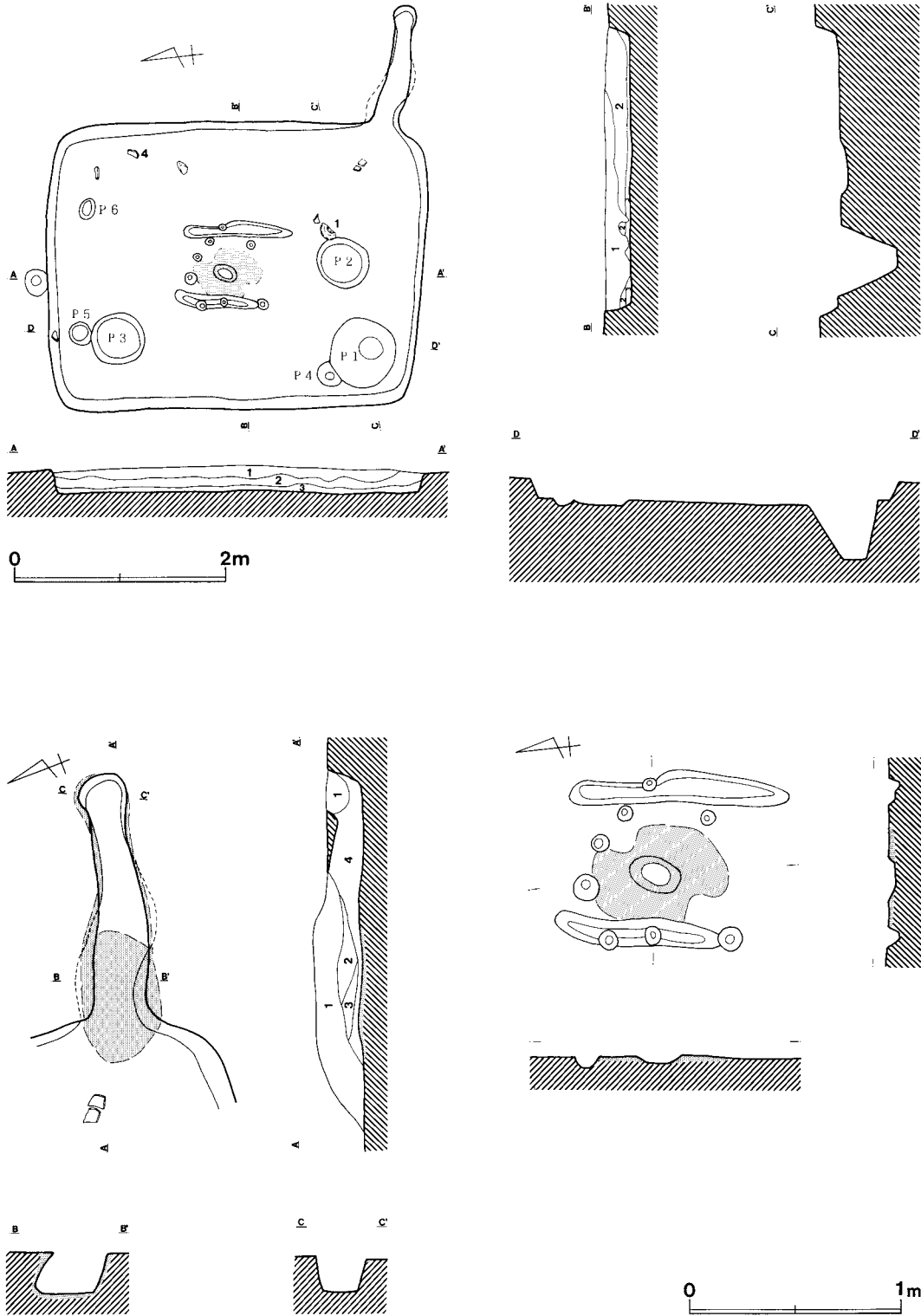
第4号住居跡 (第14図、図版6・7)

本住居跡は、調査区中央からやや北西側に位置し、重複する第6号溝跡を切っている。本住居跡の北西側には第3号住居跡が近接し、南側には第17・18号掘立柱建物跡がある。

平面形は、比較的整った長方形を呈している。規模は、南北方向3.45m、東西方向2.64mを測り、主軸方位はN-98°-Eをとる。

壁は、直線的に立ち上がり、確認面からの深さは20cmある。床面は、ほぼ平坦で、比較的硬く締まっている。住居中央部には炉跡が検出されている。

炉は、住居中央部に位置する。規模は65cm×42cmを測り、平面形は不整形である。床面が焼けて赤色化しているだけの地床炉であるが、炉の周囲や内部に複数の浅い小ピットが見られ、炉の東西両側に平



第14図 第4号住居跡

第4号住居跡土層説明

- 第1層：暗灰色土層（B軽石を多量に、ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）
- 第2層：暗灰色土層（ロームブロックを均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：黒灰色土層（ロームブロック・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4号住居跡カマド土層説明

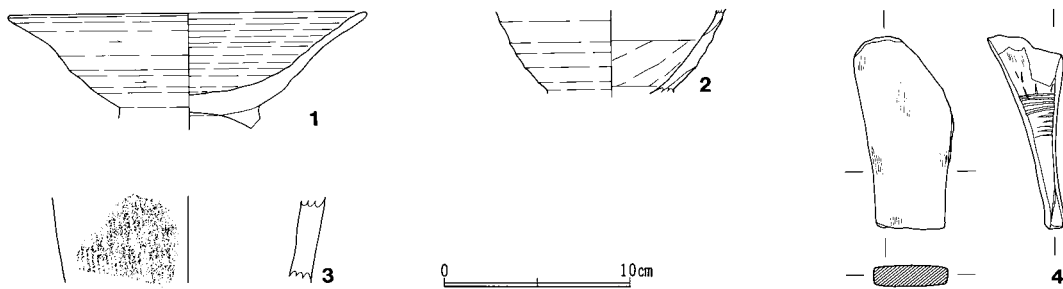
- 第1層：暗灰色土層（ローム粒子・鉄斑・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
- 第2層：暗褐色土層（鉄斑・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性・しまりともない。）
- 第4層：黒灰色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

行する浅く小規模で直線的な溝が存在することから、何だかの構造物や付帯施設を伴う炉と考えられる。

住居跡内からは6箇所のピットが検出されている。P1は、住居の南西コーナー部に位置し、その形態からいわゆる貯蔵穴と考えられるものである。平面形は、不整円形を呈し、規模は60cm×63cm、深さ51cmを測る。P2は、住居中央から南側寄りにあり、住居の東・西壁から等間隔の位置にある。平面形はほぼ円形で、直径48cm、深さ7cmを測る。P3は、住居北西コーナー部付近にある。平面形は不整円形を呈し、径47cm×50cm、深さは3cmある。P4は、住居南西コーナー部付近にあり、重複するP1を切っている。平面形は、径17cm×22cm、深さ10cmを測る。P5は、住居北西コーナー部に位置し、P3とわずかに接している。平面形は円径を呈し、直径22cm、深さ5cmである。P6は、住居北東コーナー部付近に位置する。平面形は楕円形であり、直径14cm×19cm、深さ6.5cmである。

カマドは、住居の南東側コーナー部に位置し、壁に対し直角よりやや南側に傾いて付設されている。規模は全長116cm、最大幅20cmを測る。燃烧部は、第6号住居跡のカマドの構造から見て、住居の壁外にあったものと考えられる。燃烧部から連続する煙道部との形態上の差異はほとんどなく、燃烧部底面は住居床面よりわずかに高く、煙道部の底面もほぼ同じ高さで東へ延び、急傾斜して立ち上がっている。

出土遺物は、非常に少なく、本住居跡に伴うものとしては、床面上からNo.1の土器とNo.4の砥石が出土しているだけである。

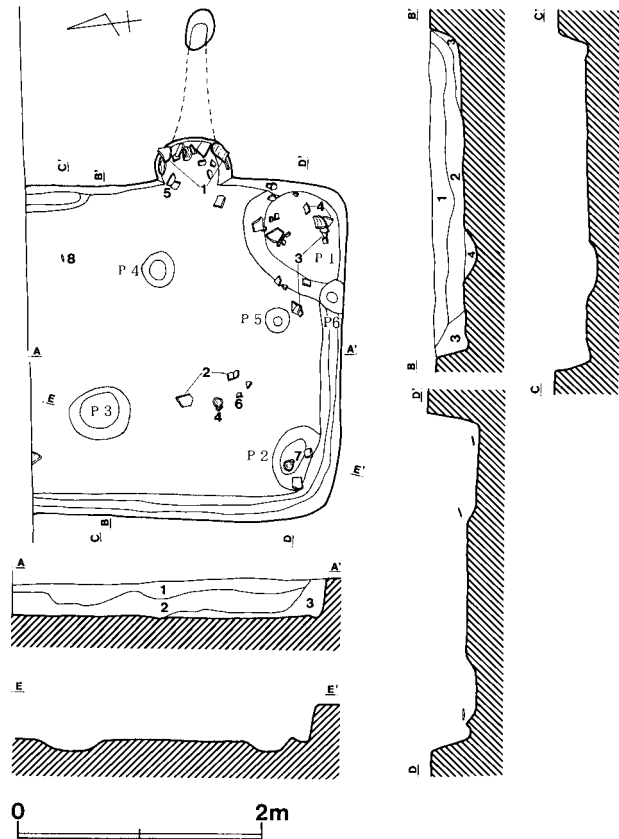


第15図 第4号住居跡出土遺物

第4号住居跡出土遺物観察表

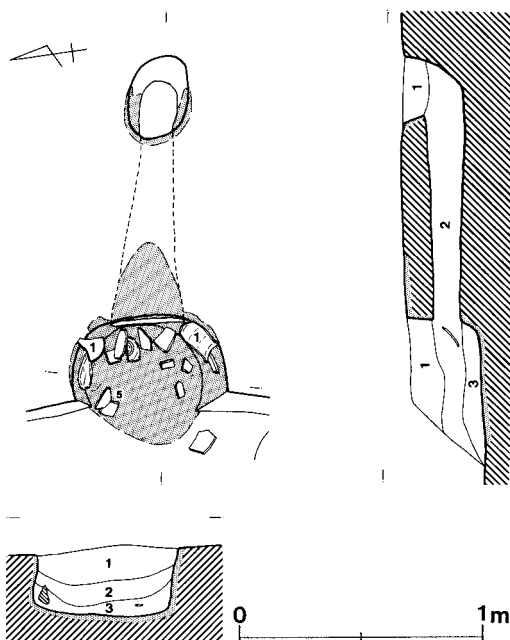
1	高台付埴	A.口縁部径19.2、器高6.1。B.ロクロ成形、高台部貼り付け。C.体部回転ナデ、底部ナデ。D.白色粒、片岩粒、赤色粒。E.内外—淡茶褐色。F.1/2。G.床面直上。H.酸化焰焼成。
2	埴	A.残存高(4.5)。C.外面回転ナデ、内面ナデ。D.赤色粒、白色粒、灰色粒。E.内外—暗橙褐色。F.1/4以下。G.覆土。H.2次焼成を受けている。

3	埴輪	A.残存高5.0、残存幅5.4。B.粘土紐積み上げ。C.外面ハケ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外一明褐色。F.破片。G.覆土。
4	砥石	A.残存長10.0、最大幅4.7、高さ4.0、重量135g。D.安山岩。G.床面付近。H.全面を使用し、下部は欠損後も使用している。右側面に幅、深さとも1mm前後の溝を刻んでいる。



第5号住居跡土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層（ローム粒子・マンガン塊・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗灰褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗灰色土層（ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗灰色土層（ロームブロック・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第5号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層（ローム粒子・マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗灰色土層（ローム粒子・マンガン塊・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗灰色土層（焼土粒子を多量に、ローム粒子・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第16図 第5号住居跡

第5号住居跡（第16図、図版8）

調査区北端の中央部付近に位置する。住居跡の北側は調査区外であるため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、方形もしくは長方形を呈すると思われる。規模は、東西方向2.72m、南北方向は2.50mまで測れる。主軸方位は、N-98°-Eを向いている。

壁は、ほぼ直線的にやや開いて立ち上がり、各壁下には壁溝が見られる。床面は、ほぼ平坦で、確認面からの深さは30cmである。

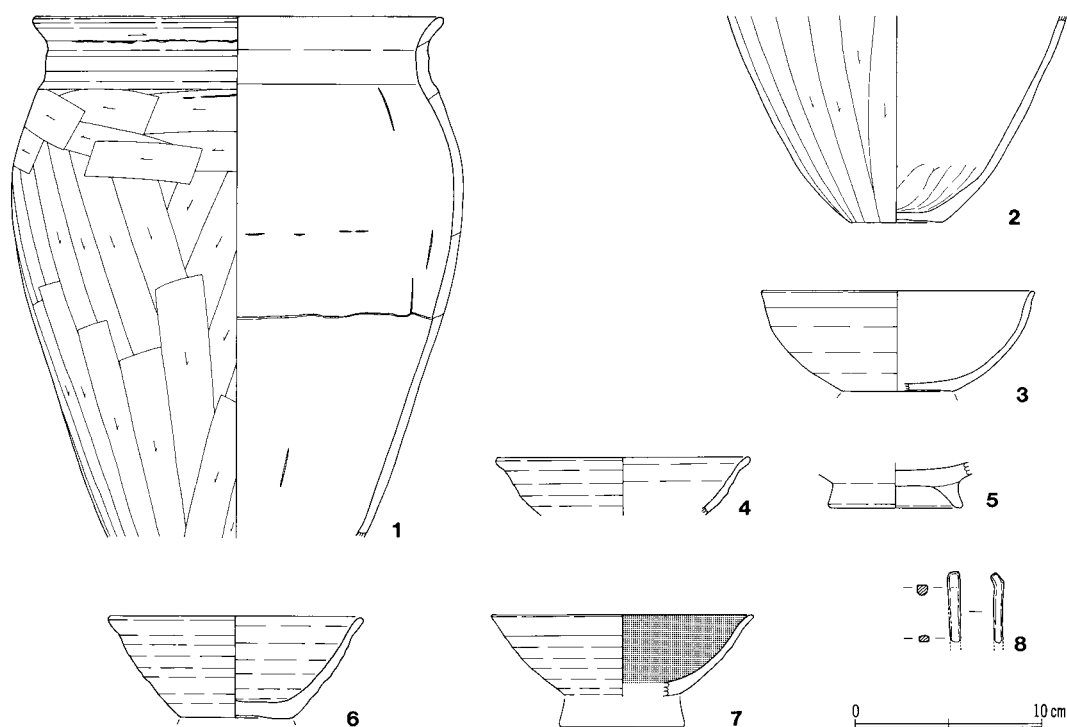
ピットは、住居跡内より5箇所検出されている。P1は、いわゆる貯蔵穴と呼ばれるもので、住居南東コーナー部に位置している。規模は、84cm×86cm、深さ13cmを測る。底面は広く平坦で、壁際は垂直に掘り込まれ、住居内方向の壁は緩やかに立ち上がる。P2は、南西コーナー部に位置する。平面形は、楕円形を呈し、30cm×50cm、深さ7cmである。P3は、住居の北西寄りにあり、平面形は楕円形で30cm×40cm、深さ9cmである。P4は、カマド左前面にある。直径30cm前後の円形を呈し、深さ6.5cmある。P5は、P1の西側近くにあり、平面形はほぼ円形で、直径19cm、深さ4cmほどである。P6は、P1の西側に重複し、南壁に接している。平面形は20cm×27cmの楕円形を呈し、深さは12cmである。

カマドは、住居東壁の中央やや南側寄りの位置に、壁に対して直角に構築されている。規模は、全長140cm、最大幅42cmである。燃焼部は、住居の壁を掘り込んで構築されている。内面はよく焼けて赤色化している。燃焼面（火床）は、住居の床面とほぼ同じ高さで、ほぼ水平である。煙道部は、燃焼面から8cmほど上がった所から、水平に掘り込まれている。袖は、住居跡内からは検出されていない。

出土遺物は、カマド内やP1の貯蔵穴内から土器が出土している。土器以外では、床面からNo.8の鉄釘の破片も出土している。

第5号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.口縁部径(21.8)、残存高27.5。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外-淡茶褐色。F.1/4。G.カマド内。
2	甕	A.底部径5.0、残存高10.9。B.粘土紐積み上げ。C.外面ケズリ、内面ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外-暗茶褐色。F.1/2。G.床面直上。
3	埴	A.口縁部径(14.6)、器高5.3、底部径(6.0)。B.ロクロ成形、底部外面回転糸切り。C.口縁部ヨコナデ、体部内外面丁寧なナデ。D.白色粒。E.内外-明茶褐色。F.1/4。G.カマド内。H.酸化焙焼成。
4	須恵器 坏	A.口縁部径(13.6)、残存高(3.0)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。D.白色粒、黒色粒。E.内外-暗灰色。F.1/2。G.P1(貯蔵穴)内、床面付近。H.還元焙焼成。
5	高台付埴	A.高台部径7.2、高台部高1.1。B.高台部貼り付け。C.内外面回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外-淡茶褐色。F.高台部のみ。G.P2内。H.酸化焙焼成。器表面は風化している。
6	坏	A.口縁部径(13.6)器高5.3、底部径6.0。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。D.片岩粒、白色粒、赤色粒。E.内外-淡灰褐色。F.1/2。G.P1(貯蔵穴)内、床面直上。H.還元焙焼成。
7	高台付埴	A.口縁部径(14.0)。残存高(4.2)。B.ロクロ成形。C.口縁部ヨコナデ、体部外面回転ナデ、内面ミガキ。D.白色粒。E.外-淡茶褐色、内-黒色。F.口縁部1/4。G.床面直上。H.体部内面黒色処理。
8	鉄製釘	A.残存長3.2、幅0.6。G.床面直上。F.上半のみ。H.錆化が進んでいる。



第17図 第5号住居跡出土遺物

第6号住居跡（第18図、図版9）

調査区の中央部に位置し、重複する第6号溝跡と第7号住居跡を切っている。本住居跡の北側に位置する第1号掘立柱建物跡と住居の長軸方向を揃えており、両者の間には第10～14号土壙が密集して分布している。

平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ長方形を呈し、規模は南北方向3.82m、東西方向5.22mを測る。主軸方位はN-91°-Eをとる。

壁は、やや開いて直線的に立ち上がり、確認面からの深さは21cmある。各壁下には幅16cm、深さ4cmほどの壁溝がカマドと南壁の一部を除いて、途切れずに巡っている。また、住居北側壁下からは間仕切状の溝がL字状に延びている。

床面は、多少の起伏が見られ、比較的硬く締まっている。カマド周辺や住居中央付近の床面には、広範囲に焼けて赤色化した部分が見られ、また床面上には多量の焼土や炭化材などが検出されていることから、本住居跡は火災により焼失したものと推測される。おそらくその火元は、焼け方から見てカマド周辺であったものと思われる。

ピットは、住居内からP1の1箇所が検出されている。P1は、住居南東側の壁際に位置し、その形態や位置から貯蔵穴と考えられる。平面形は、やや不整の円形を呈し、規模は67cm×72cm、深さは69cmある。P1内からは、覆土上層から拳大の自然石が1個出土している。

カマドは、住居の南東コーナー部付近に位置し、壁に対してやや南側に向いて付設されている。地山ローム層を掘り抜いた遺存状況の良いカマドで、トンネル状の煙道部とともに燃燒部の天井掛け口も残存している。燃燒部は、住居の壁外に掘り込んで構築されており、天井部の掛け口が住居壁から10cmほ

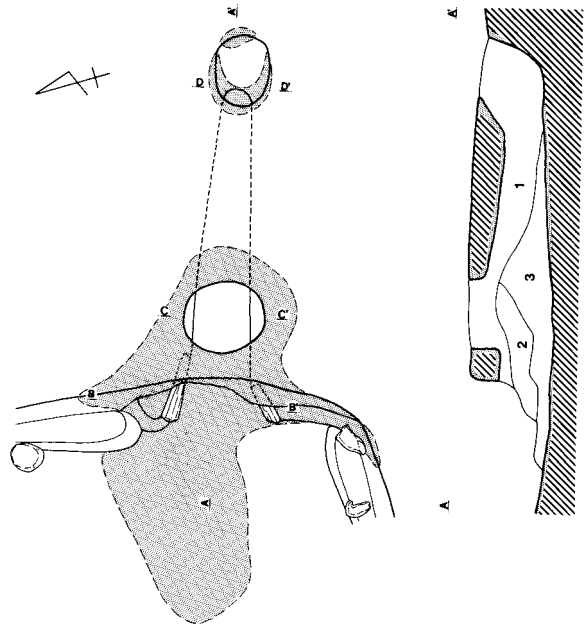
響も強いと考えられる。

出土遺物は、非常に少ないが、覆土中からNo.1とNo.2の土器片が、床面上からNo.3の棒状の鉄製品が出土している。

第6・7号住居跡土層説明

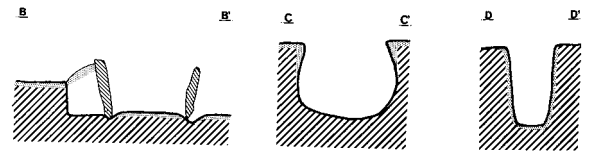
〈第6号住居跡〉

- 第1層：暗灰色土層（B軽石・焼土粒子を均一、炭化粒子・ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
- 第2層：淡灰色土層（B軽石・ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗灰色土層（焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗灰色土層（炭化粒子を多量に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第5層：暗赤褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第6層：赤褐色土層（焼土層。）
- 第7層：淡灰色土層（焼土粒子・ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第8層：黒色土層（炭化粒子を多量に含む。粘性・しまりともない。）



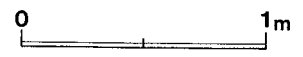
〈第7号住居跡〉

- 第9層：暗灰色土層（ローム粒子・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第10層：暗黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

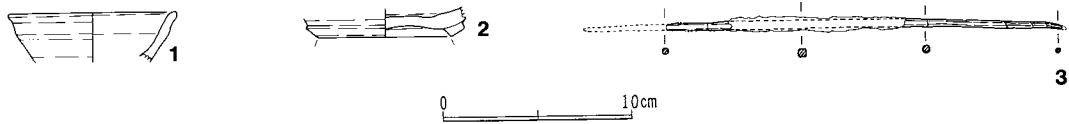


第6号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗灰色土層（B軽石・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
- 第2層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：黒灰色土層（焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）



第19図 第6号住居跡カマド



第20図 第6号住居跡出土遺物

第6号住居跡出土遺物観察表

1	坏	A.口縁部径 (9.0)、残存高 (2.6)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。D.微小雲母片。E.内外-淡褐色。F.1/8以下。G.覆土。
2	高台付	A.高台径 (7.0)。B.底部外面回転糸切り、高台部貼り付け。C.外面高台部貼り付け後ナデ、底部内面回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外-淡黄褐色、内-暗灰色。F.底部1/3。G.覆土。
3	鉄製品	A.残存長21.2、最大幅 (0.5)。B.中部では断面がはっきりした方形であるが、両端部に向かうと断面の角が丸みを帯び端部では断面はほぼ円形。G.床面直上。H.地金内部まで錆が進行。

第7号住居跡（第18図、図版9）

調査区の中央に位置し、重複する第6号溝跡を切り、第6号住居跡に切られている。南側には第2号掘立柱建物跡が近接している。

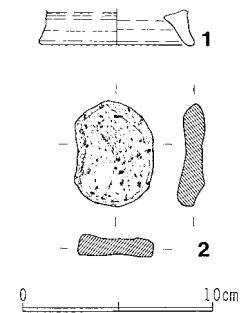
平面形は、方形もしくは長方形を呈すると思われる。規模は、東西方向3.57m、南北方向は2.5mまで測れる。住居跡の東西方向（南側壁）の方位は、 $N-94^{\circ}-E$ をとる。

壁は、わずかに開いて立ち上がり、確認面からの深さは24cmある。残存する各壁下には、壁溝は検出されていない。

床面は、多少起伏が見られるがほぼ平坦である。中央部には焼けて赤色化したところが見られ、炭化材も検出されている。

ピットは、住居内から3箇所検出されている。P1は、南東コーナー付近に位置する。平面形は円形で、直径27cm、深さ4.5cmである。P2は、南西コーナー付近に位置する。平面形は46cm×50cmのやや楕円形ぎみの形態を呈し、深さは30cmある。P3は、住居中央よりに位置する。30cm×43cmの楕円形を呈し、深さは3cmと浅い。P3内からは自然石が1個出土している。

出土遺物は、非常に少なく、高台付坏の高台部片（No.1）と、角閃石安山岩製の扁平で楕円形状を呈する砥石か磨石（No.2）が1個体出土しただけである。



第21図 第7号住居跡出土遺物

第7号住居跡出土遺物観察表

1	高台付	A.高台径(10.2)、高台高(1.9)。B.高台部貼り付け。C.回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外-暗褐色、内-褐色。F.高台部のみ1/8以下。G.覆土。
2	石製品	A.全長5.6、幅4.0、厚み1.4。D.角閃石安山岩。F.完形。G.覆土。H.外周を磨っている。

第8号住居跡（第22図、図版10）

調査区南端の中央付近に位置し、西側には第4号掘立柱建物跡と第5号掘立柱建物跡が、南側には第3号溝跡が近接している。

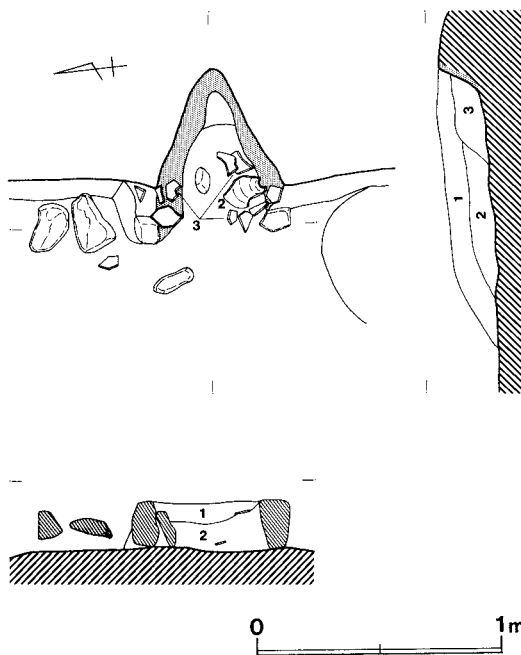
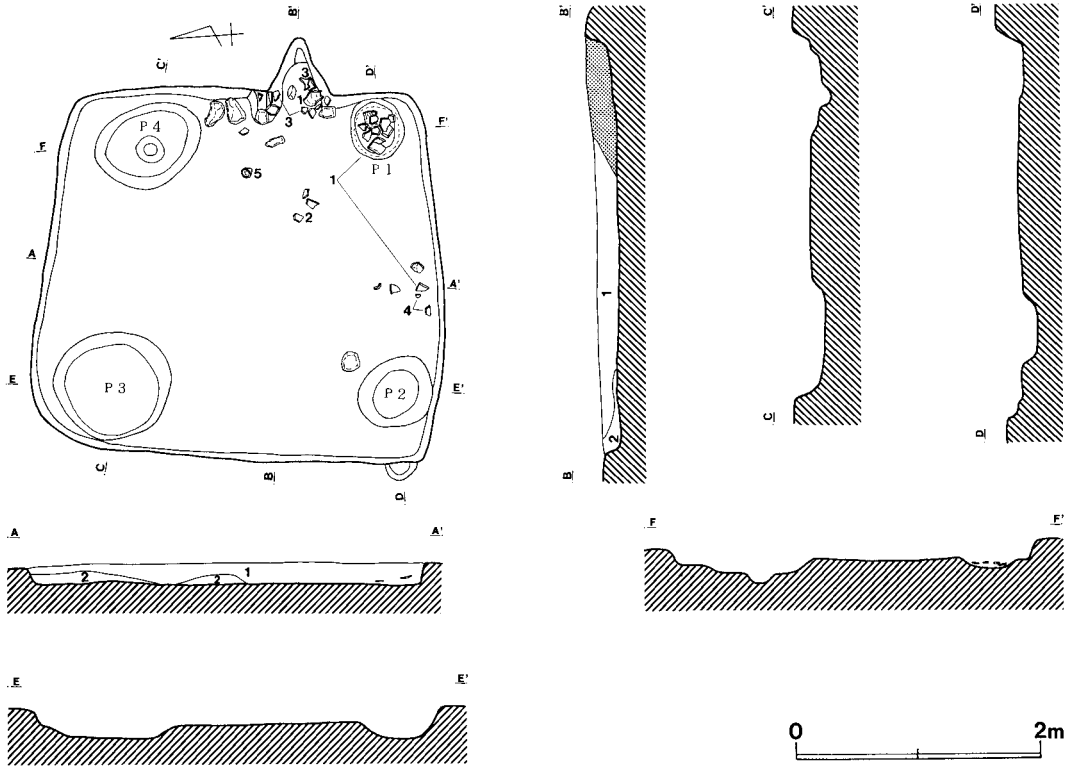
平面形は、コーナー部がやや丸みをもつ方形ぎみの形態を呈し、規模は南北方向3.28m、東西2.95mを測る。主軸方位は、 $N-96^{\circ}-E$ をとる。

壁は、わずかに開いて立ち上がり、確認面からの深さは16cmを測る。各壁下には壁溝は検出されていない。

床面は、中央部分がわずかに高いが、ほぼ平坦に作られている。

ピットは、住居跡内から4箇所検出されている。P1は、南東コーナー部に位置する。平面形は、42cm×49cmの楕円形で、深さ6cmある。P2は、南西コーナー部付近に位置する。55cm×64cmの楕円形を呈し、深さ16cmある。P3は、北西コーナー部付近に位置する。平面形は82cm×96cmの楕円形を呈し、深さ13cmある。P4は、北東コーナー部付近に位置する。62cm×88cmの楕円形を呈し、深さは7cmを測る。ピット内の中央部には、さらに直径22cm・深さ10cmほどの小ピットを伴う。

カマドは、住居東側壁の中央やや南寄りの位置に、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長70cm、最大幅68cmを測る。燃烧部は、住居の壁を掘り込んで構築されている。燃烧部底面（火床）は、住居の床面とほぼ同じ高さで、その中央やや左側寄りに片岩を使用した石製支脚が1個立てられている。燃烧部内面は、良く焼けて赤色化している。煙道部は、燃烧部奥壁から、急角度で外傾して立ち上がるものと思われる。袖部は、粘質ローム土によって築かれ、先端部に角柱状の片岩を立てて補強している。



第8号住居跡土層説明

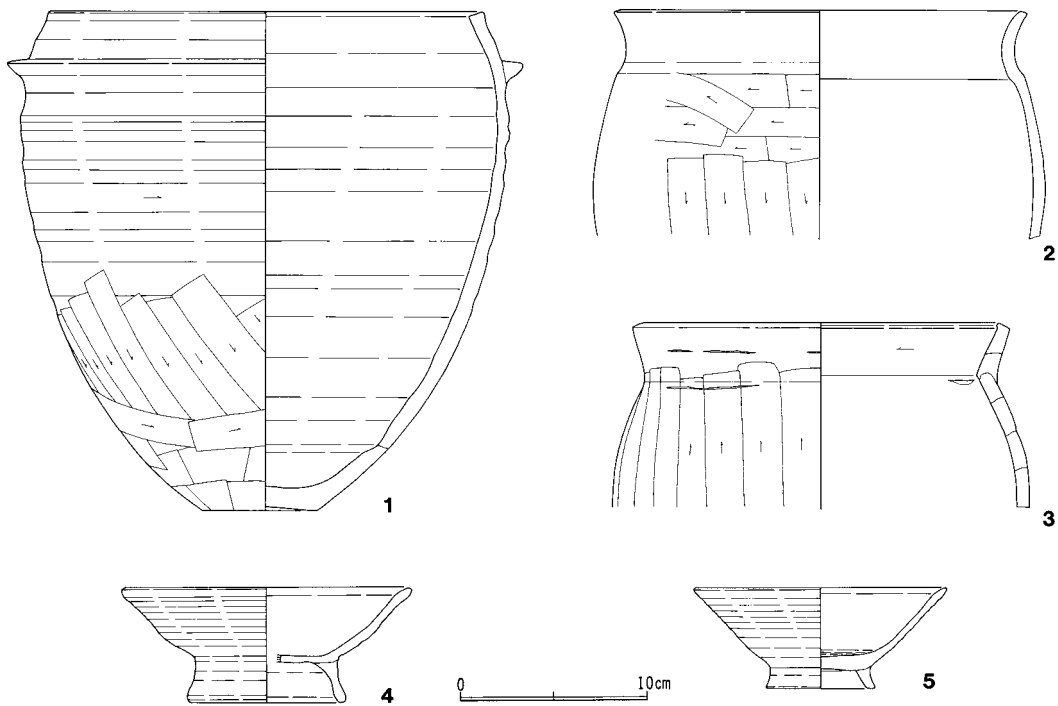
- 第1層：暗灰褐色土層（鉄斑を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗茶褐色土層（鉄斑・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第8号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗灰色土層（鉄斑・マンガン塊を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗灰色土層（鉄斑・マンガン塊・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第22図 第8号住居跡

出土遺物は、羽釜・甕・高台付碗などがあり、カマドやP 1の内外やその周辺から出土している。



第23図 第8号住居跡出土遺物

第8号住居跡出土遺物観察表

1	羽釜	A.口縁部径(23.2)、器高26.3、底部径6.2。B.粘土紐積み上げ。C.内外回転ナデ、外面下半ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外-暗褐色。F.1/2。G.カマド内。P 1内。H.酸化焰焼成。
2	甕	A.口縁部径(22.0)、残存高12.0。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒、片岩粒、白色粒。E.暗橙褐色。F.1/4。G.カマド内、覆土。H.器表面は風化している。
3	甕	A.口縁部径(20.0)、残存高9.7。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部ヨコナデ、胴部外面ケズリ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外-暗褐色。F.1/3。G.カマド内。
4	高台付碗	A.口縁部径(15.4)、器高6.1、高台径(9.4)。B.ロクロ成形、高台部貼り付け。C.回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外-明橙褐色。F.1/4。G.床面直上。H.酸化焰焼成。
5	高台付碗	A.口縁部径(13.4)、器高5.3、高台径5.8。B.ロクロ成形、高台部貼り付け。C.回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外-明橙褐色。F.1/4。G.覆土。H.酸化焰焼成。

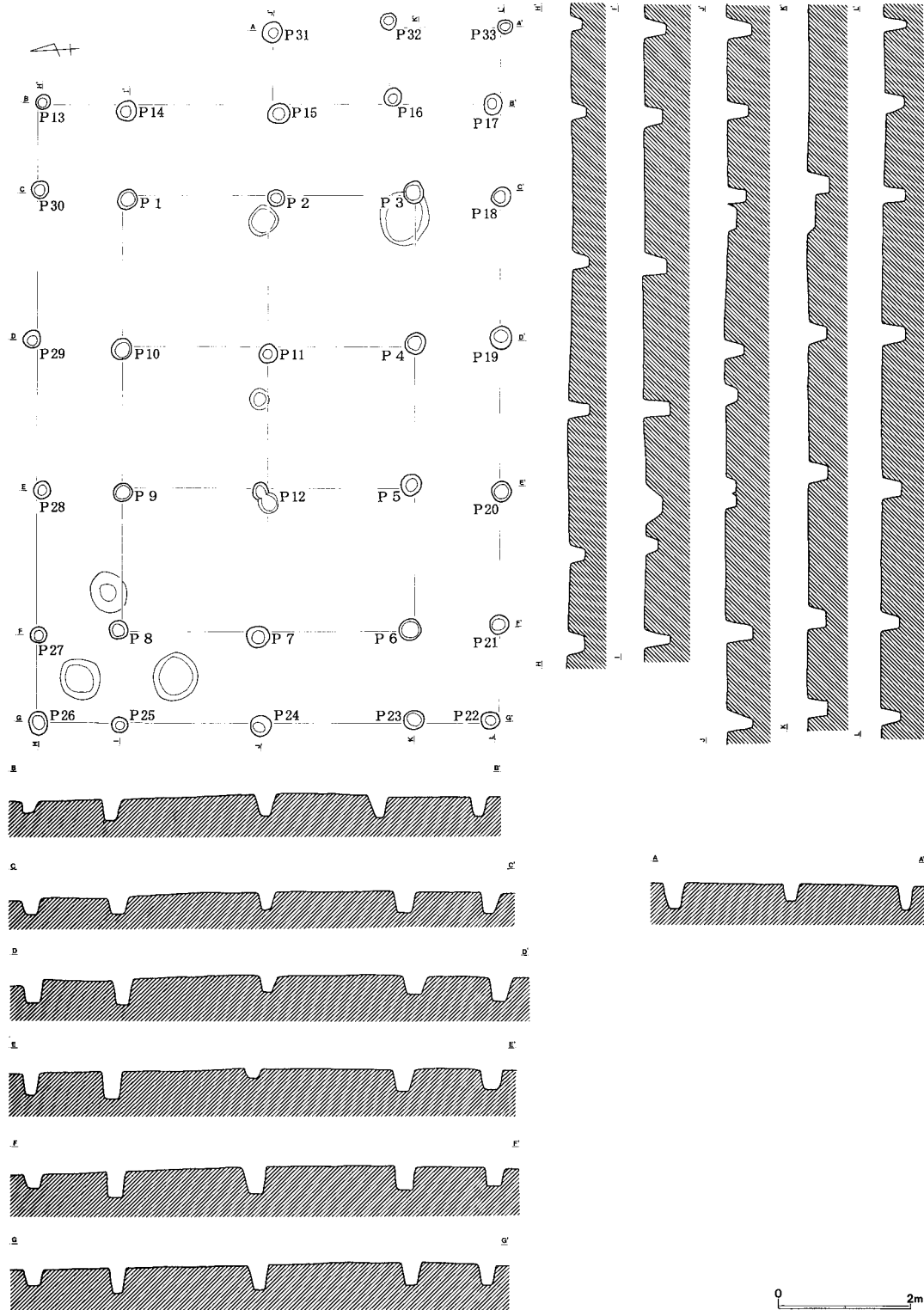
2. 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡(第24図、図版13)

調査区北端の中央付近に位置する。東側に第5号住居跡が近接し、西側には第4号溝跡がある。本掘立柱建物跡内からは、第26・27・28号土壌が検出されているが、本建物跡と関係するものか明確ではない。

建物の形態は、身舎部分が南北方向2間、東西方向3間の総柱式で、東・西・南・北の四面に底を持つ、いわゆる2間×3間の4面庇付建物で、東側の庇の外側には1間×2間の張り出しを伴う。規模は、南北方向6.76m、東西方向10.14mを測り、身舎部分は南北方向4.5m、東西方向6.75mを測る。建物の

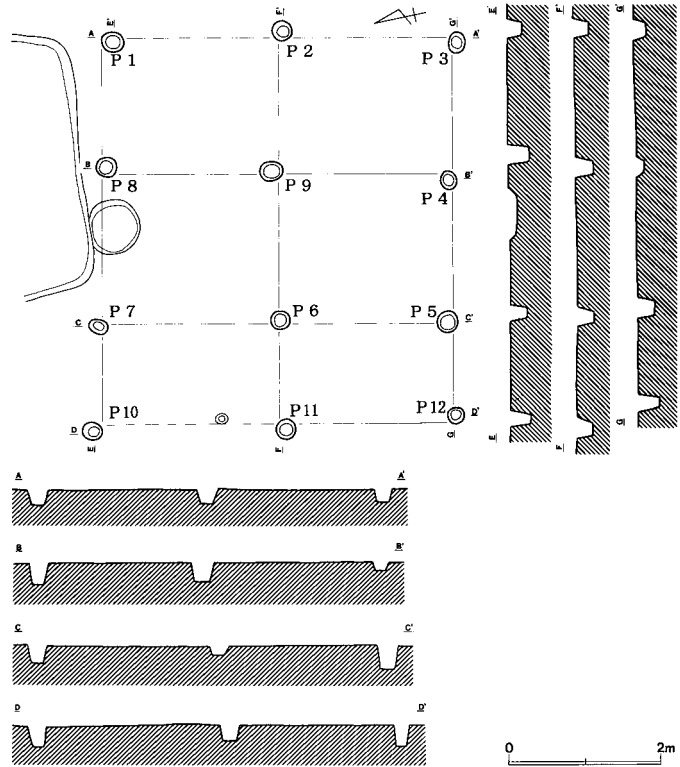
長軸方向は、 $N-96^{\circ}-E$ をとる。柱通りは比較的良く、柱心間は東西・南北方向とも1間2.25m、底幅はすべてほぼ半間の1.13m、張り出し部は東西方向が底の幅と同じ1.13m、南北方向1.8mである。



第24図 第1号掘立柱建物跡

検出された柱穴は、身舎・庇・張り出し部とも差異はなく、いずれも径30cm前後の円形を呈し、深さも概ね30cm～40cm程度である。柱穴覆土は、上位ではB軽石を多量に含む暗灰色土層であり、中位ではロームブロックを均一に含む暗灰色土層、下位はB軽石を微量含む灰色土層である。

遺物は、何も出土しなかった。本建物跡の時期は、柱穴覆土の状態から、古代末～中世初頭の所産と考えられる。



第25図 第2号掘立柱建物跡

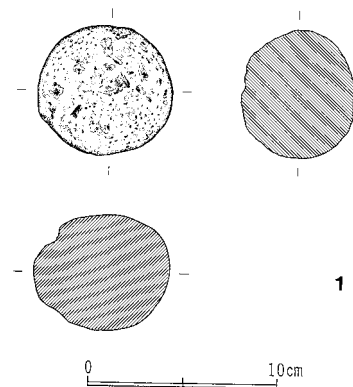
第2号掘立柱建物跡（第25図、図版14）

調査区の中央付近に位置する。北側には第7号住居跡、南側には第3号掘立柱建物跡が接近している。

建物跡の形態は、身舎部分が南北方向2間、東西方向2間の総柱式で、建物の西側に庇を持つ。建物の長軸方向はN-15°-Eをとる。規模は、身舎部分が南北方向4.5m、東西方向3.6mで、庇の幅は1.3mである。柱通りは比較的良く、柱心間は南北方向が1間2.25m、東西方向が1間1.8mを測り、庇の幅は1.3mである。

柱穴は、身舎・庇とも大差なく、平面形はいずれも円形で、直径は20cm～28cm、深さは25cm～30cm前後である。柱穴覆土は、いずれもB軽石を含まない暗灰色土である。

出土遺物は、柱穴内覆土から角閃石安山岩の磨石（第26図）が1個出土しただけである。本建物跡の時期は、覆土の状態から古代の所産と考えられる。



第26図 第2号掘立柱建物跡出土遺物

第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表

1	磨石	A.径6.9、7.2、6.0。D.角閃石安山岩。F.完形。G.柱穴覆土。
---	----	--------------------------------------

第3号掘立柱建物跡（第27図、図版15）

調査区の中央部やや南側寄りに位置する。北側には第2号掘立柱建物跡が近接し、南側には約3m離れて同規模の第4号掘立柱建物跡が向き合う形で対峙している。

建物の形態は、身舎部分が南北方向1間、東西方向2間の長方形を呈する側柱式で、南側以外の3面に庇を伴う。建物跡の長軸方向は、N-93°-Eをとる。規模は、身舎部分が南北方向2.3m、東西

方向3.75mで、底部分を含めると南北方向3.5m、東西方向5.6mである。建物北側壁の2間は、柱心間が不揃いで東から1間1.6mと2.15mを測る。底の幅は、3面とも不揃いで東側が0.85m、西側が1.0m、北側が1.2mである。

柱通りは、比較的良い。柱穴は、いずれも直径20cm程度の小規模な円形で、深さは11.5cm～25.5cmである。柱穴覆土は、B軽石を多量に含む暗灰色土である。

遺物は、何も出土しなかった。本建物跡の時期は、柱穴覆土の状態から、古代末～中世初頭の所産と考えられる。

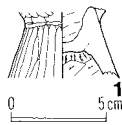
第4号掘立柱建物跡 (第29図、図版15)

調査区の中央部南側寄りに位置し、北側には約3m離れて同規模の第3号掘立柱建物跡が対峙している。

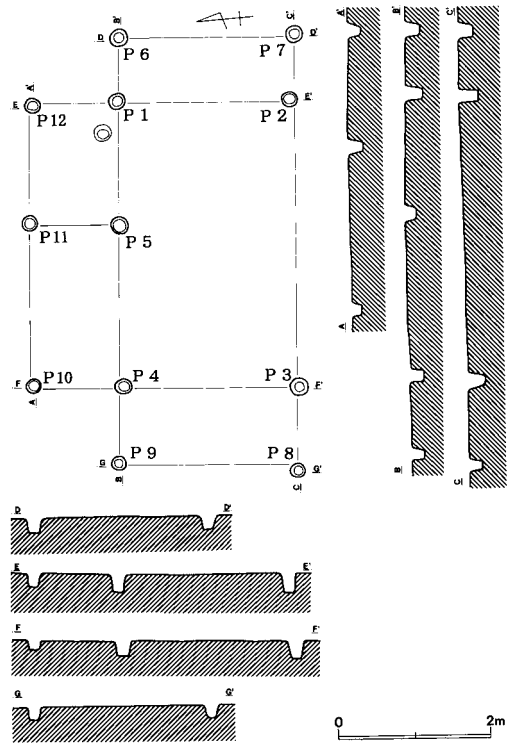
建物の形態は、南北方向1間、東西方向2間の長方形を呈する側柱式で、東・西・南側の3面に底を伴う。建物の長軸方向は、N-94°-Eである。規模は、南北方向3.13m、東西方向5.52mを測り、身舎部分は南北方向2.25m、東西方向3.76m、底の幅は3面とも0.88mである。第3号掘立柱建物跡と異なり、3面の底はコーナー部で連続している。柱通りは比較的良く、柱心間は南北方向が1間2.25m、東西方向は1間1.88mである。

柱穴は、いずれも直径16cm～22cm前後の小規模な円形で、深さは9cm～29cmある。柱穴覆土は、B軽石を多量に含む暗灰色土である。

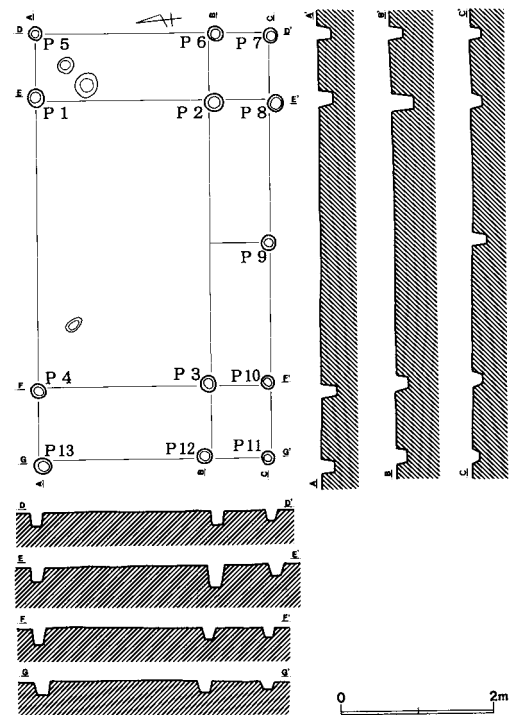
出土遺物は、柱穴内から古墳時代の高坏の脚部破片(第28図)が、混入して出土しただけである。本建物跡の時期は、柱穴覆土の状態から、古代末～中世初頭の所産と考えられる。



第28図 第4号掘立柱建物跡出土遺物



第27図 第3号掘立柱建物跡



第29図 第4号掘立柱建物跡

第4号掘立柱建物跡出土遺物観察表

1	高坏	A.脚部残存高3.5。B.粘土紐積み上げ。C.脚部外面篋ナデ後ミガキ、内面篋ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外-茶褐色。F.脚部1/3。G.覆土。
---	----	--

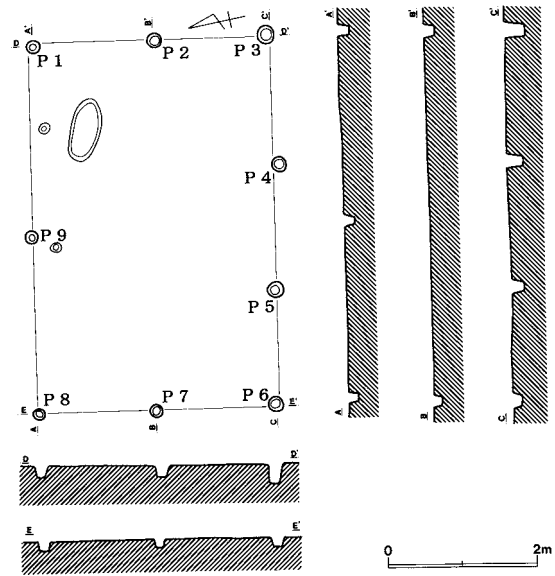
第5号掘立柱建物跡（第30図、図版16）

調査区南端の中央付近に位置する。北側には第4号掘立柱建物跡が、東側には第8号住居跡があり、南側には第3号溝跡が本建物跡と向きを揃えて近接している。

建物の形態は、南北方向2間、東西方向3間の長方形を呈する側柱式であるが、南側壁と北側壁では1間の間隔が異なり、間数も違っている。建物の長軸方向は、 $N-101^{\circ}-E$ をとる。規模は、南北方向3.24m、東西方向4.86mである。柱通りは、比較的良い。柱心間は、南北方向の1間と南側壁の1間の間隔がいずれも1.62m、北側壁の1間の間隔は2.43mを測る。

柱穴は、いずれも直径15cm~22cmの小規模な円形を呈し、深さは11cm~26cmである。柱穴覆土は、B軽石を多量に含む暗灰色土である。

遺物は、何も出土しなかった。本建物跡の時期は、柱穴覆土の状態から、古代末~中世初頭の所産と考えられる。



第30図 第5号掘立柱建物跡

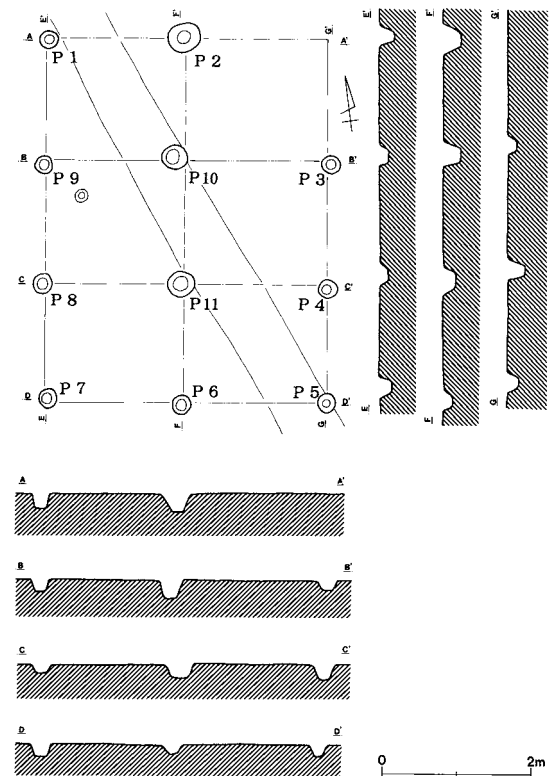
第6号掘立柱建物跡（第31図、図版16）

調査区の南西側に位置し、重複する第5号溝跡を切っている。西側には第8号掘立柱建物跡と柵列跡が、北側には第9・10・11号掘立柱建物跡が近接している。

建物の形態は、南北方向3間、東西方向2間の長方形を呈する総柱式である。建物の長軸方向は、 $N-8^{\circ}-E$ をとる。規模は、南北方向4.89m、東西方向3.76mを測る。柱通りは良く、柱心間は南北方向が1間1.63m、東西方向が1間1.88mである。

柱穴は、直径22cm~42cm前後の円形を呈し、深さは11cm~24cmある。この中でもP2・P10・P11は、他に比べて直径が30cm以上と大きく、深さも比較的深い柱穴である。柱穴覆土は、B軽石を均一に含む暗灰色土である。

遺物は、何も出土しなかった。本建物跡の時期は、柱穴覆土の状態から、古代末~中世初頭の所産と考えられる。



第31図 第6号掘立柱建物跡

第7号掘立柱建物跡（第32図、図版17）

調査区の南西側に位置する。柱穴の一部が第8号掘立柱建物跡の柱穴と重複しているが、両者の新旧関係は不明である。

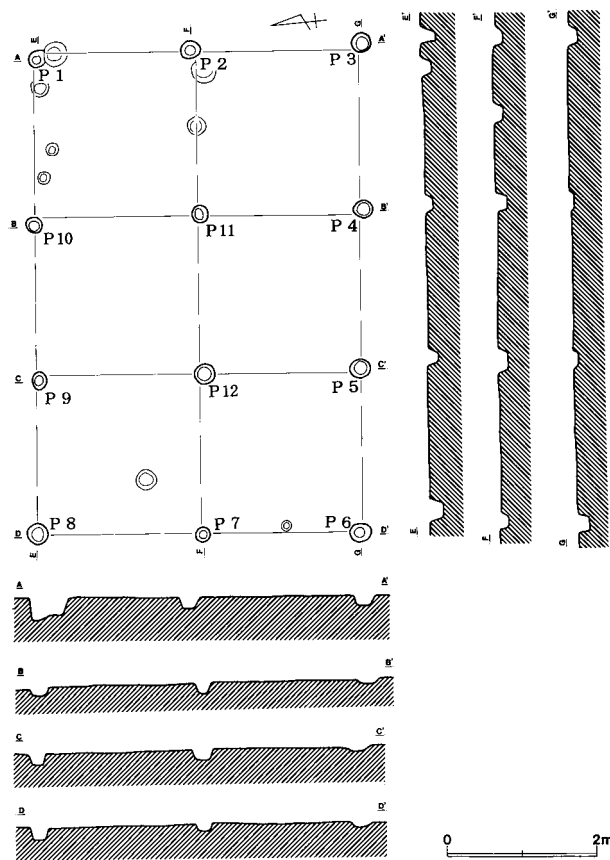
建物の形態は、南北方向2間、東西方向3間の長方形を呈する総柱式である。建物の長軸方向は、N-95.5°-Eをとる。規模は、南北方向が4.26m、東西方向が6.39mを測る。柱通りは良く、柱心間は東西・南北方向とも1間2.13mである。柱穴は、直径18cm~28cmの円形で、深さ7cm~30cmを測る。柱穴覆土は、B軽石を均一に含む暗灰色土である。

遺物は、何も出土しなかった。本建物跡の時期は、柱穴覆土の状態から、古代末~中世初頭の所産と考えられる。

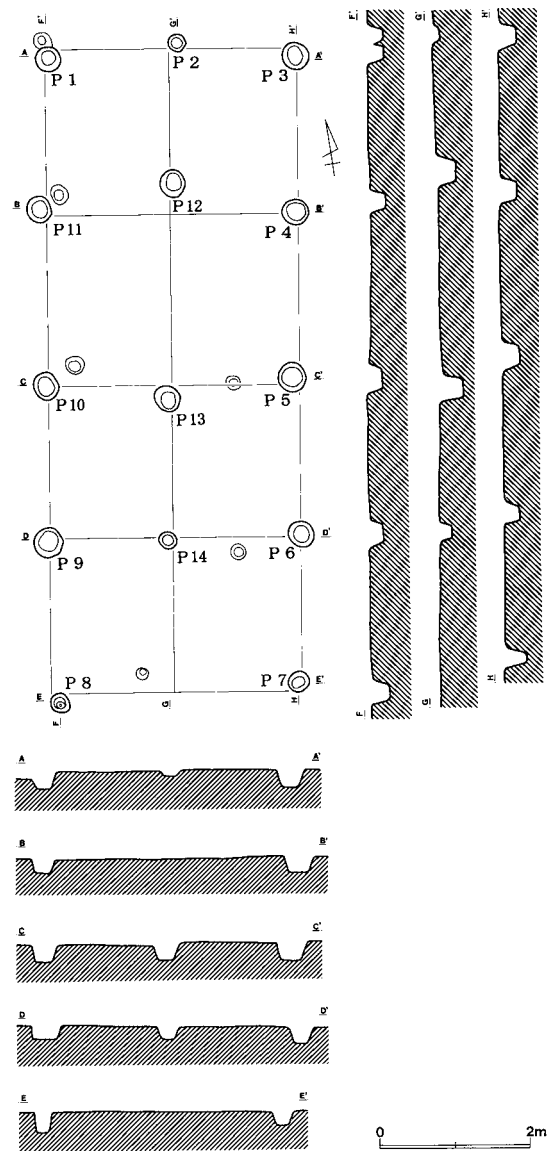
第8号掘立柱建物跡（第33図、図版17）

調査区の南西側に位置し、第7号掘立柱建物跡と重複している。本建物跡の東側には、第9・10・11号掘立柱建物跡が近接している。

建物の形態は、南北方向が4間、東西方向が2間の長方形を呈する総柱式である。建物の長軸方向は、N-10°-Eをとる。規模は、南北方向8.5m、東



第32図 第7号掘立柱建物跡



第33図 第8号掘立柱建物跡

西方向3.26mである。柱通りは側柱間は比較的良いが、棟持柱はやや悪く側柱穴とやはずれが見られる。柱心間は、東西方向は1間1.63mであるが、南北方向は北側の2間が2.25m、南側の2間が2.0mと不揃いである。

柱穴は、直径22cm～38cm程度の円形を呈し、深さは8.5cm～32.5cmである。柱穴覆土は、B軽石を均一に含む暗灰色土である。

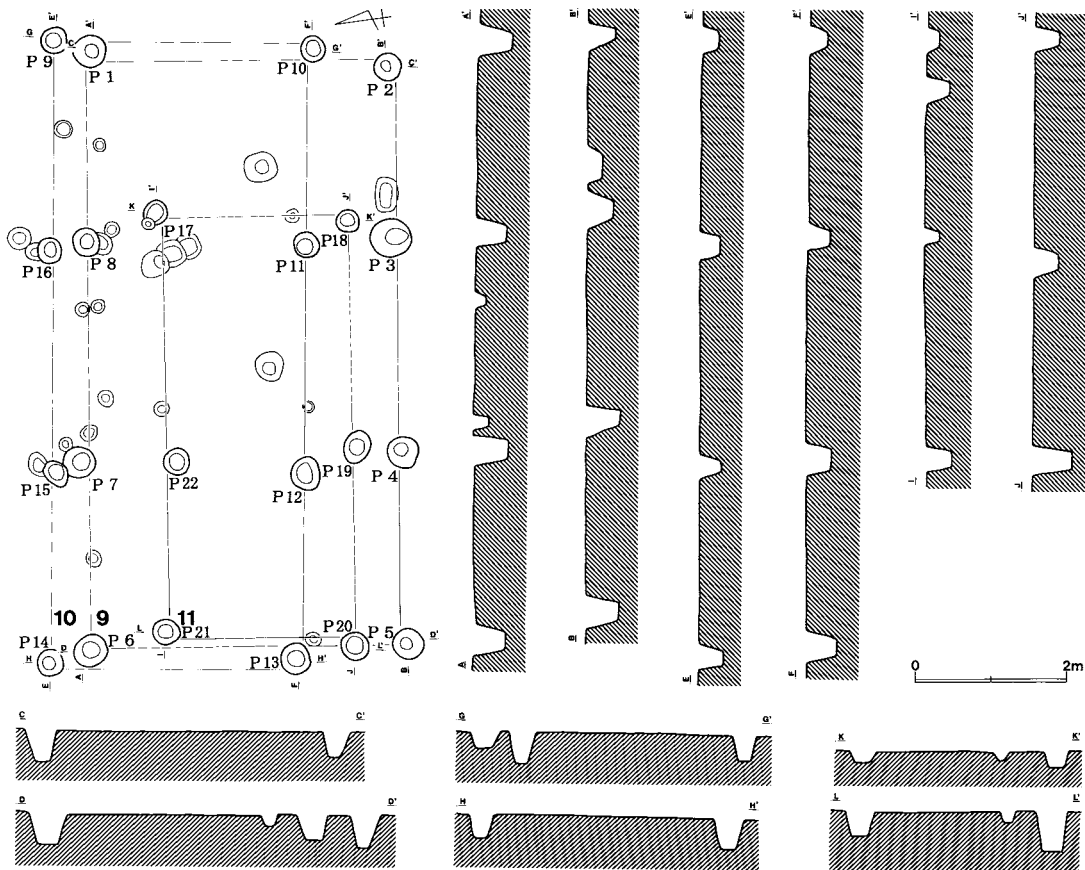
遺物は、何も出土しなかった。本建物跡の時期は、柱穴覆土の状態から、古代末～中世初頭の所産と考えられる。

第9号掘立柱建物跡（第34図、図版18）

調査区の南西部に位置する。第10・11・12・14号掘立柱建物跡と重複するが、相互の新旧関係は不明である。

建物の形態は、南北方向1間、東西方向3間の長方形を呈する側柱式である。建物の長軸方向は、N-97°-Eをとる。規模は、南北方向4.1m、東西方向8.0mである。柱通りは比較的良く、柱心間は東西方向が1間4.1m、南北方向は西側と東側が1間2.5m、真中の1間が3.0mである。柱穴は、直径40cm～55cmの円形を呈し、深さは35cm～44cmである。柱穴覆土は、ロームブロックを均一に含む暗褐色土である。

遺物は、何も出土しなかった。本建物跡の時期は、出土遺物がないため明確ではないが、柱穴覆土の



第34図 第9～11号掘立柱建物跡

状態から、古代の所産と考えられる。

第10号掘立柱建物跡（第34図、図版18）

調査区の南西部に位置し、第9・11・12・14号掘立柱建物跡と重複している。西側には第8号掘立柱建物跡、南側には第6号掘立柱建物跡が近接している。

建物の形態は、南北方向1間、東西方向3間の長方形を呈する側柱式建物である。建物の長軸方向は、N-98°-Eをとる。規模は、南北方向3.35m、東西方向8.0mである。柱通りは比較的良く、柱心間は南北方向が1間3.35m、東西方向は東西両側の1間が2.5m、真中の1間が3.0mである。

柱穴は、直径30cm~40cmの円形を呈し、深さは21cm~41cmである。柱穴覆土は、ロームブロックを均一に含む暗褐色土である。

遺物は、何も出土しなかった。本建物跡の時期は、出土遺物がないため明確ではないが、柱穴覆土の状態から古代の所産と考えられる。

第11号掘立柱建物跡（第34図、図版19）

調査区の南西部に位置し、第9・10・12号掘立柱建物跡と重複している。西側には第8号掘立柱建物跡、南側には第6号掘立柱建物跡が近接している。

建物の形態は、南北方向1間、東西方向2間の長方形を呈する側柱式建物である。建物の長軸方向は、N-98°-Eをとる。規模は、南北方向2.5m、東西方向5.65mである。柱通りは比較的良く、柱心間は南北方向が1間2.5m、東西方向は東側が3.25m、西側が2.4mで、1間幅が不揃いである。

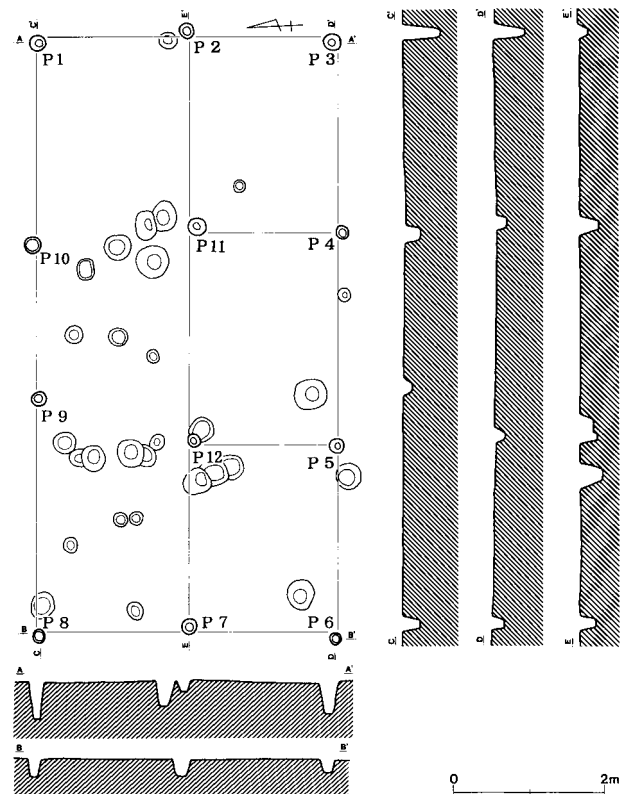
柱穴は、直径30cm~38cmの円形を呈し、深さは16cm~54cmである。柱穴覆土は、ロームブロックを含む暗褐色土である。

遺物は、何も出土しなかった。本建物跡の時期は、柱穴覆土の状態から、古代の所産と考えられる。

第12号掘立柱建物跡（第35図、図版19）

調査区の南西部に位置し、第9・10・11・14号掘立柱建物跡と重複している。西側には第5号溝跡、東側には第4号溝跡が検出されている。

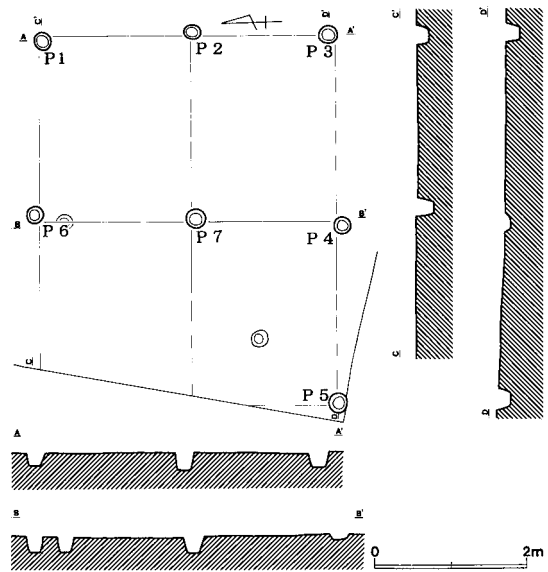
建物の形態は、南北方向2間、東西方向3間の長方形を呈する総柱式建物と考えられる。建物の長軸方向は、N-93°-Eをとる。規模は、南北方向4.0m、東西方向7.93mである。



第35図 第12号掘立柱建物跡

柱通りは比較的良く、柱心間は南北方向が1間2.0m、東西方向の北側壁は東から2.67m、2.08m、3.18mであり、南側壁は2.55m、2.83m、2.55mで不揃いである。柱穴は、直径14cm～24cmの円形を呈し、深さは12cm～50cmある。柱穴覆土は、B軽石を均一に含む暗褐色土である。

遺物は、何も出土しなかった。本建物跡の時期は、柱穴覆土の状態から、古代末～中世初頭の所産と考えられる。



第36図 第13号掘立柱建物跡

第13号掘立柱建物跡 (第36図、図版20)

調査区の南西端に位置する。建物の西側は調査区外に位置し、また南側も調査区外に延びる可能性もあるため、本建物跡の全容は不明である。

建物の形態は、調査区内で検出された部分では南北・東西方向とも2間以上の長方形を呈する総柱式建物と推測される。建物の長軸方向は、 $N-92^{\circ}-E$ の東西方向をとると考えられる。規模は、南北方向が4.0m以上、東西方向が5.0m以上である。柱通りは比較的良く、柱心間は南北方向が1間2.0m、東西方向が1間2.5mの等間隔である。

柱穴は、直径16cm～26cmの円形を呈し、深さは7cm～23cmである。柱穴覆土は、B軽石を均一に含む暗灰褐色土である。

遺物は、何も出土しなかった。本建物跡の時期は、柱穴覆土の状態から、古代末～中世初頭の所産と考えられる。

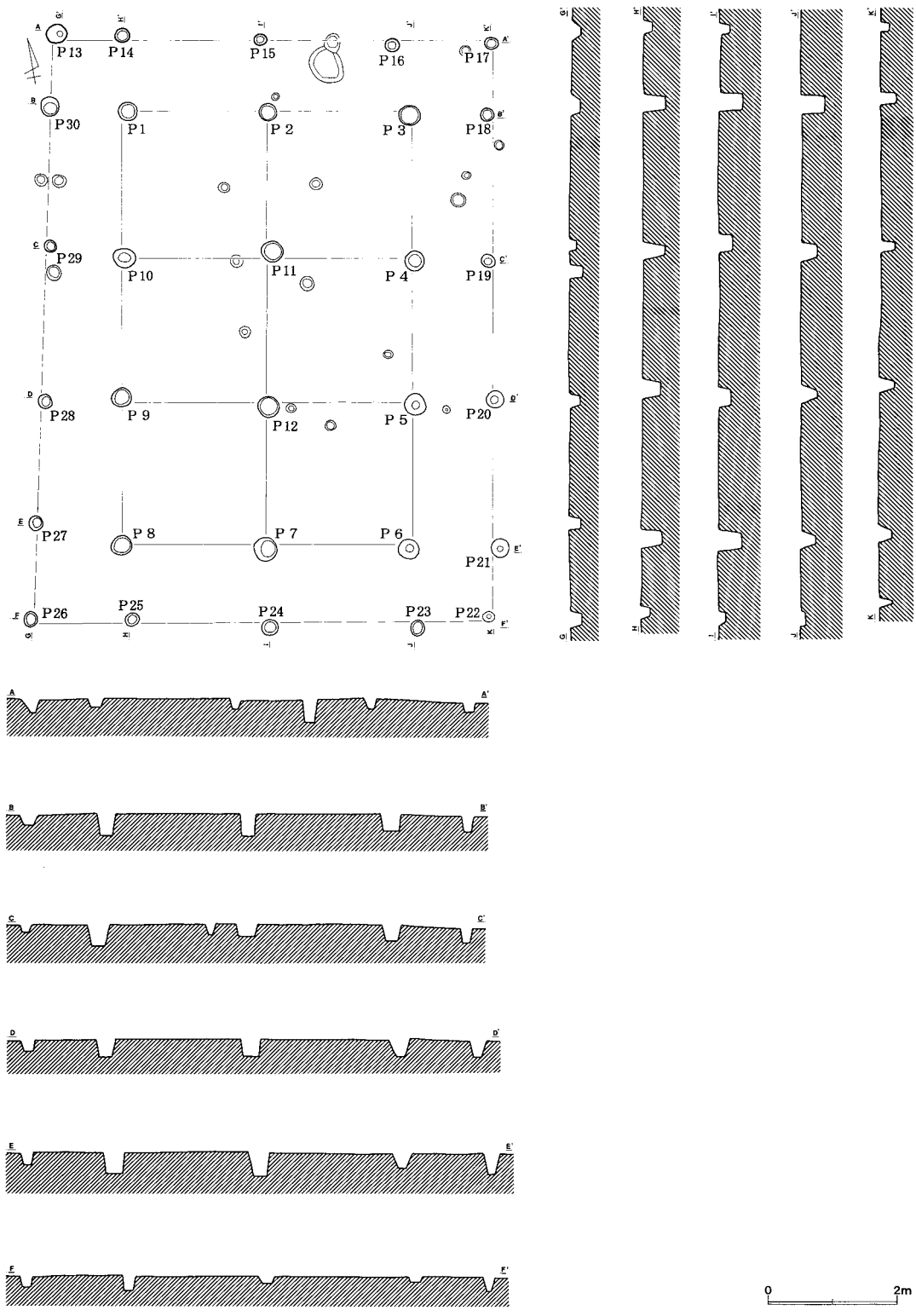
第14号掘立柱建物跡 (第37図、図版20)

調査区中央よりやや西側に位置し、第9・10・12・15・17・18号掘立柱建物跡と重複し、西側に第8号掘立柱建物跡、南側に第11号掘立柱建物跡、北側に第16号掘立柱建物跡が近接している。

建物の形態は、身舎部分が南北方向2間、東西方向3間の長方形を呈する総柱式で、四面に庇を伴う。建物の長軸方向は、 $N-10^{\circ}-E$ をとる。規模は、身舎部分が南北方向6.75m、東西方向が4.50mあり、庇部分を含めると南北方向が9.05m、東西方向が7.0mを測る。柱通りは、身舎部分の柱穴は比較的良いが、庇部分の柱穴はあまり通りがよくない。柱心間は、東西・南北方向とも1間2.25mの等間隔であり、庇の幅は南・北両側は1.15m、東側は1.25mで、西側は1.15m～1.25mで南側に向かってやや開いている。

柱穴は、直径20cm～34cmの円形を呈し、深さは8.5cm～38cmであるが、身舎部分の柱穴に比べて庇部分の柱穴はやや規模が小さい。柱穴覆土は、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を均一に含む黒褐色土である。

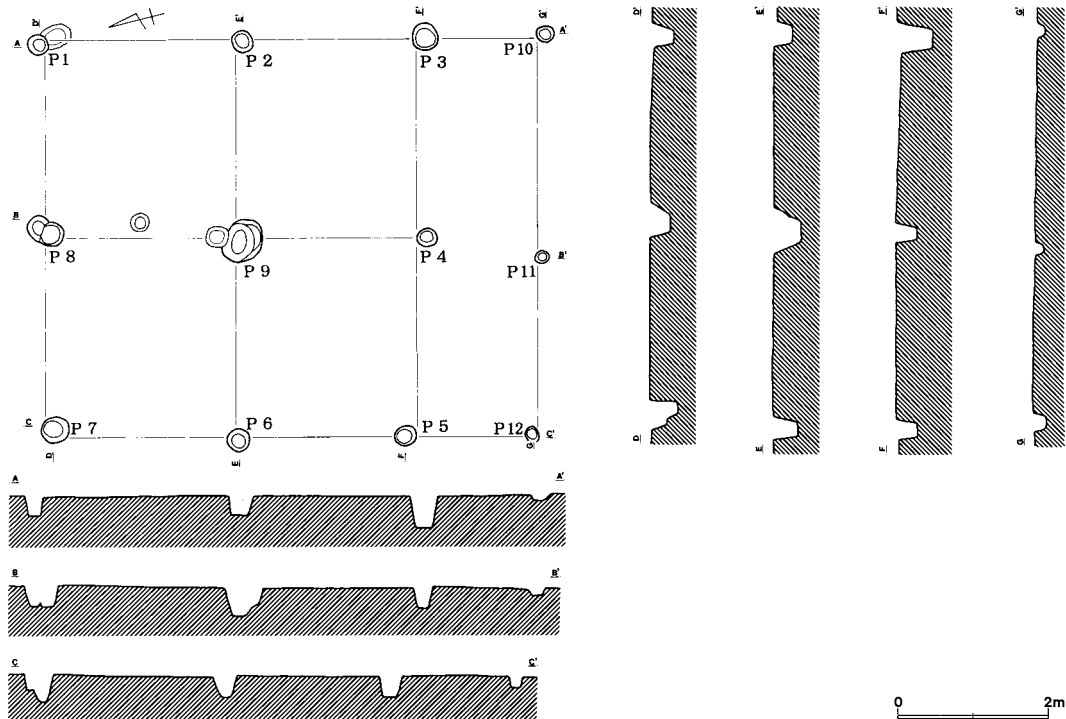
遺物は、何も出土しなかった。本建物跡の時期は、柱穴覆土の状態から、古代末～中世初頭の所産と考えられる。



第37図 第14号掘立柱建物跡

第15号掘立柱建物跡 (第38図、図版21)

調査区中央のやや西側寄りに位置する。第14・17・18号掘立柱建物跡と重複しているが、相互の新旧関係は不明である。



第38図 第15号掘立柱建物跡

建物の形態は、南北方向2間、東西方向2間の方形を呈する総柱式建物であり、南側に底を伴っている。建物の長軸方向は、 $N-15^{\circ}-E$ をとる。規模は、東西・南北方向とも5.0mで、底部分を含めると南北方向は6.6mを測る。柱通りは比較的良く、柱心間は東西・南北方向とも1間2.5mで、底の幅は1.6mである。柱穴は、身舎部分が直径20cm程度の円形を呈し、深さは20cm~30cmあるのに対して、底部分の柱穴は直径15cm・深さ10cm程度の小規模なものである。柱穴覆土は、いずれもB軽石を含まない暗灰色土である。

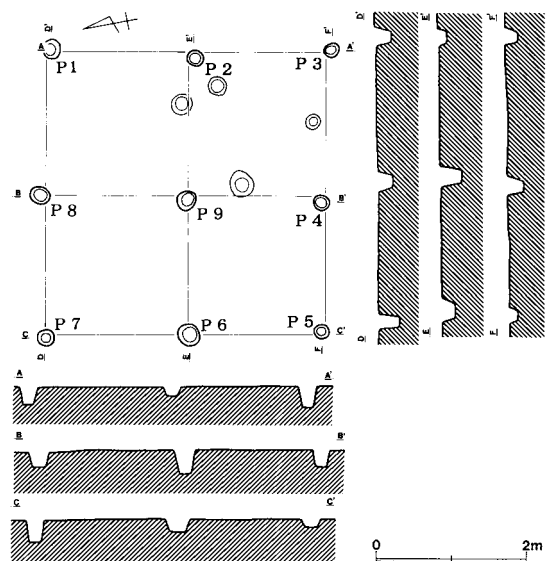
遺物は、何も出土しなかった。本建物跡の時期は、覆土の状態から古代の所産と考えられる。

第16号掘立柱建物跡（第39図、図版21）

調査区西側のやや北側寄りに位置する。北側に第6号溝跡、南側に第9号土壇、第14・15号掘立柱建物跡が、南東側には第16・17号掘立柱建物跡が近接している。

建物の形態は、南北方向2間、東西方向2間の方形を呈する総柱式建物である。建物の主軸方向は、 $N-12^{\circ}-E$ をとる。規模は、東西・南北方向とも3.76mである。柱通りは比較的良く、柱心間は東西・南北方向とも1間1.88mの等間隔である。

柱穴は、直径18cm~30cm前後の円形を呈し、深さは10cm~32cmである。柱穴覆土は、B軽石を均一に含む暗灰色土である。



第39図 第16号掘立柱建物跡

遺物は、何も出土しなかった。本建物跡の時期は、柱穴覆土の状態から、古代末～中世初頭の所産と考えられる。

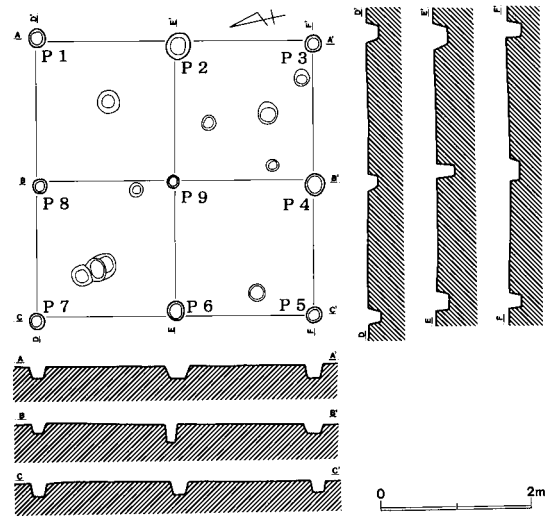
第17号掘立柱建物跡（第40図、図版22）

調査区中央よりやや西側に位置し、第14・15・18号掘立柱建物跡と重複している。北側には第6号溝跡、第8号住居跡が近接している。

建物の形態は、南北方向2間、東西方向2間の方形を呈する総柱式建物である。建物の主軸方向は、 $N-12^{\circ}-E$ をとる。規模は、東西、南北方向とも3.76mである。柱通りは良く、柱心間は東西・南北方向とも1間1.88mの等間隔である。

柱穴は、直径16cm～34cmの円形を呈し、深さは12cm～22.5cm前後ある。柱穴覆土は、B軽石を均一に含む暗灰色土である。

遺物は、何も出土しなかった。本建物跡の時期は、柱穴覆土の状態から、古代末～中世初頭の所産と考えられる。



第40図 第17号掘立柱建物跡

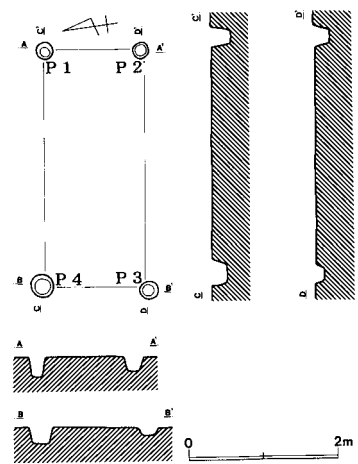
第18号掘立柱建物跡（第42図）

調査区の中央よりやや西側寄りに位置する。第14・15・17号掘立柱建物跡と重複しているが、それぞれの重複関係は不明である。

建物の形態は、身舎部分が南北2間、東西3間の長方形を呈する総柱式建物で、4面に底を伴っている。建物の長軸方向は、 $N-107^{\circ}-E$ をとる。規模は、身舎部分が南北方向4.5m、東西方向6.75mで、底部分を含めると南北方向7.5m、東西方向9.38mを測る。底の幅は、南側と北側が1.5m、西側と東側が1.13mであるが、東側の底はやや開いている。柱通りは比較的良く、身舎部分の柱心間は東西・南北方向とも1間2.25mである。

柱穴は、直径19cm～30cm前後の円形で、深さは15cm～37cmである。柱穴覆土は、B軽石を均一に含む暗灰色土である。

遺物は、何も出土しなかった。本建物跡の時期は、柱穴覆土の状態から、古代末～中世初頭の所産と考えられる。

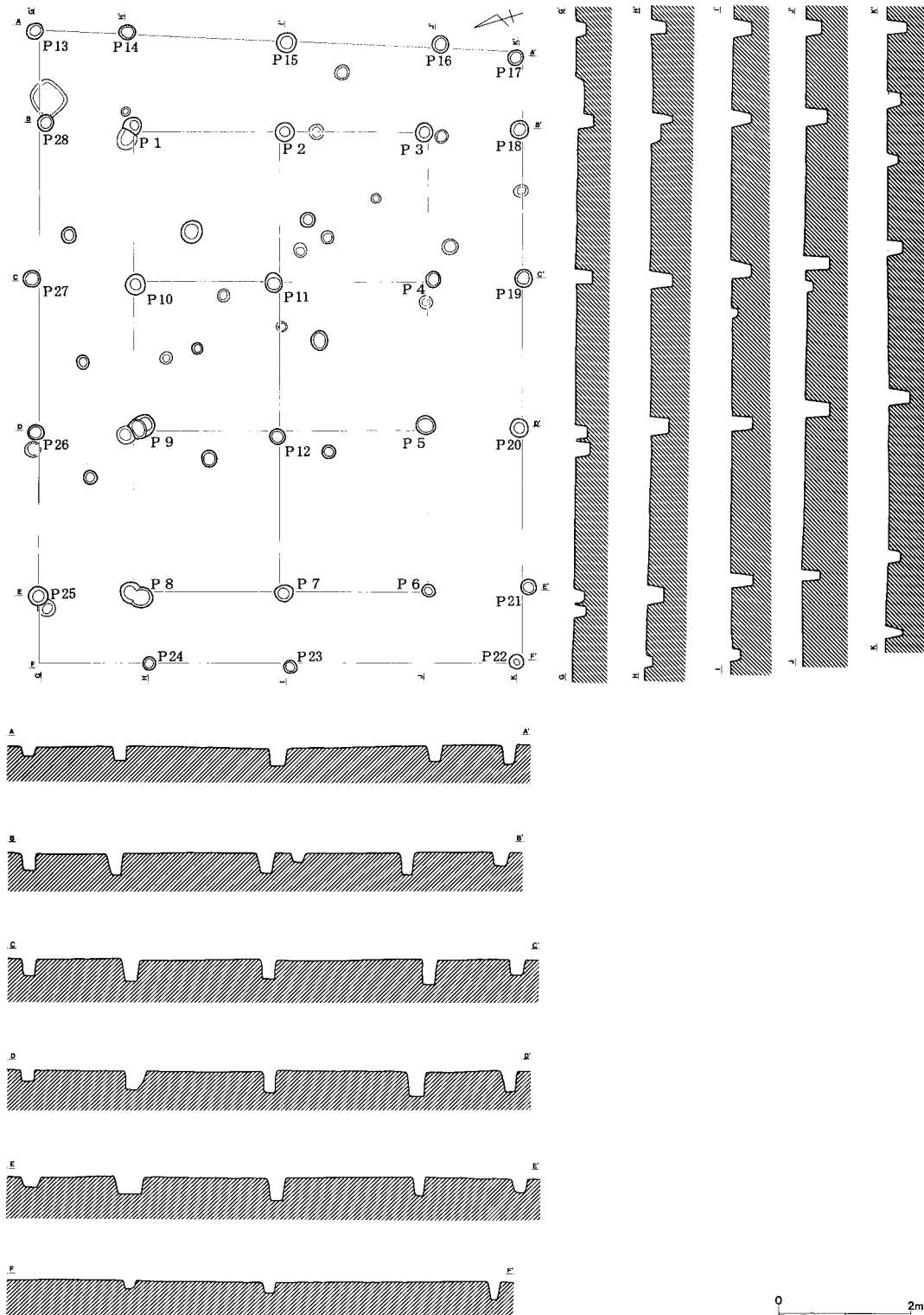


第41図 第19号掘立柱建物跡

第19号掘立柱建物跡（第41図、図版22）

調査区南東側に位置する。北側に第6号溝が近接しているが、本建物跡の周辺には他に掘立柱建物跡は検出されていない。

建物の形態は、南北方向1間、東西方向1間の長方形を呈する小規模な建物である。建物の長軸方向は、 $N-98^{\circ}-E$ をとる。規模は、南北方向1.3m、東西方向3.13mある。



第42図 第18号掘立柱建物跡

柱穴は、直径20cm～31cmの円形を呈し、深さは10cm～27cmである。柱穴覆土は、ローム粒子・ロームブロック・B軽石を均一に含む暗褐色土である。

遺物は、何も出土しなかった。本建物跡の時期は、柱穴覆土の状態から、古代末～中世初頭の所産と考えられる。

3.土 壙

第1号土壙（第6図、図版23）

調査区の西端に位置し、重複する平安時代の第1号住居跡を切っている。平面形は、円形を基調とする不整形円形を呈している。規模は、南北方向107cm、東西方向126cmある。壁は、緩やかではあるが直線的に立ち上がる。底面は、広く平坦であるが、やや凹凸があり北側に向かって低く傾斜している。確認面からの深さは37.5cmを測る。

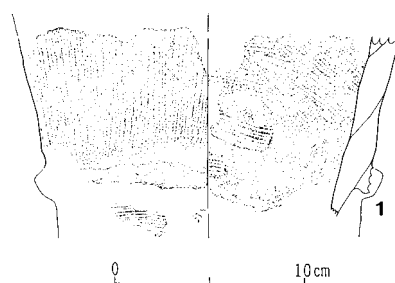
出土遺物は、比較的少なく、覆土中から土師器片が2片出土しただけである。時期は、覆土の状態から古代の可能性が高いと思われる。

第2号土壙（第45図、図版23）

調査区の西端付近中央に位置する。北側には第1号土壙、南東側には第3号土壙、南西側には第20号土壙がある。

平面形は、直径96cmの円形を呈している。壁は、わずかに傾斜して立ち上がっている。底面は、広くほぼ平坦で、確認面からの深さは20cmある。

出土遺物は、覆土中から円筒埴輪の破片（第43図No1）や高台付坏の破片ほか、少量の土師器片が出土しただけである。本土壙の時期は、覆土の状態から古代の可能性が高いと思われる。



第43図 第2号土壙出土遺物

第2号土壙出土遺物観察表

1	円筒埴輪	B.粘土紐積み上げ。C.外面縦方向のハケ、内面ナデ及び斜方向のハケ。D.赤色粒、白色粒、片岩粒。 E.外-茶褐色、内-暗褐色。F.破片。G.床面付近。H.粘土紐接合部の外面にヨコ方向のハケ。
---	------	--

第3号土壙（第45図、図版24）

調査区西側の中央付近に位置する。北西側には第2号土壙がある。

平面形は、ほぼ円形であり、規模は南北80cm、東西77cmを測る。壁は、緩やかで直線的に傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦で、確認面からの深さは12.5cmある。

出土遺物は、覆土中より羽釜の破片と土師器の破片が出土しただけである。本土壙の時期は、覆土の状態から古代の可能性が高いと思われる。

第4号土壙（第45図、図版24）

調査区の西側に位置する。東側には第5号溝跡が近接し、北東側には第5号溝、南西側には第3号土壙がある。

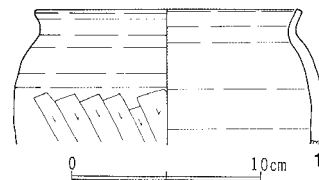
平面形は、南北方向に長い楕円形を呈し、規模は南北方向108cm、東西方向81cmを測る。長軸方向はN-12°-Eをとる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦で、確認面からの深さは15cmある。底面の直上には、厚さ2cm前後の炭化層が被覆し、また土壙の壁面が焼けて赤色化していることから、本土壙の内部で火を焚いていたことが窺える。

遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から古代末～中世初頭の所産と推測される。

第5号土壙（第45図、図版25）

調査区西側の北寄りに位置する。北東側には第5号溝跡が近接し、北西側には第6号土壙が、南東側には第4号土壙がある。

平面形は、東西方向に長い楕円形ぎみの形態を呈している。規模は、東西方向120cm、南北方向85cmを測る。長軸方向は、N-60°-Wをとる。壁は、内湾ぎみに緩やかに立ち上がる。底面は、広く平坦で、確認面からの深さは10.5cmである。



第44図 第5号土壙出土遺物

遺物は、覆土中より小型甕の破片（第44図No.1）及び土師器片が数点出土しただけである。本土壙の時期は、覆土の状態から古代末～中世初頭の所産と推測される。

第5号土壙出土遺物観察表

1	小型甕	A.口縁部径（14.1）。B.ロクロ成形。C.口縁部ヨコナデ、胴部外面回転ナデの後下半ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.外-暗褐色、内-褐色。F.破片。G.覆土。
---	-----	--

第6号土壙（第45図、図版25）

調査区西端の北側寄りに位置する。北東側には第5号溝跡が近接し、南東側には第5号土壙がある。

平面形は、ほぼ円形を呈し、規模は南北方向78cm、東西方向80cmを測る。壁は、直線的に開いて立ち上がっている。底面は、広く平坦で、確認面からの深さは8cmである。

遺物は、何も出土しなかった。本土壙の時期は、覆土の状態から古代の可能性が高いと思われる。

第7号土壙（第45図）

調査区北端部の西側寄りに位置する。南側には第6号溝跡が、南東側には第8号土壙がある。

平面形は、ほぼ円形を呈している。規模は、南北方向92cm、東西方向93cmを測る。壁は、直線的に傾斜して立ち上がっている。底面は、広くほぼ平坦で、確認面からの深さは7cmある。

遺物は、何も出土しなかった。本土壙の時期は、覆土の状態から古代の可能性が高いと思われる。

第8号土壙（第45図）

調査区の北西側寄りに位置し、南側に第6号溝跡が、南東側に第3号住居跡が近接している。

平面形は、南北方向にやや長い楕円形ぎみの形態を呈し、規模は南北方向90cm、東西方向82cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、底面との境は不明瞭である。底面は、広く丸みをもち、確認面からの深さは10.5cmある。覆土は、上層がB軽石を多量に含む黒褐色土層、下層はロームブロックを多量に含む暗灰色土層である。

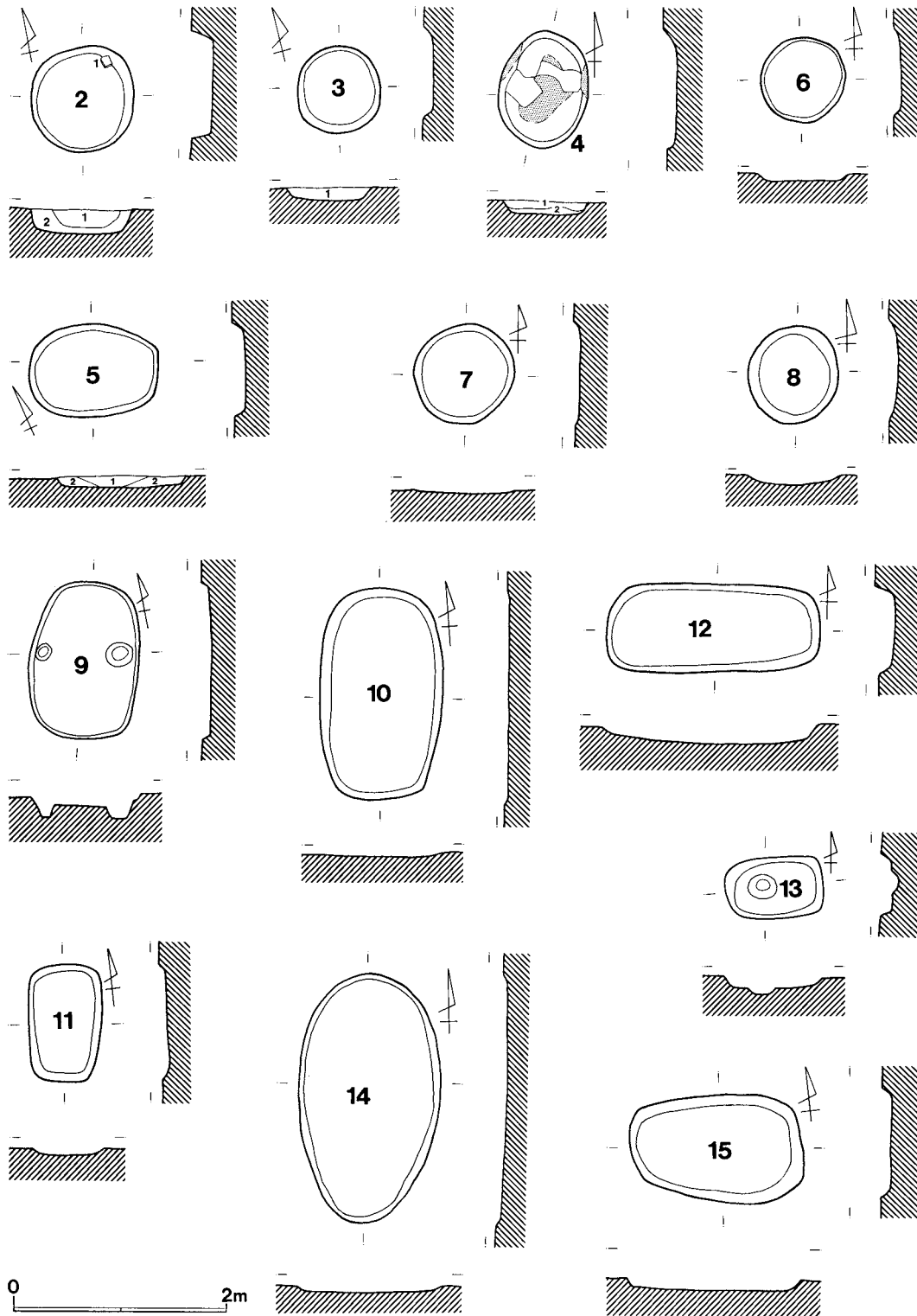
遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から古代末～中世初頭の所産と推測される。

第9号土壙（第45図、図版26）

調査区西側の中央付近に位置し、北に第16号掘立柱建物跡、東に第15号掘立柱建物跡、南に第14号掘

立柱建物跡が近接している。

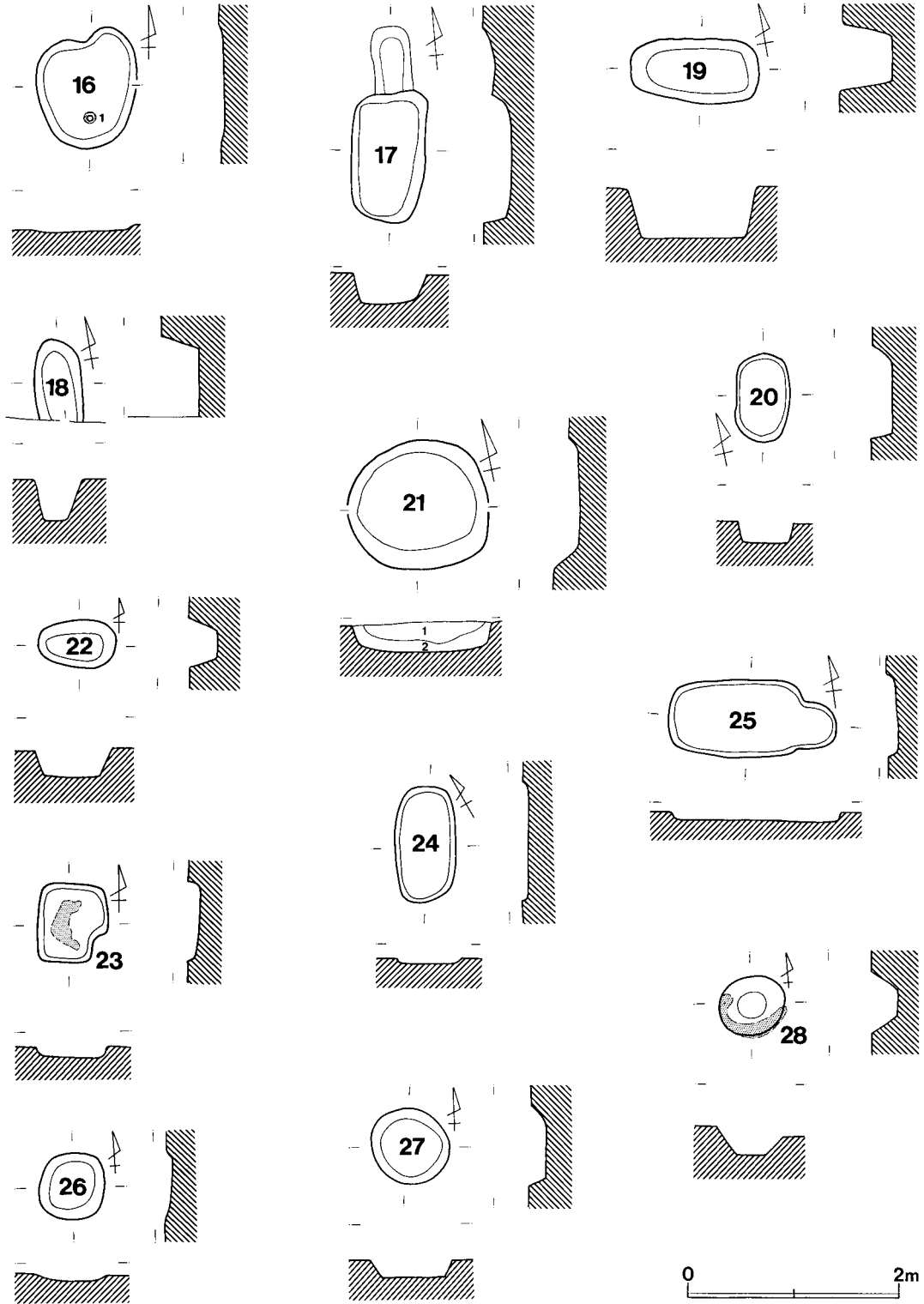
平面形は、各壁やコーナー部の丸みが強い隅丸長方形を呈している。規模は、南北方向145cm、東西方向100cmを測る。長軸方向は、 $N-15^{\circ}-E$ をとる。壁は、直線的に開いて立ち上がる。底面は、広



第45図 土 壙 (1)

く平坦で、確認面からの深さは11.5cmある。東側と西側の壁の中央壁下には、対峙するように小ピットが1箇所ずつ見られる。

遺物は、覆土中から灰釉碗の破片と土師器の破片が少量出土しただけである。



第46図 土 壙 (2)

第2号土壌土層説明

第1層：暗褐色土層（白色粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第2層：暗茶褐色土層（白色粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3号土壌土層説明

第1層：暗褐色土層（白色粒子を均一に、ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4号土壌土層説明

第1層：暗褐色土層（B軽石を均一に、ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
 第2層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に、焼土ブロック・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5号土壌土層説明

第1層：暗灰色土層（B軽石・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第2層：暗灰褐色土層（B軽石・ローム粒子・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第21号土壌土層説明

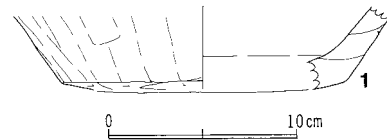
第1層：暗灰色土層（白色粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
 第2層：暗灰褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第10号土壌（第45図、図版26）

調査区中央部のやや北側寄りに位置する。西側には第4号溝跡が近接し、東側には第11～14号土壌がある。

平面形は、各壁や各コーナー部がやや丸みをもつ隅丸長方形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向196cm、東西方向114cmを測る。長軸方向は、N-4°-Eをとる。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は、広く平坦であるが若干起伏が見られ、確認面からの深さは3.5cmある。壁面や底面の一部は被熱により焼けており、土壌内での火の使用が窺える。覆土は、B軽石と焼土を均一に含む暗褐色土を主体としている。

遺物は、土釜と呼ばれる甕の破片が1片（第47図No1）出土しただけである。本土壌の時期は、覆土の状態や出土遺物から、古代末～中世初頭の所産と推測される。



第47図 第10号土壌出土遺物

第10号土壌出土遺物観察表

1	甕	A.底部径（4.0）。B.粘土紐積み上げ。C.外面ヘラナデ、内面ナデ。D.白色粒、片岩粒。E.外-淡橙褐色、内-淡黄褐色。F.破片。G.覆土。H.底部外面に二次焼成を受けている。
---	---	---

第11号土壌（第45図、図版27）

調査区中央部のやや北側寄りに位置する。北西側には第10号土壌が、南東側には第12号土壌が、北東側には第13号土壌が近接している。

平面形は、コーナー部の丸みが強い長方形を呈し、規模は南北方向107cm、東西方向67cmを測る。長軸方向は、N-5°-Eをとる。壁は、緩やかに立ち上がる。底面は、広くほぼ平坦で、確認面からの深さは6cmある。覆土は、B軽石を均一に含む暗灰色土である。

遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から古代末～中世初頭の所産と推測される。

第12号土壌（第45図、図版27）

調査区中央部のやや北側寄りに位置する。北西側には第10・11号土壌が、北西側には第13号土壌が、

西側には第14号土壌がある。

平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形を呈している。規模は、東西方向200cm、南北方向80cmを測る。長軸方向は、 $N-89^{\circ}-E$ をとる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がっている。底面は、中央から壁際に向かってやや高くなり、確認面からの深さは20cmある。覆土は、B軽石を均一に含む暗灰色土である。

遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から古代末～中世初頭の所産と推測される。

第13号土壌（第45図、図版28）

調査区中央部の北側寄りに位置する。北側には第1号掘立柱建物跡が、西側には第10号土壌が、南西側には第11・12号土壌が、南東側には第14号土壌がある。

平面形は、コーナー部の丸みの強い長方形を呈し、規模は東西方向90cm、南北方向56cmを測る。長軸方向は、 $N-84^{\circ}-E$ をとる。壁は、内湾気味に傾斜して立ち上がる。底面は、広く平坦で、中央からやや西側寄りの位置に22cm×25cmの小ピットがある。確認面からの深さは16cmある。覆土は、B軽石を均一に含む暗灰色土である。

遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から古代末～中世初頭の所産と推測される。

第14号土壌（第45図、図版28）

調査区中央部の北側寄りに位置する。北側には第1号掘立柱建物跡が、北西側には第13号土壌が、西側には第11・12号土壌がある。

平面形は、南北方向に長い楕円形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向230cm、東西方向130cmを測る。長軸方向は、 $N-2^{\circ}-E$ である。壁は、緩やかに立ち上がっている。底面は、広く平坦で、確認面からの深さは8.5cmある。覆土は、B軽石を均一に含む暗灰色土である。

遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から古代末～中世初頭の所産と推測される。

第15号土壌（第45図、図版29）

調査区の中央部に位置する。北西側には第2号掘立柱建物跡が、西側には第3号掘立柱建物跡が近接している。

平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形であるが、東壁が西壁より長く、やや崩れた台形ぎみの形態である。長軸方向は、 $N-95^{\circ}-E$ をとる。規模は、東西方向158cm、南北方向100cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がっている。底面は、広くほぼ平坦で、確認面からの深さは11cmである。覆土は、B軽石を均一に含む暗灰色土である。

遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から古代末～中世初頭の所産と推測される。

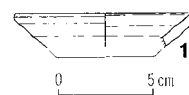
第16号土壌（第46図、図版29）

調査区中央部に位置し、重複する第6号溝を切っている。東側には第6・7号住居跡が近接し、北側には第10・11・12号土壌が、西側には第4号溝跡が、南側には第2号掘立柱建物跡がある。

平面形は、南側が丸く北側は北東部がやや北に伸びる不整形を呈している。規模は、南北方向114cm、

東西方向95cmある。壁は、緩やかに立ち上がっている。底面は、広く平坦で、確認面からの深さは9cmある。覆土は、焼土粒子、炭化粒子を多量に、B軽石を均一に含む暗灰色土である。

出土遺物は、覆土中からNo.1の土師器皿が1個体出土しただけである。時期は、出土遺物や覆土の状態から、古代末～中世初頭の所産と考えられる。



第48図 第16号土壙
出土遺物

第16号土壙出土遺物観察表

1	坏	A.口縁部径9.6、残存高1.7。ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。D.赤色粒、黒色粒。E.内外—淡茶褐色。F.体部上半のみ。G.覆土。H.酸化焰焼成。
---	---	---

第17号土壙（第46図、図版30）

調査区の南側中央に位置し、東側には第4号掘立柱建物跡、南東側には第5号掘立柱建物跡、南側には第3号溝跡、西側には第4号溝跡がある。

平面形は、東西方向に長い隅丸長方形を呈し、北側に幅の狭い張り出しを伴っている。土壙本体の規模は、東西方向120cm、南北方向69cmであり、張り出しの部分は幅37cm、長さ62cmを測る。長軸方向は、N-5°-Eをとる。壁は、傾斜して立ち上がっている。底面は、広く平坦で、確認面からの深さは27.5cmである。張り出し部の底面は、北側に向かって緩やかに立ち上がっており、確認面からの深さは13cmである。覆土は、B軽石を均一に含む暗灰色土である。

遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から古代末～中世初頭の所産と推測される。

第18号土壙（第46図）

調査区南端の西側寄りに位置する。土壙の南側は調査区外に延びるため、全容は不明である。西側には第19号土壙、東側には第5号溝跡があり、北東側には第6号掘立柱建物跡、北側には柵列跡がある。

平面形は、幅の狭い楕円形を呈するものと思われる。規模は、東西方向45cm、南北方向は75cmまで測れる。長軸方向は、N-5°-Eをとる。壁は、直線的にわずかに傾斜して立ち上がる。底面は、広く平坦で、確認面からの深さは40.5cmある。覆土は、B軽石を均一に含む暗灰色土である。

遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から古代末～中世初頭の所産と推測される。

第19号土壙（第46図）

調査区南端の西側寄りに位置する。東側には第18号土壙が、北側には柵列跡がある。

平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形を呈している。規模は、東西方向71cm、南北方向58cmを測る。長軸方向は、N-100°-Eをとる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がる。底面は、広く平坦で、確認面からの深さは47cmを測る。覆土は、B軽石を均一に含む暗灰色土である。

遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から古代末～中世初頭の所産と推測される。

第20号土壙（第46図）

調査区の西端に位置し、北東方向に第2・3号土壙が、南東方向に第7号掘立柱建物跡、南側に第13

号掘立柱建物跡がある。

平面形は、南北方向に長い楕円形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向83cm、東西方向51cmを測る。長軸方向は、N-12°-Eをとる。壁は、傾斜して直線的に立ち上がっている。底面は、広く平坦で、確認面からの深さは18.5cmである。覆土は、ローム粒子を含む暗褐色土である。

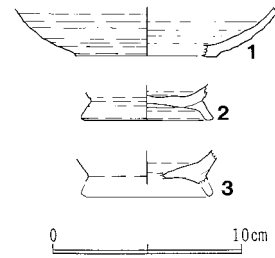
遺物は、何も出土しなかった。本土壙の時期は、覆土の状態から古代の可能性が高いと思われる。

第21号土壙（第46図）

調査区南東端に位置する。北側にはやや離れて第19号掘立柱建物跡がある。

平面形は、やや不整の円形を呈している。規模は、東西方向130cm、南北方向120cmを測る。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がっている。底面は、広く平坦で、確認面からの深さは27.5cmある。覆土は、ローム粒子を含む暗灰褐色土である。

出土遺物は、高台付杯や碗の破片が少量出土しただけである。本土壙の時期は、出土遺物や覆土の状態から、古代の所産と考えられる。



第49図 第21号土壙
出土遺物

第21号土壙出土遺物観察表

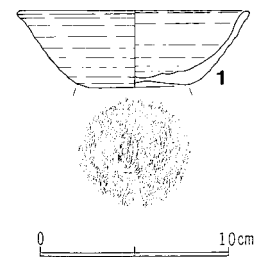
1	杯	A.底部径(7.5)、残存高2.6。B.ロク口成形。C.内外面回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外-暗褐色、内-灰褐色。F.1/8以下。G.覆土。
2	高台付杯	A.高台部径7.0、高台高1.0。B.ロク口成形。底部外面回転糸切り。C.高台部貼り付け後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外-暗黄灰褐色、内-暗灰色。F.高台3/4。G.覆土。
3	高台付杯	B.ロク口成形。C.内外面回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.淡灰色。F.底部1/4以下。G.覆土。H.器表面は風化している。

第22号土壙（第46図）

調査区中央部のやや西側寄りに位置する。南側に第6号溝跡、東側に第2号溝跡があるが、本土壙周辺の遺構密度は希薄である。

平面形は、東西方向に長い楕円形を呈し、規模は東西方向74cm、南北方向45cmある。長軸方向は、N-90°-Eをとる。壁は、直線的に開いて立ち上がっている。底面は、広く平坦をなし、確認面からの深さは25cmある。覆土は、ローム粒子と焼土粒子を微量含む暗灰褐色土である。

出土遺物は、覆土中から完形の杯（第50図No1）が1個体出土している。本土壙の時期は、出土遺物や覆土の状態から古代の所産と考えられる。



第50図 第22号土壙
出土遺物

第22号土壙出土遺物観察表

1	杯	A.口縁部12.2、器高4.1、底部径5.9。B.ロク口成形、底部外面回転糸切り。C.内外面回転ナデ。D.小石、片岩粒、白色粒。E.外-淡褐色、内-暗褐色。F.ほぼ完形。G.覆土。
---	---	--

第23号土壙（第46図）

調査区中央の北側寄りに位置する。西側に第1号掘立柱建物跡、東側に第2号溝跡があるが、本土壙

周辺の遺構密度は希薄である。

平面形は、長方形を基調とするが、東側が張り出している。規模は、南北方向72cm、東西方向66cmある。長軸方向は、 $N-0^{\circ}-E$ をとる。壁は、直線的に若干開いて立ち上がっている。底面は、広く平坦で、確認面からの深さは11cmある。底面の中央付近は、焼けて赤色化している。

遺物は、何も出土しなかった。本土壙の時期は、不明である。

第24号土壙（第46図）

調査区東側の東端付近に位置する。南側に第25号土壙があるだけで、本土壙周辺の遺構密度は希薄である。

平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形を呈している。規模は、南北方向108cm、東西方向56cmを測る。長軸方向は、 $N-32^{\circ}-E$ をとる。壁は、緩やかに立ち上がっている。底面は、広く平坦で、確認面からの深さは6cmである。

遺物は、何も出土しなかった。本土壙の時期は、不明である。

第25号土壙（第46図）

調査区東側の東端付近に位置する。北側に第24号土壙があるだけで、本土壙周辺の遺構密度は希薄である。

平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形を呈し、東側に同じ深さの張り出し部を伴っている。規模は、東西方向158cm、南北方向72cmを測る。張り出し部は、幅40cm、長さ42cmである。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がっている。底面は、広く平坦で、確認面からの深さは8cmある。

遺物は、何も出土しなかった。本土壙の時期は、不明である。

第26号土壙（第46図）

調査区北側の中央付近に位置している。南側には第27号土壙が、東側には第28号土壙がある。第1号掘立柱建物跡と重複しているが、相互の新旧関係は不明である。本土壙は、第1号掘立柱建物跡の底部分にあり、あるいは建物と関係するものかもしれない。

平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸方形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向62cm、東西方向62cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がっている。底面は、広くやや丸みもち、確認面からの深さは10cmある。覆土は、B軽石・ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を均一に含む暗灰色土であり、第1号掘立柱建物跡の柱穴覆土と類似している。

遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から古代末～中世初頭の所産と推測される。

第27号土壙（第46図）

調査区北側の中央付近に位置している。北側には第26号土壙が、北東側には第28号土壙がある。第1号掘立柱建物跡と重複しているが、相互の新旧関係は不明である。本土壙は、第26号土壙と並んで、第1号掘立柱建物跡の底部分にあり、あるいは建物と関係するものかもしれない。

平面形は、不整形円形を呈している。規模は、70cm×72cmある。壁は、直線的に傾斜して立ち上がって

いる。底面は、広く平坦で、確認面からの深さは22cmある。覆土は、第26号土壌と同様で、第1号掘立柱建物跡の柱穴覆土とも類似している。

遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から古代末～中世初頭の所産と推測される。

第28号土壌（第46図、図版30）

調査区北側の中央付近に位置している。北西側には第26号土壌が、南西側には27号土壌がある。第1号掘立柱建物跡と重複しているが、相互の新旧関係は不明である。

平面形は、直径55cmの円形を呈している。壁は、直線的に開いて立ち上がっており、壁の一部は焼けて赤色化している。底面は、やや広く平坦で、確認面からの深さは25cmある。覆土は、第26号土壌、第27号土壌と同様に、B軽石・ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を均一に含む暗灰色土である。

遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から古代末～中世初頭の所産と推測される。

4.溝 跡

第1号溝跡（第52図）

調査区中央部の東側寄りに位置し、重複する第6号溝跡を切っている。本溝跡は、西側の第2号溝跡と併走し、地形の等高線に対して縦走するように、南北方向に約20mほど残存して、ほぼ直線的な流路をとっている。

規模は、上幅99cm、下幅70cmを最大とし、南と北の端部近くで狭くなって削平されている。底面は平坦で、壁は直線的に大きく開いて立ち上がる。確認面からの深さは最浅で10cm、最深で16.5cmを測る。遺物は、何も出土しなかった。

本溝跡の時期は、溝の流路が現在の地割と一致し、なおかつ現地表面に見られる道の幅ともほぼ一致していることから、併走する第2号溝跡よりも新しく、比較的現代に近い時期のものではないかと考えられる。

第2号溝跡（第51・52図、図版31）

調査区中央部の東側寄りに位置し、重複する第6号溝跡を切っている。本溝跡は、東側の第1号溝跡と併走し、地形の等高線に対して縦走するように、南北方向にほぼ直線的な流路をとっている。本溝跡の北端は、大きく開く谷状の形態となり、深さも徐々に深くなっていることから、そのまま北側の河川（現女堀川）に排水を落としていたものと推測される。

溝跡の規模は、最大で上幅184cm、下幅99cmあり、北側の大きく開く部分につながる所はやや狭くなる。

第2号溝跡北端土層説明

第Ⅰ層：淡灰色土層（A軽石を多量含む。現耕作土。）

第Ⅱ層：暗灰色土層（A軽石を均一に含む。水田層。）

第Ⅲ層：暗灰色土層（A軽石を均一に含む。水田層。）

第1層：暗灰色土層（B軽石・鉄斑を含む。粘性に富み、しまりを有する。）

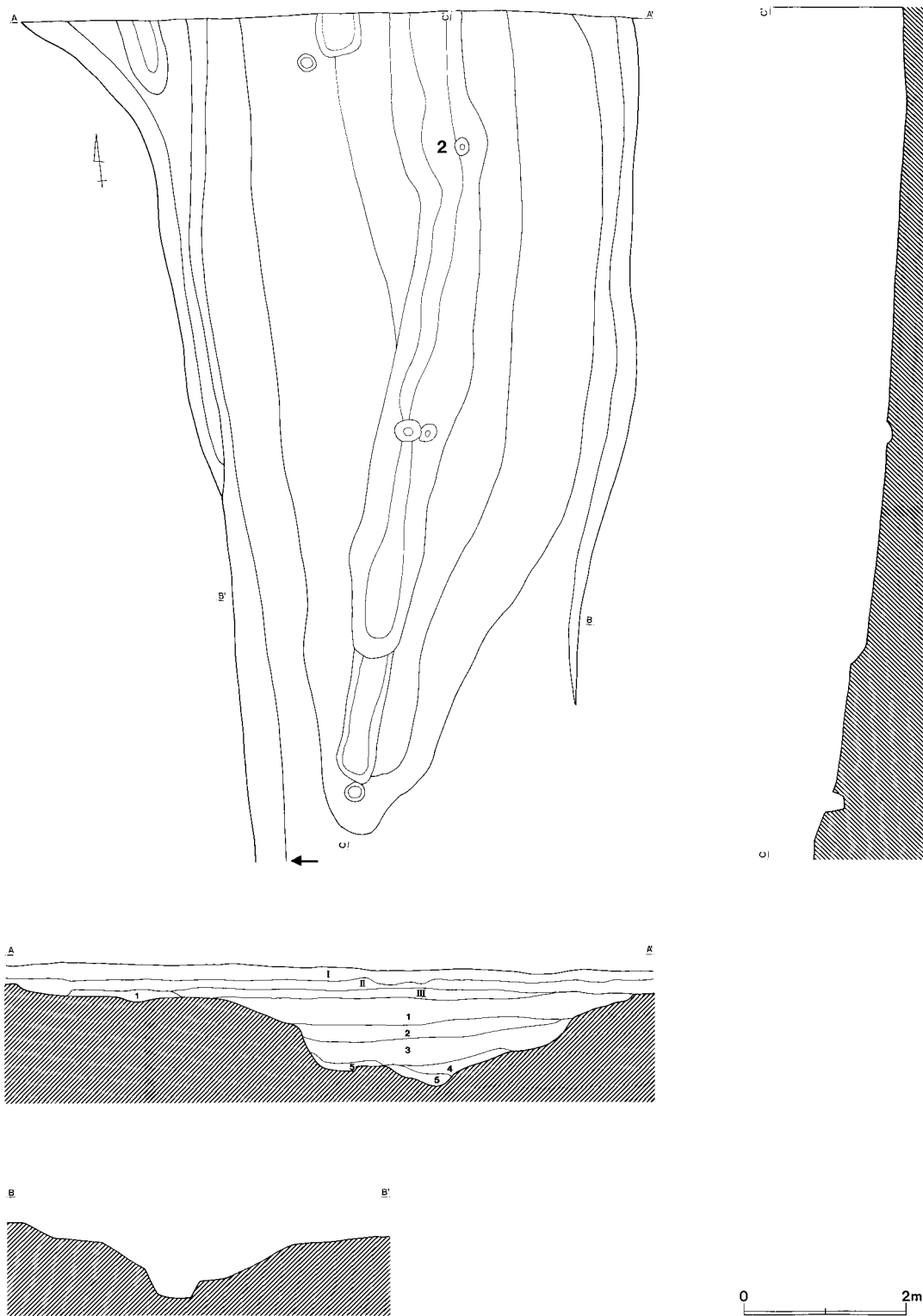
第2層：暗灰褐色土層（鉄斑を多量に、B軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗灰色土層（B軽石を均一に、鉄斑・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：暗灰褐色土層（ローム粒子・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

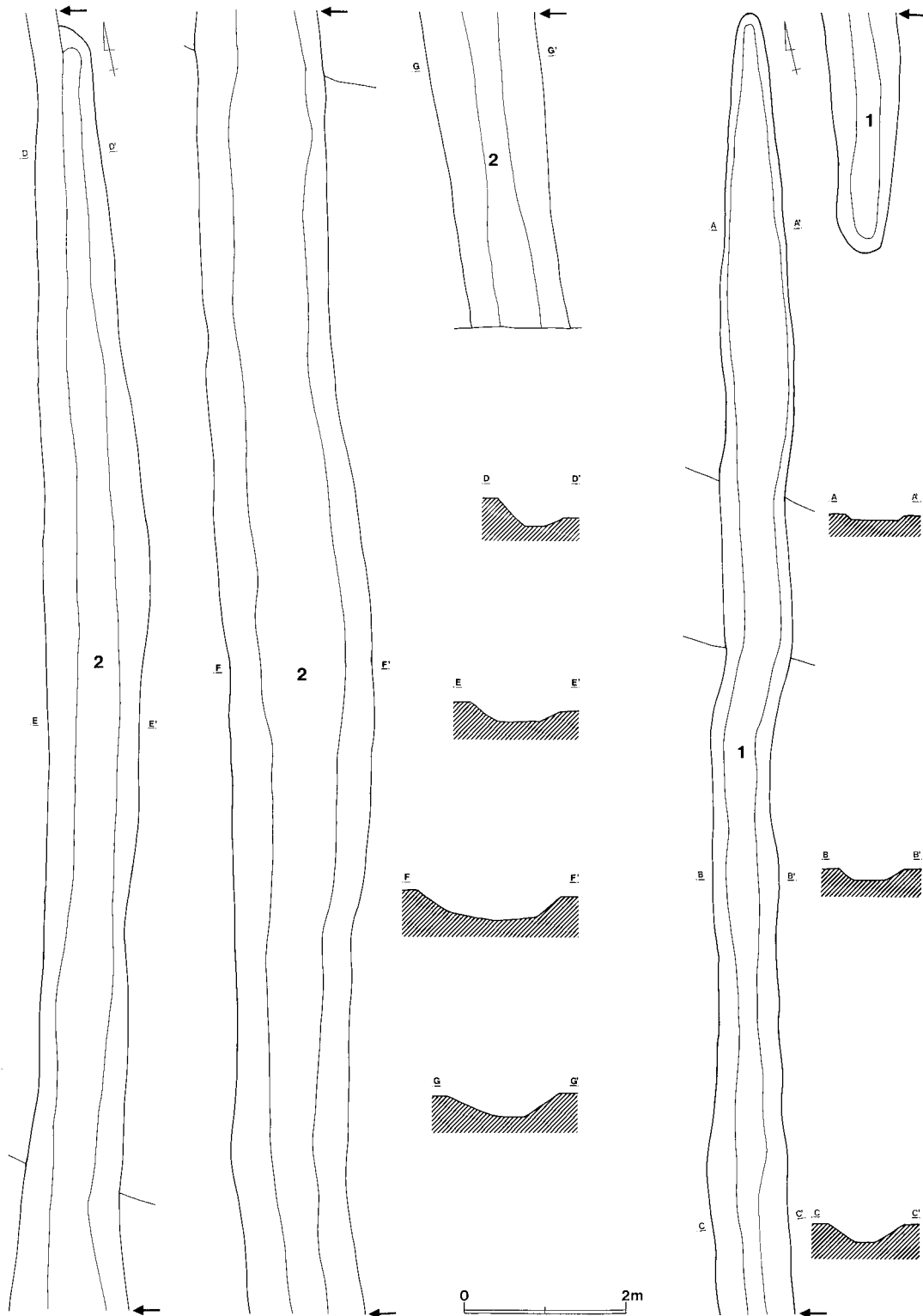
第5層：暗灰褐色土層（ロームブロック・小礫を多量に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

壁は、緩やかに大きく開いて立ち上がる。溝底面は、比較的広く丸みを持つ形態で、確認面からの深さは最浅で26.5cm、最深で36cmを測る。覆土は、B軽石と砂利を含む暗灰褐色土で、南側の第3号溝跡や西側の第4号溝跡の覆土と類似している。遺物は、何も出土しなかった。



第51図 第2号溝跡北端

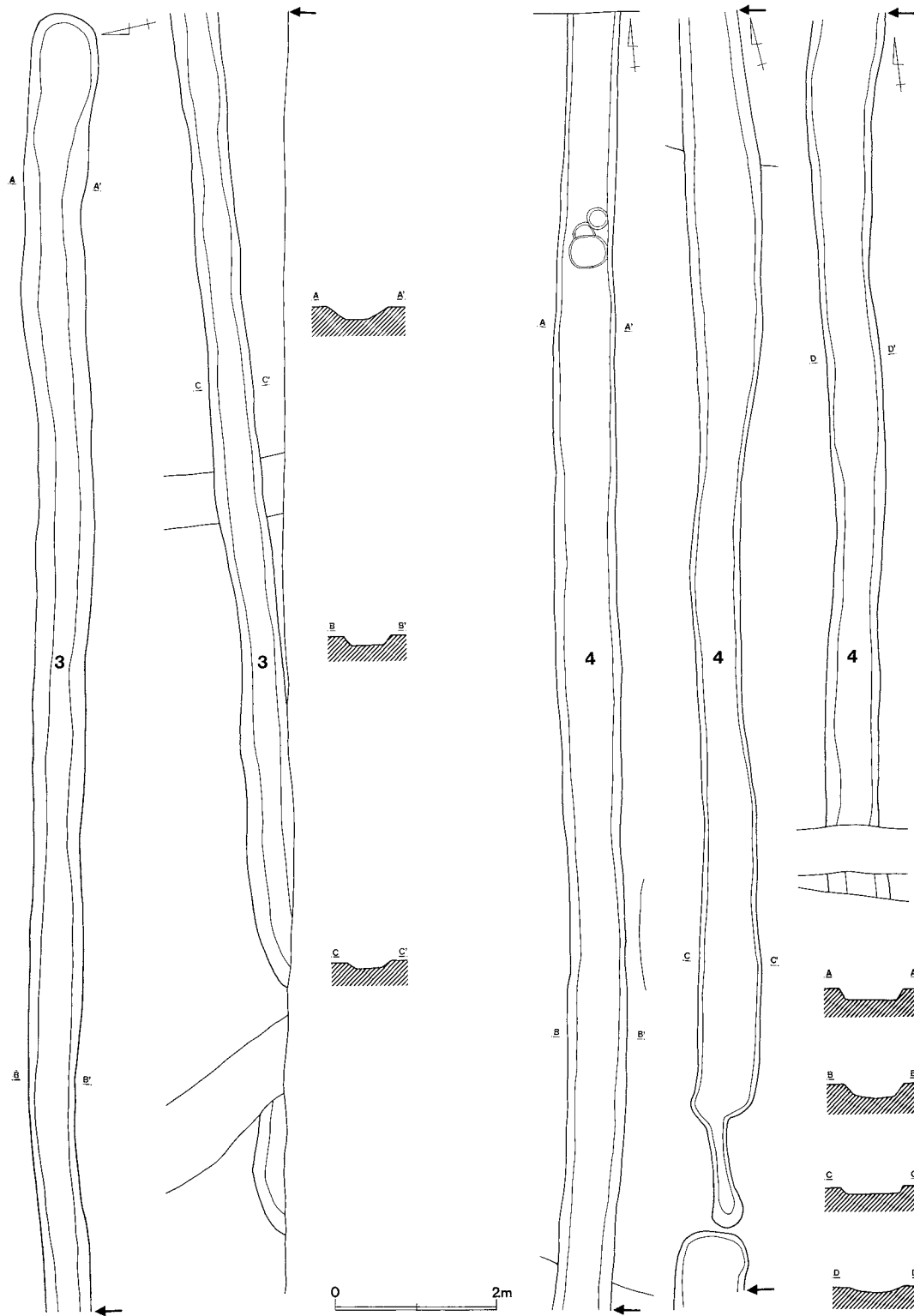
本溝跡は、その形態や位置から、南側の第3号溝跡や西側の第4号溝跡とともに、第1号掘立柱建物跡、第6号住居跡、第3・4・5号掘立柱建物跡からなる屋敷地の東側を区画する溝と考えられ、その時期も、それらの遺構と同じく、古代末～中世初頭頃の所産と推測される。



第52図 第1・2号溝跡

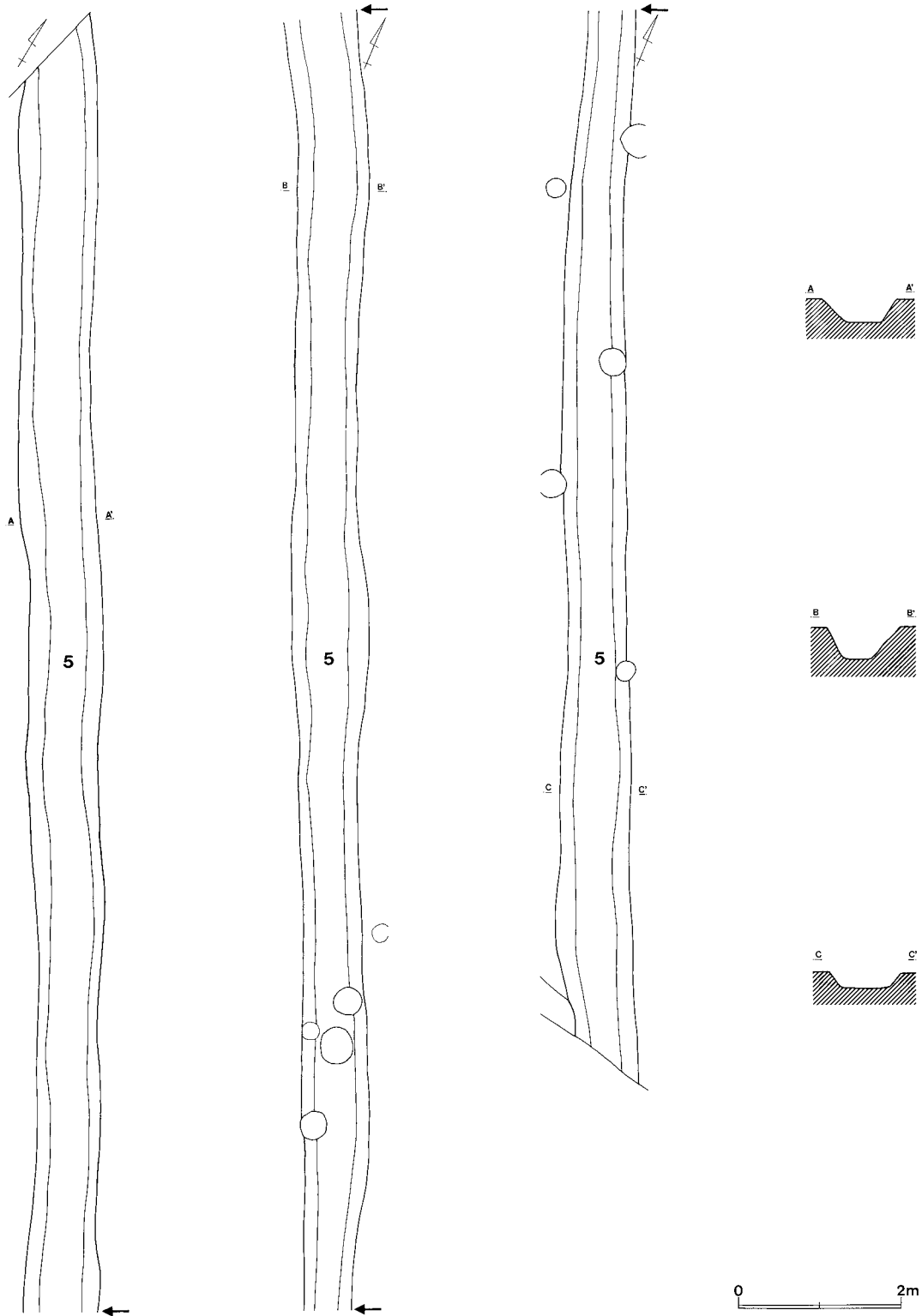
第3号溝跡 (第53図)

調査区南側の中央付近に位置する。本溝跡は、地形の等高線に沿うように東西方向に直線的な流路をとり、その東側は第2号溝跡に接し、西側は第4号溝跡のさらに西に延びている。



第53図 第3・4号溝跡

溝の規模は、上幅80cm、下幅38cmを最大とし、平均は上幅60cm、底部幅30cm前後である。壁は、緩やかに開いて立ち上がっている。底面は、比較的広く平坦で、確認面からの深さは7cm～22cmある。覆土は、B軽石を含む暗灰褐色土である。遺物は、何も出土しなかった。



第54図 第5号溝跡

時期は、東側の第2号溝跡や西側の第4号溝跡と同じく、古代末～中世初頭頃と推測される。

第4号溝跡（第53図）

調査区の中央部に位置し、重複する第6号溝跡を切っている。本溝跡は、南北方向に向いてほぼ直線的な流路をとっており、ほ場整備以前に本遺跡の周囲に見られた条里形地割り（児玉条里）の坪線の位置にほぼ一致している（第5図）。

溝跡の規模は、最高で上幅94cm・下幅71cmあり、平均では上幅70cm、底部幅46cm前後である。壁は、直線的に開いて立ち上がっている。底面は、比較的広く平坦で、確認面からの深さは5cm～31cmを測る。覆土は、B軽石を均一に含む暗灰色土である。本溝跡の南側には、一箇所幅が細くなり、約140cmの間途切れている部分が見られるが、本溝跡が屋敷地の西側を画する溝であることからすると、おそらく屋敷の出入口部の一つと考えられる。遺物は、何も出土しなかった。

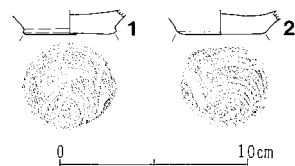
本溝跡の時期は、本溝跡とともに屋敷跡を区画する第2号溝跡や第3号溝跡と同じく、古代末～中世初頭頃と考えられる。

第5号溝跡（第54図）

調査区の西側に位置し、重複する第6・9・10・11号掘立柱建物跡と第3号溝跡に切られている。本溝跡は、調査区内では北西から南東方向に向かって直線的な流路をとっており、おそらく本遺跡の南側約90mに位置する辻堂遺跡B地点（恋河内1996）V区の第23号溝跡か第24号溝跡に繋がるものと思われる。

溝跡の規模は、最高で上幅98cm、下幅58cmあり、平均で上幅90cm、下幅48cm前後を測る。壁は、直線的に傾斜して立ち上がっている。底面は、比較的広く平坦で、確認面からの深さは19.5cm～36cmある。覆土は、B軽石を含む暗灰色土である。出土遺物は、覆土中より土師器皿の破片（第55図No1・2）などが出土しただけである。

本溝跡の時期は、出土遺物や覆土の状態から、古代末から中世初頭の所産と考えられる。



第55図 第5号溝跡出土遺物

第5号溝跡出土遺物観察表

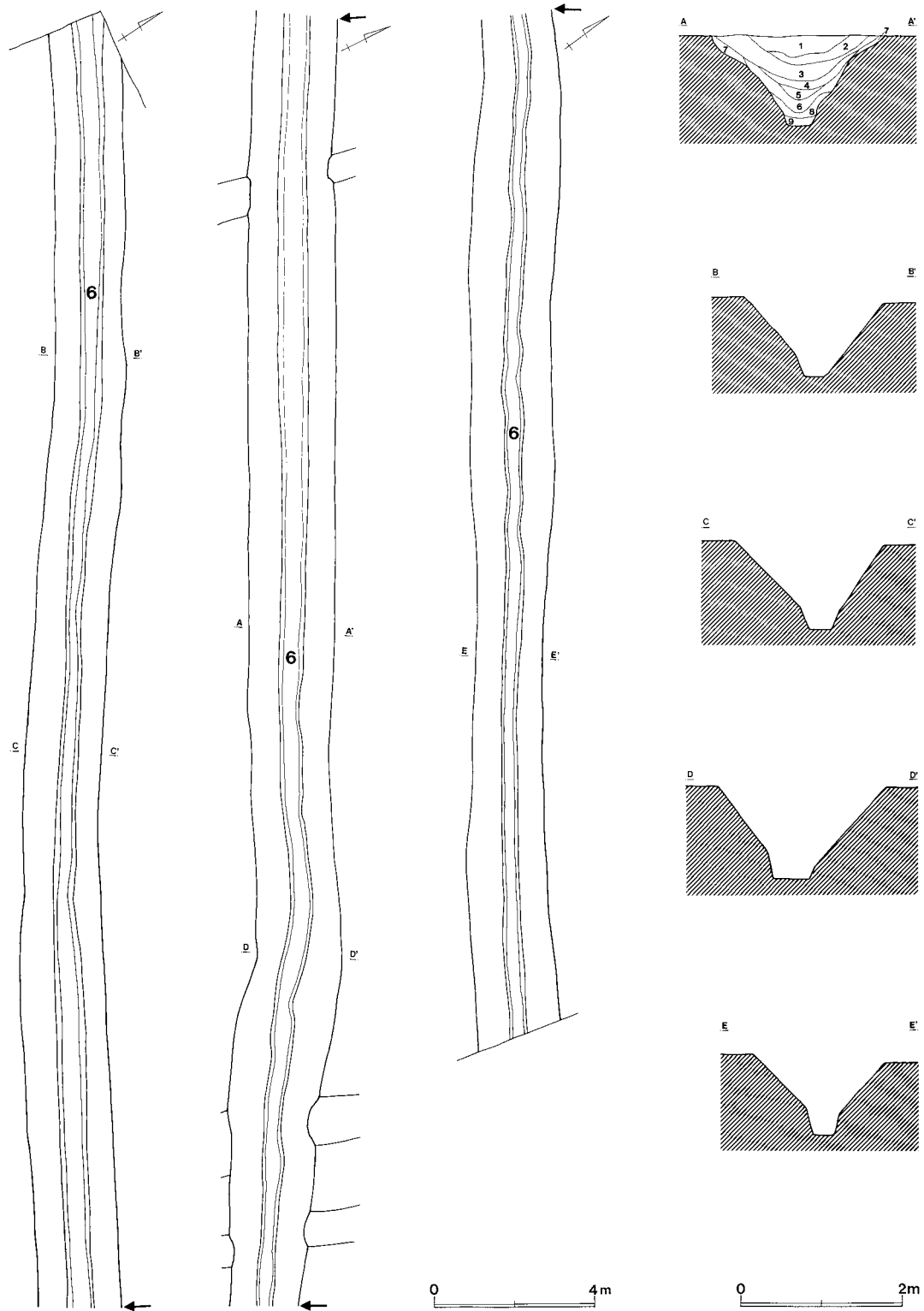
1	土師器皿	A.底部径4.8。B.ロクロ成形、底部外面回転糸切り。C.内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外-淡褐色。F.底部のみ。G.覆土。H.酸化焰焼成。
2	土師器皿	A.底部径4.8。B.ロクロ成形、底部外面回転糸切り。C.内外面回転ナデ。D.白色粒。E.内外-淡褐色。F.底部のみ。G.覆土。H.酸化焰焼成。

第6号溝跡（第56図、図版31）

調査区の北西側から南東側にかけて検出されており、重複する第3・4・6・7号住居跡、第16号掘立柱建物跡、第16号土壇、第1・2・4号溝跡に切られている。本溝跡は、北西から南東方向に、地形の等高線と併走するように、ほぼ直線的な流路をとっている。

溝跡の規模は、最高で上幅215cm、下幅40cmあり、平均は上幅180cm、底部幅25cm前後を測る。確認面からの深さは、91cm～118cmを測る。溝断面の形態は、V字の形態に近く、壁は狭い底面から垂直に

に立ち上がり、途中から大きく直線的に傾斜して開いている。覆土は、ローム粒子やマンガン塊を含む暗灰色の粘質土を主体としており、常時多くの水が流れていたような形跡は見られない。また、土層断面の観察では、その埋没状況は自然堆積を示しており、検出された溝跡の形状以降は掘り返し等による



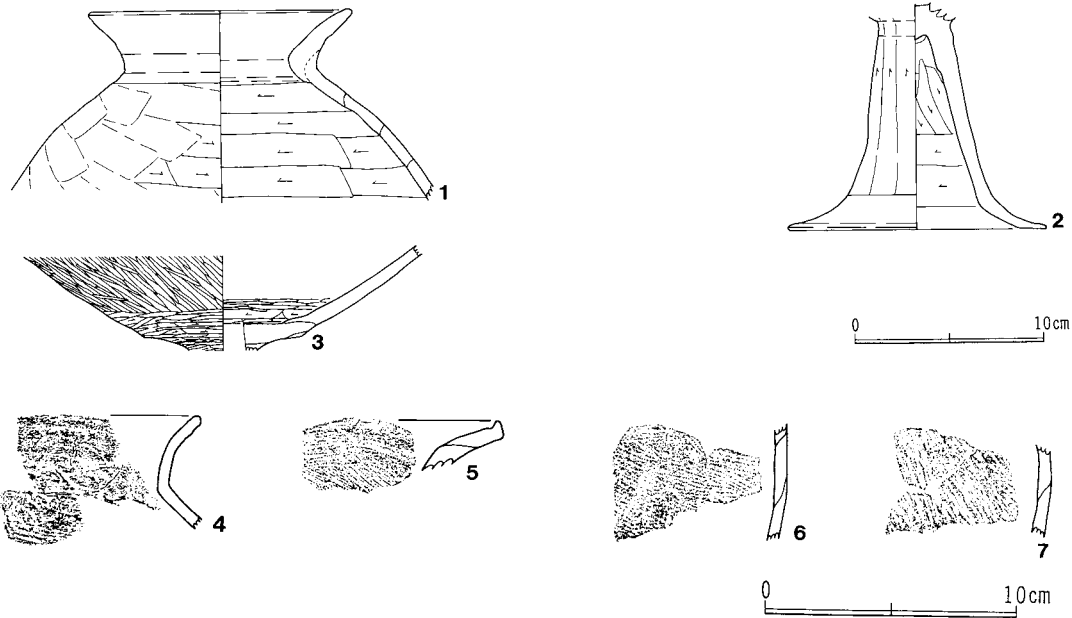
第56図 第6号溝跡

溝の継続的な利用や管理はされていなかったようである。

出土遺物は、覆土中から古墳時代前・中期の土器片が、少量出土しただけである。本溝跡の時期は、出土遺物や覆土の状態から、古墳時代前期～中期の所産と考えられる。

第6号溝跡土層説明

- 第1層：暗茶褐色土層（鉄斑を多量に、マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：黒褐色土層（鉄斑を均一に、炭化粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗褐色土層（鉄斑・ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗灰褐色土層（ローム粒子を均一に、マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：暗灰色土層（ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第6層：暗灰色土層（ローム粒子・マンガン塊を均一に微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第7層：暗茶褐色土層（マンガン塊を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第8層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第9層：暗灰色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第57図 第6号溝跡出土遺物

第6号溝跡出土遺物観察表

1	壺	A.口縁部径13.8、残存高10.0。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部ヨコナデ、口縁部内外ヨコナデ。胴部外面ケズリの後雑なナデ、内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外—明橙褐色。F.口縁部及胴部上半。G.覆土。
2	高 坏	A.脚底部径13.8、残存高11.8。B.粘土紐積み上げ。C.脚裾ナデ、脚柱内外面ケズリ。D.白色粒、黑色粒、片岩粒。E.内外—褐色。F.脚柱部のみ。G.覆土。H.器面風化が著しい。
3	高 坏	A.残存高5.5。B.粘土紐積み上げ。C.外面ケズリ後ミガキ、内面ナデもしくはケズリ後ミガキ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外—淡橙褐色。F.坏底部1/2、坏体部1/4。G.覆土。
4	台付 甕	B.粘土紐積み上げ。C.口縁部ヨコナデ、内外面ハケ。D.白色粒、片岩粒。E.内外—明褐色。F.口縁部破片。G.覆土。
5	甕	B.粘土紐積み上げ。C.内外面ハケ。D.白色粒、黑色粒、赤色粒。E.内外—暗褐色。F.口縁部破片。G.覆土。
6	甕	B.粘土紐積み上げ。C.外面ハケ、内面ナデ。D.白色粒。E.暗褐色。E.内外—暗褐色。F.胴部破片。G.覆土。
7	甕	B.粘土紐積み上げ。C.外面ハケ、内面ナデ。D.白色粒、片岩粒。E.内外—明褐色。F.胴部破片。G.覆土。

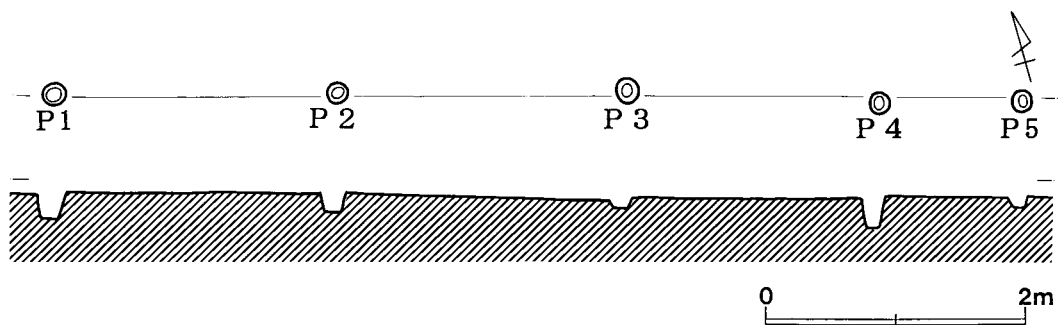
5. 柵列跡

第1号柵列跡 (第58図)

調査区の南西側に位置する。南側には第18・19号土壌が、北側には第8号掘立柱建物跡が、東側には第6号掘立柱建物跡がある。

柱穴は、P1～P5の5箇所で、直線上に並んでいる。いずれも直径16cm～19cmの小規模な円形を呈し、確認面からの深さは6.5cm～22.5cmある。柵列の方向は、 $N-105^{\circ}-E$ を向いている。柱心間は、西から2.15m、2.2m、1.9m、1.1mで不揃いである。柱穴覆土は、B軽石を均一に含む暗灰褐色土である。

遺物は、何も出土しなかった。時期は、覆土の状態から古代末～中世初頭の所産と推測される。



第58図 第1号柵列跡



第V章 結 語

蛭川坊田遺跡の発掘調査では、本報告書に掲載した資料に見られるように、主に平安時代中期の小規模な集落跡と末期の屋敷跡が検出されている。そしてこの中で特に注目されるのが、遺構の覆土中にB軽石を含む後者の平安時代末期の屋敷跡であり、当地方の古代集落から中世村落への移行期の様相を知るうえで、大変重要な資料と言えるものである。

本遺跡で検出された平安時代末期の屋敷跡に見られる大きな特徴は、屋敷内の建物の構成が掘立柱建物群を主体とし、屋敷地が比較的小規模で直線的な溝によって、長方形の短冊形に区画されていることである。この屋敷を区画する溝（第2・3・4号溝跡）は、本遺跡の周辺に見られる条里形地割りの方向と概ね一致しているが、当地方の平安時代中期（10世紀）までの一般的な集落には、このような敷地の区画を目的とする直線的な溝はほとんど見られない。

この屋敷跡は、調査区内では調査区中央部の第4号溝跡を境にして、西側と東側の二つの区画に分かれている。西側区画の屋敷地内に見られる該期の遺構は、掘立柱建物跡9棟（第6～8・12～14・16～18号掘立柱建物跡）、竪穴式住居跡1軒（第4号住居跡）、柵列跡1条、土壇6基（第4・5・8・9・18・19号土壇）である。掘立柱建物跡は、建物同士の重複が激しく密集した配置をとっているが、建物の長軸方向を南北と東西にとる二者のタイプが認められる。2間3間4面庇付の同一構造で、両タイプの母屋的建物である第14号掘立柱建物跡（南北方向）と第18号掘立柱建物跡（東西方向）が、相互に重複していることを考慮すると、この長軸方向を異にする二者の建物群は、時期差の可能性が考えられるが、その相互の新旧関係については明確ではない。竪穴式住居跡の第4号住居跡の特徴については、すでに述べたことがあるように（恋河内1996）、形態的には古代の竪穴式住居の系譜上に連なるものであるが、住居中央に何だかの構造物か付属施設を伴った炉をもっており、居住施設と言うよりは工房的あるいは竈屋的な性格の建物と推測されるものである。時期は、覆土上半にB軽石を多量に含むことから、B軽石の降下年代（天仁元年：1108年）の直前に近い11世紀末～12世紀初頭頃と考えられる。東側区画の屋敷地に所在する第6号住居跡と掘立柱建物跡群の関係のように、本屋敷では掘立柱建物も竪穴式住居も建物の向き（軸方向）は同一方向に規制されると考えられるならば、第4号住居跡は長軸方向を南北に向けていることから、南北方向に建物の長軸を向ける建物群に伴う施設である可能性もあろう。

東側区画の屋敷地内に見られる該期の遺構は、掘立柱建物跡4棟（第1・3～5号掘立柱建物跡）、竪穴式住居跡1軒（第6号住居跡）、土壇11基（第10～17・26～28号土壇）である。このうち、4棟の掘立柱建物跡群と1軒の竪穴式住居跡は、いずれも建物の軸方向を揃えて南北方向に一直列に整然と配列されており、屋敷を構成する同時に存在した性格の異なる建物群と見てよいであろう。北側に位置する2間3間4面庇付の第1号掘立柱建物跡は、西側屋敷地の第14号掘立柱建物跡や第18号掘立柱建物跡と同じく、屋敷の中心をなす母屋的建物と考えられる。南側の第3～5号掘立柱建物跡の3棟は、建物の規模や形態から見て、母屋の第1号掘立柱建物跡に対する付属屋的建物と考えられ、その柱穴規模や構造の貧弱性から比較的簡易な作りの建物と推測される。このうち第3号掘立柱建物跡と第4号掘立柱建物跡は、ほぼ同一規模で建物内部の間取りが対称構造を有する建物であり、対面的に並列した配置をとることからすると、あるいは家畜小屋のような性格の簡易建物であったかもしれない。竪穴式住居跡の第6号住居跡は、住居の長軸方向を異にするが、構造的には西側屋敷地の第4号住居跡と比較的類似し

ている。カマドから出火したと推測される火災住居のため、住居内に炉を伴うか明確ではないが、古代の一般的な住居跡ではあまり例を見ないけがき針のような棒状の鉄製品（第20図No3）が床面上から1点出土しており、また火災住居にもかかわらず生活に必要な日用品や日常雑器の痕跡がほとんど見られないことは、これまでの一般的な住居跡とはやや異なる点として注意されよう。

この東西それぞれの屋敷地に所在する遺構群の変遷過程については、遺構同士の重複による切合関係が明確でないことや、遺構に伴う遺物が皆無の状態であることから、具体的に検討することができない。しかしながら、この東西両屋敷地を区画する第4号溝跡には、途中1.40mほど溝幅が極端に細くなって途切れ、通路と推測される部分が見られることから、両屋敷はある時期並存し、ある程度密接な関係を持っていたものと推測される。

以上のように、本遺跡で検出された平安時代末期の屋敷跡は、2間3間4面庇付の掘立柱建物による母屋を中心に、複数の小規模で簡易的な掘立柱建物と1軒の工房的あるいは竈屋の性格の強い竪穴式住居による付属屋によって構成されており、それまでの竪穴式住居とおそらく存在したと思われる平地式住居を主体とした一般的な東国の古代集落のあり方とは様相がかなり異なっている。直線的な溝によって屋敷地を区画し、その居住施設の主体が掘立柱建物群に移行している点は、中世の居住形態に近いと言えるが、中世の屋敷跡に一般的な井戸が見られない点は注意される。当地方で調査された14・15世紀以降の中世の屋敷跡では、屋敷全体や村落の共用と推測されるやや規模の大きな井戸を伴うのが一般的であり、城の内遺跡（恋河内1997）や壺丁田遺跡（恋河内1998）などの在地領主クラスの屋敷跡では、溝や堀による広い区画毎に共有する比較的規模の大きな井戸とともに、その中の特定の建物が占有する小規模な井戸を複数伴う場合が多い。本遺跡の場合、北側に河川（現女堀川）が隣接していて比較的水の便が良かったことも考慮されるが、中世の居住形態に特有の共用・占用の井戸が見られないことは、古代から中世への居住形態の移行期に位置づけられる一つの要素として評価できるかもしれない。

<参考文献>

- | | | |
|-------|------|--|
| 赤熊 浩一 | 1988 | 『将監塚・古井戸Ⅱ—歴史時代—』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集 |
| 荒川 正夫 | 2001 | 「まとめ」『大久保山X』 早稲田大学本庄校地文化財調査報告10 |
| 石塚 和則 | 1986 | 『将監塚 一縄文時代—』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集 |
| 磯崎 一 | 1995 | 『今井川越田遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第177集 |
| 井上 尚明 | 1986 | 『将監塚・古井戸Ⅰ—歴史時代—』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集 |
| 大熊 季広 | 2002 | 「物見塚古墳の墳形および墳丘規模確認調査」『児玉郡市文化財担当者会報』第2号 |
| 恋河内昭彦 | 1989 | 『共和小学校校庭遺跡』 児玉町文化財調査報告書第10集 |
| | 1990 | 『雷電下遺跡 —B・C地点—（図版編）』 児玉町文化財調査報告書第13集 |
| | 1993 | 『川越田遺跡Ⅱ』 児玉町遺跡調査会報告書第5集 |
| | 1995 | 『南共和・新宮遺跡』 児玉町遺跡調査会報告書第6・7集 |
| | 1995 | 『飯玉東Ⅱ・高縄田・樋越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴蒔・毛無し屋敷・石橋』 児玉町文化財調査報告書第17集 |
| | 1996 | 『辻堂遺跡Ⅰ』 児玉町文化財調査報告書第19集 |
| | 1996 | 『辻堂Ⅱ・南街道・宮田遺跡』 児玉町文化財調査報告書第20集 |
| | 1997 | 『城の内・日延・東田・浅見境北遺跡』 児玉町文化財調査報告書第23集 |
| | 1998 | 『向田A・向田B・壺丁田遺跡』 児玉町文化財調査報告書第27集 |
| | 1999 | 『雷電下Ⅲ・南ノ前遺跡』 児玉町文化財調査報告書第32集 |

- 2001 「鷲山古墳の第2次墳形確認調査」『児玉郡市文化財担当者会報』第1号
- 2005 『後張遺跡Ⅲ —C地点の調査—』児玉町遺跡調査会報告書第20集
- 駒宮 史朗 1979 『雷電下・飯玉東』埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集
- 埼玉 県 1982 『埼玉県史』資料編2
- 坂本和俊他 1986 『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県史編さん室
- 末木 啓介 2004 「北武蔵の羽釜」『研究紀要』第26号 埼玉県立歴史資料館
- 2006 「足立郡における9世紀後半から10世紀の煮炊具について」『埼玉の考古学Ⅱ』埼玉考古学会
- 菅谷浩之・駒宮史朗 1973 「生野山古墳群発掘調査概報」『第6回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉県考古学会 埼玉県遺跡調査会 埼玉県教育委員会
- 鈴木 徳雄 1980 『深町・城の内遺跡』深町遺跡調査会
- 1983 『阿知越遺跡Ⅰ』児玉町文化財調査報告書第3集
- 1984 『阿知越遺跡Ⅱ』児玉町文化財調査報告書第4集
- 滝瀬 芳之 1997 『今井川越田遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第191集
- 立石 盛詞 1982 『後張Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集
- 1983 『後張Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集
- 田口 一郎他 1975 『いぶき—児玉郡及び周辺地域における前方後円墳の研究—』8・9合併号 埼玉県立本庄高等学校考古学部
- 田中 信 2003 「武蔵の在り土器供膳具」『中世東国の世界Ⅰ 北関東』高志書院
- 2004 「関東における古代末から中世の食器の様相」『第12回特別展 1108浅間山大噴火、中世への胎動 展示解説図録』かみつけの里博物館
- 富田和夫・赤熊浩一 1985 『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集
- 永井いずみ 2004 「埼玉県北部における10世紀以降の土師質土器」『研究紀要』第19号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 伴瀬 宗一 1996 『今井川越田遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第178集
- 増田 一裕 1992 「児玉地方の旧石器時代」『児玉郡市における埋蔵文化財の成果と概要 —平成3年度後期埋蔵文化財担当者会議資料—』埼玉県教育局文化財保護課 児玉郡市文化財担当者会
- 増田 逸朗 1977 『塚本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集
- 宮井 栄一 1989 『古井戸 —縄文時代—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集

写 真 图 版

図版 1



1. 調査区全景(1)



2. 調査区全景(2)

図版 2



1. 調査区西側



2. 調査区東側

図版 3



1. 第1号住居跡



2. 第1号住居跡カマド

図版 4



1. 第2号住居跡



2. 第2号住居跡カマド

図版 5



1. 第3号住居跡

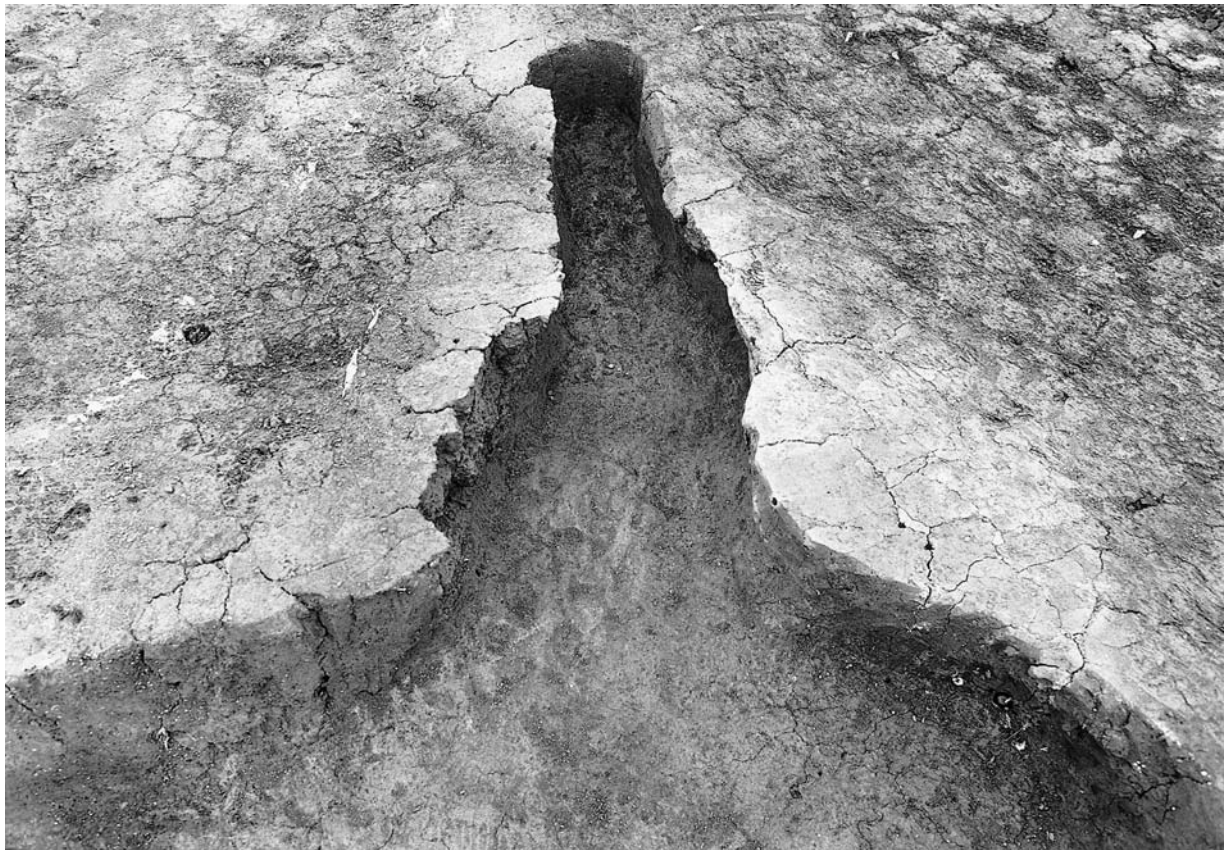


2. 第3号住居跡カマド

図版 6

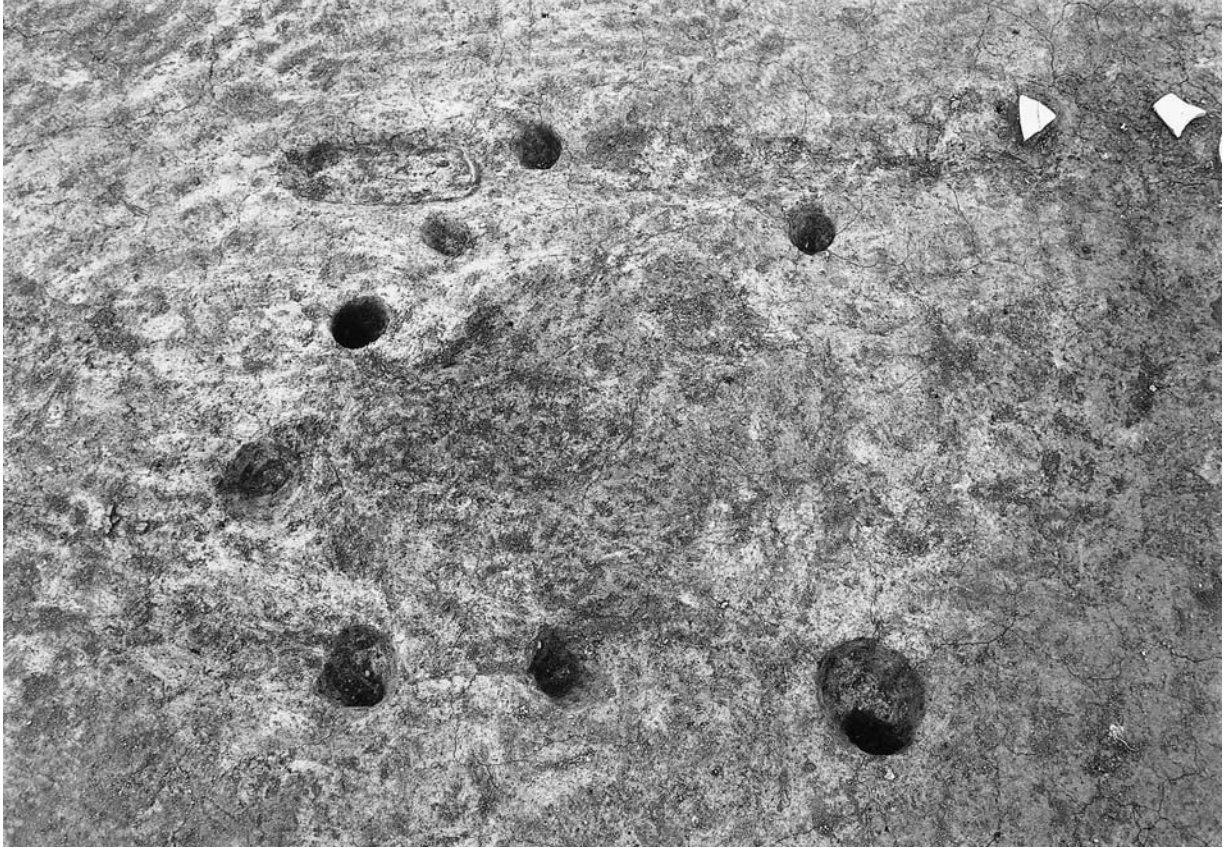


1. 第4号住居跡



2. 第4号住居跡カマド

图版 7



1. 第 4 号住居跡炉



2. 第 4 号住居跡遺物出土狀態

図版 8



1. 第5号住居跡



2. 第5号住居跡カマド

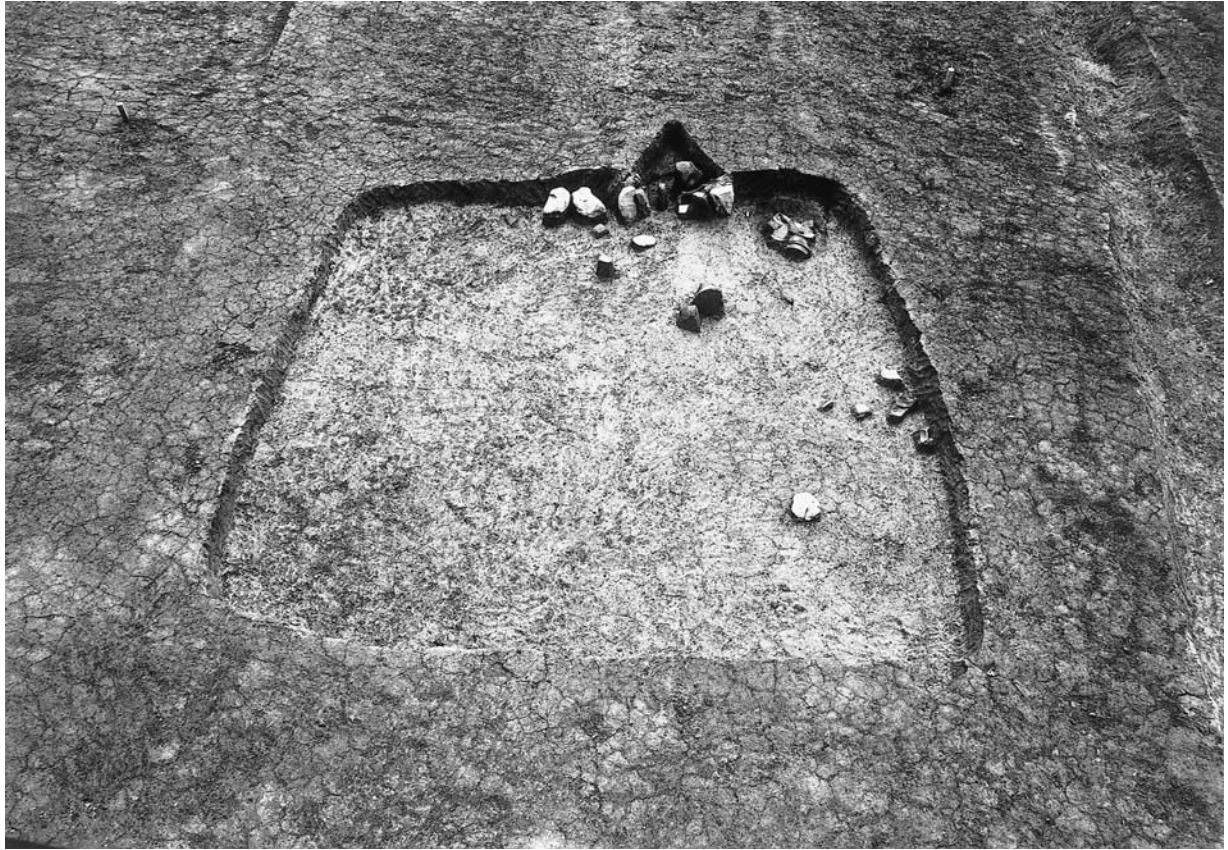
図版 9



1. 第6・7号住居跡



2. 第6号住居跡カマド



1. 第8号住居跡



2. 第8号住居跡カマド

図版11

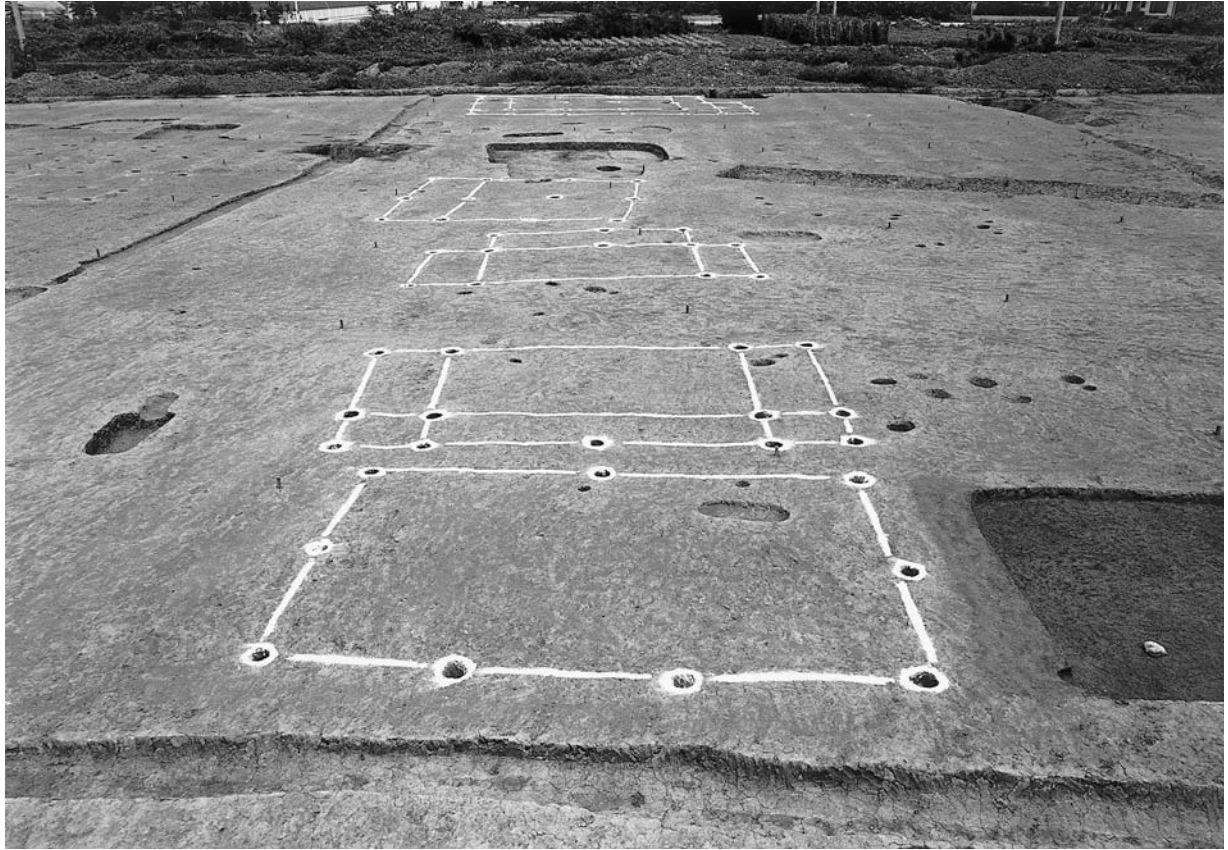


1. 調査区西側建物群（東より）

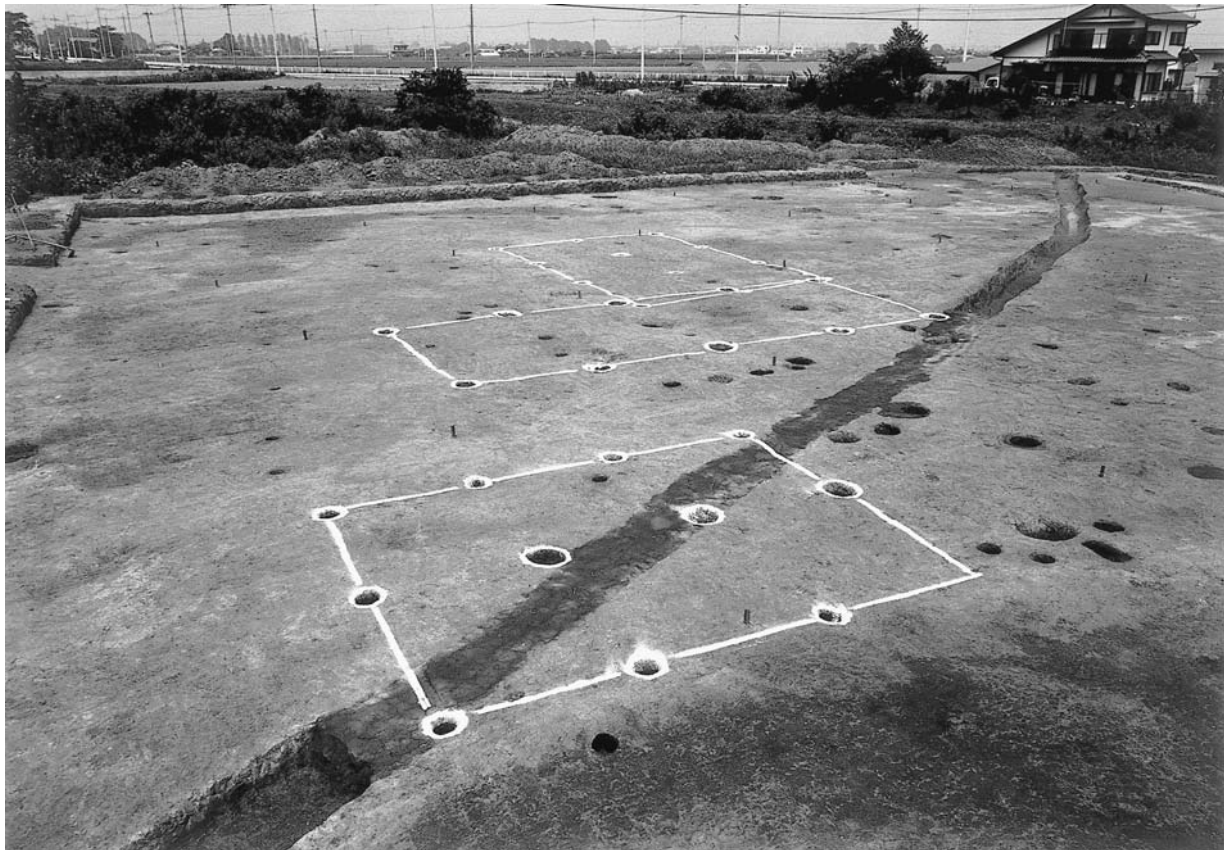


2. 調査区西側建物群（南より）

图版12



1. 第1～5号掘立柱建物跡

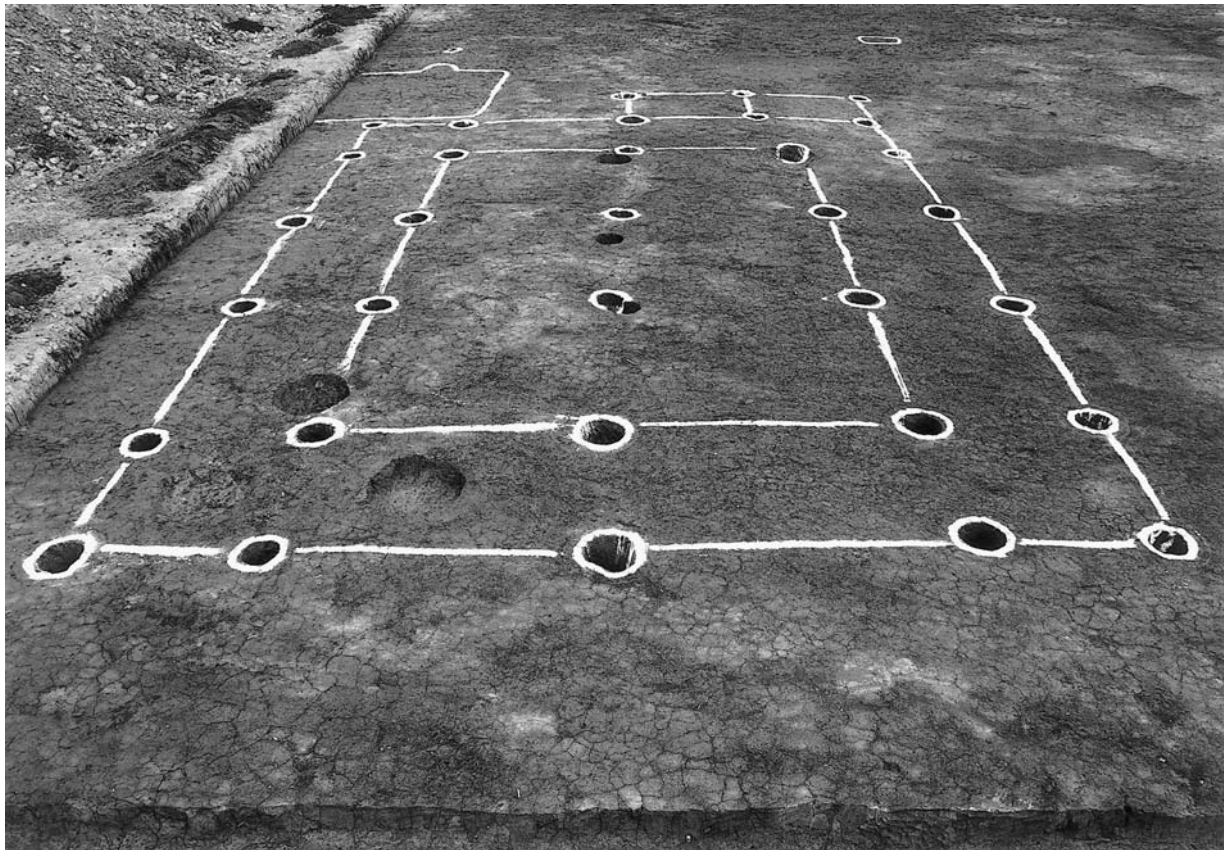


2. 第6～8号掘立柱建物跡

図版13

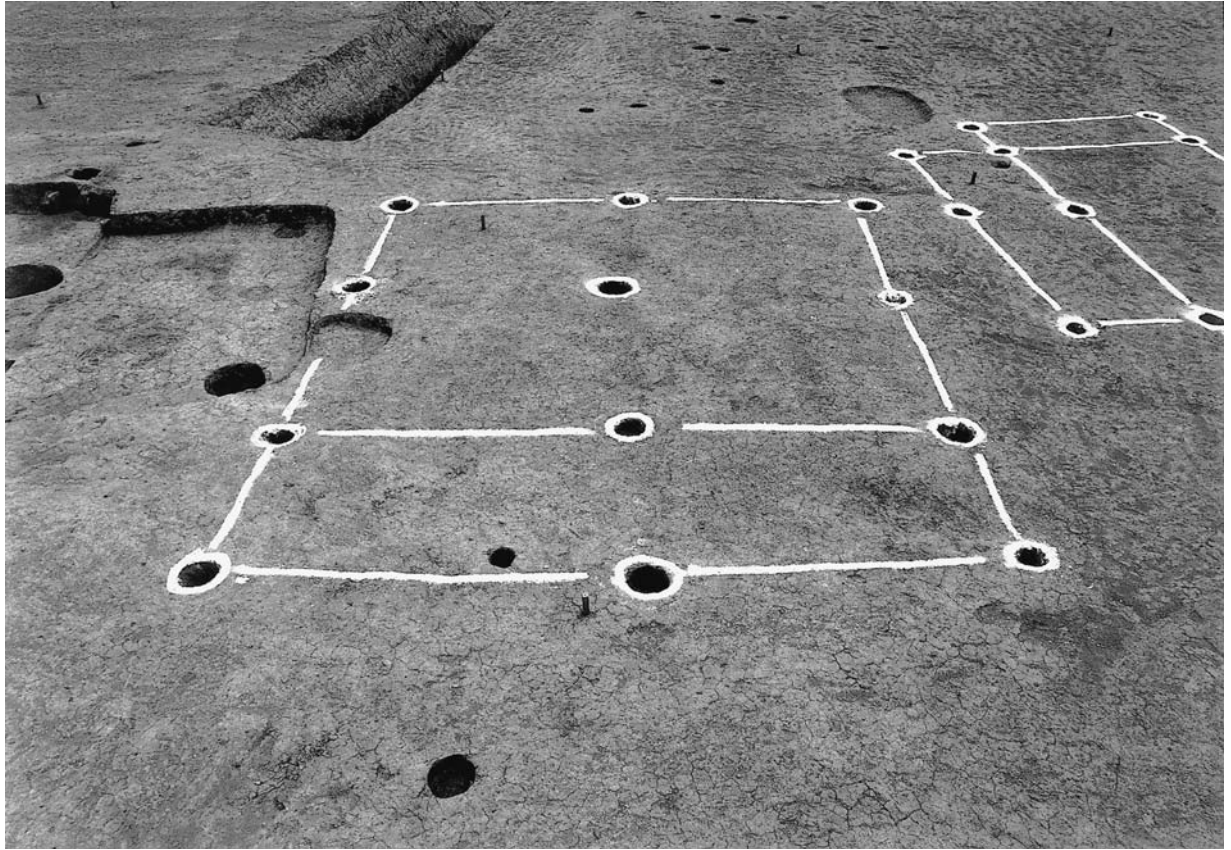


1. 第1号掘立柱建物跡（南から）



2. 第1号掘立柱建物跡（西から）

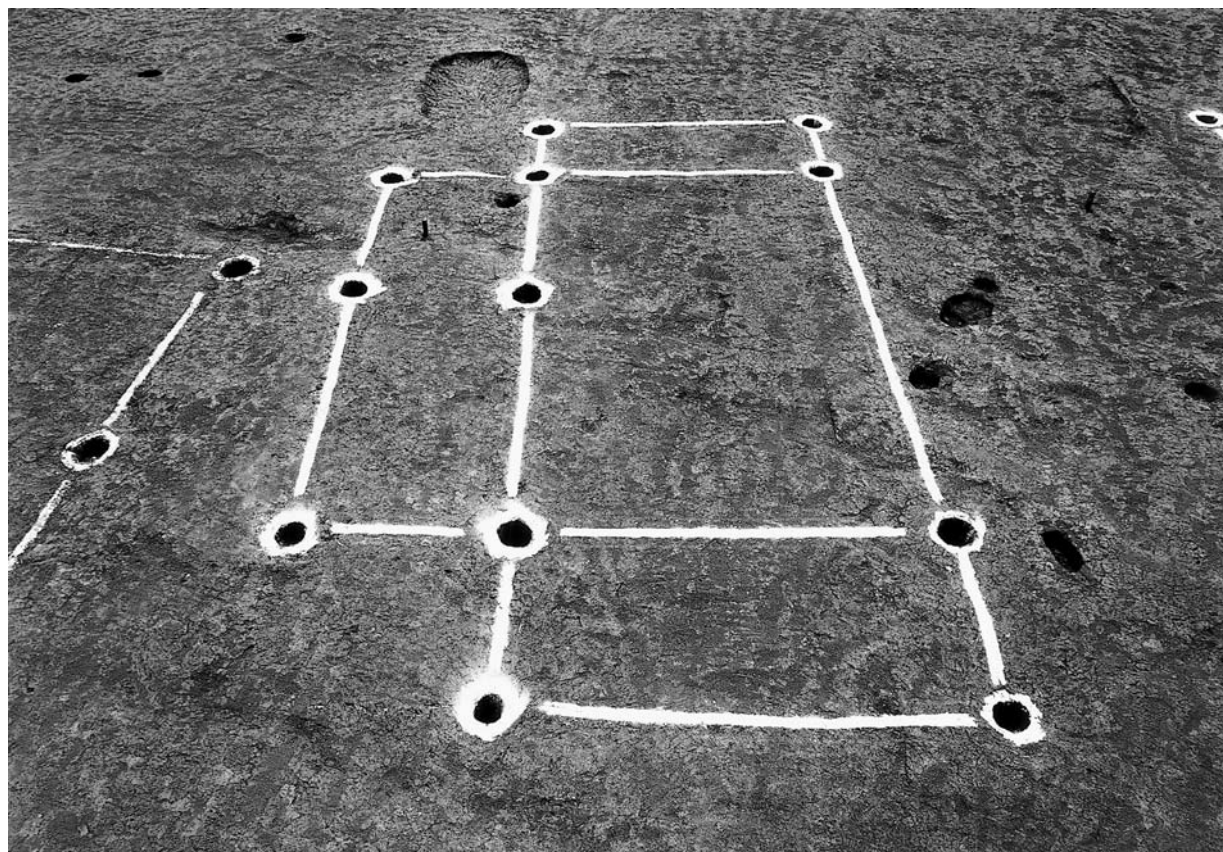
图版14



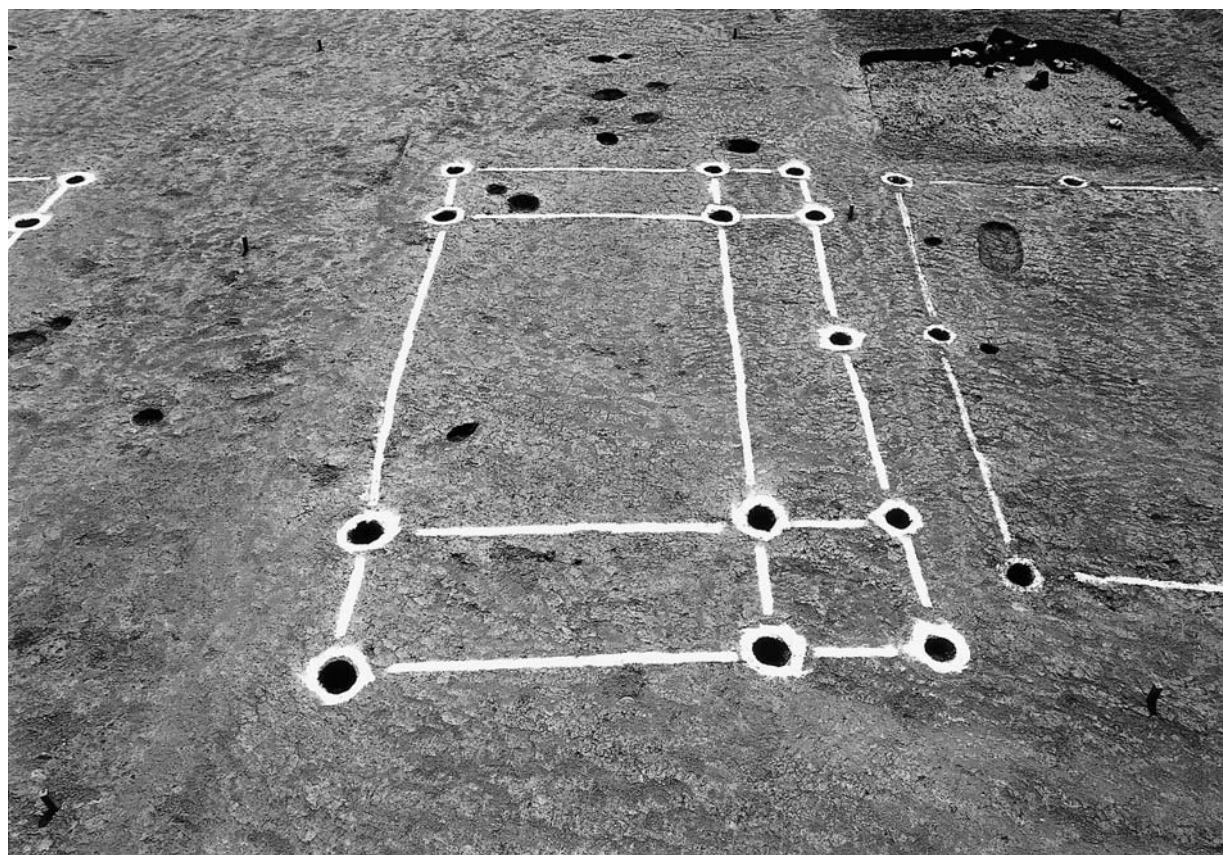
1. 第2号掘立柱建物跡



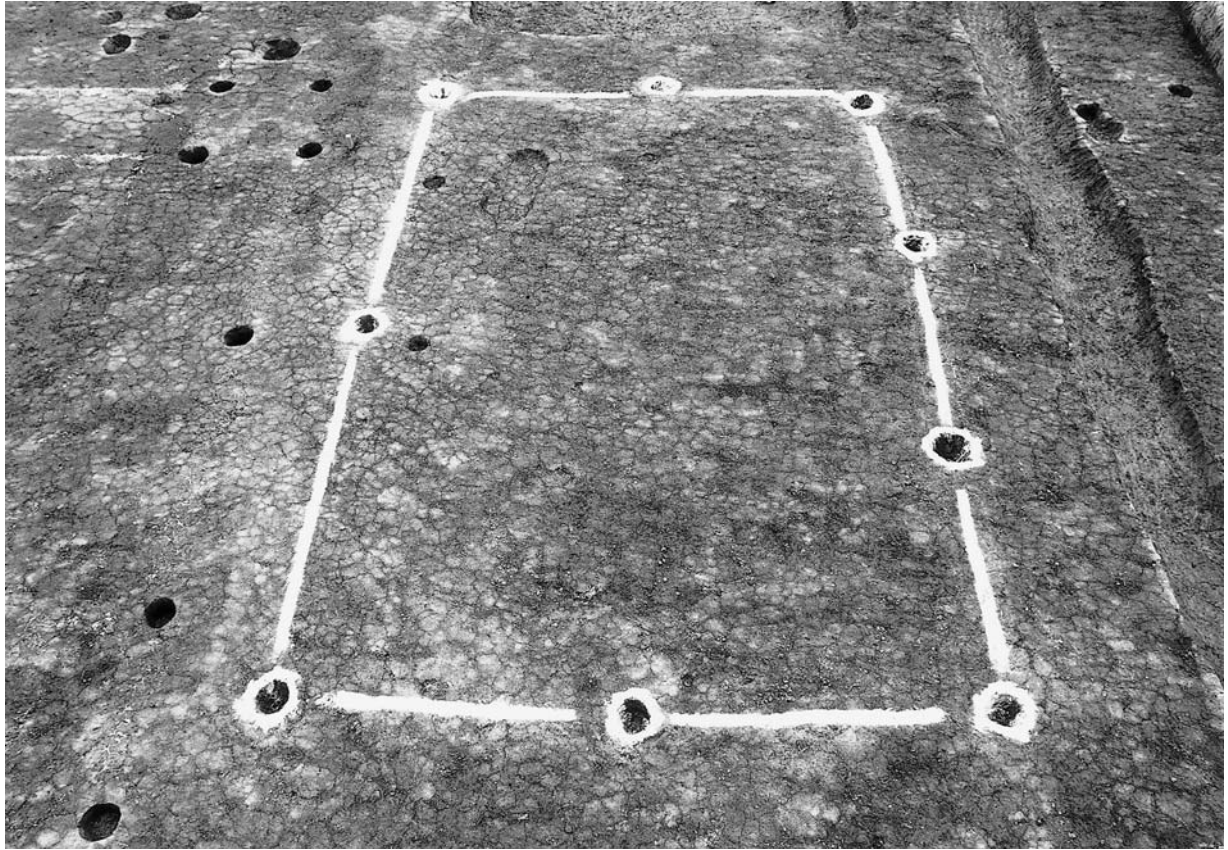
2. 第3・4号掘立柱建物跡



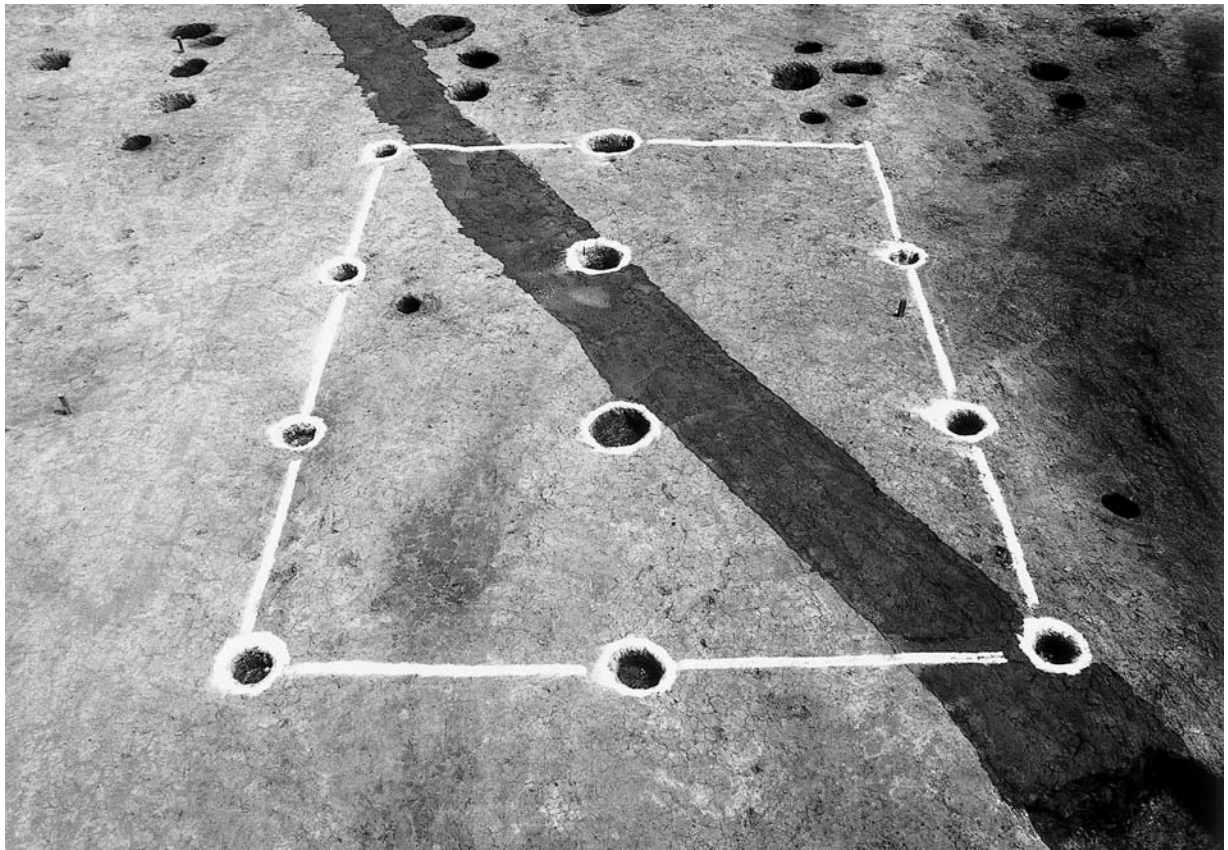
1. 第3号掘立柱建物跡



2. 第4号掘立柱建物跡

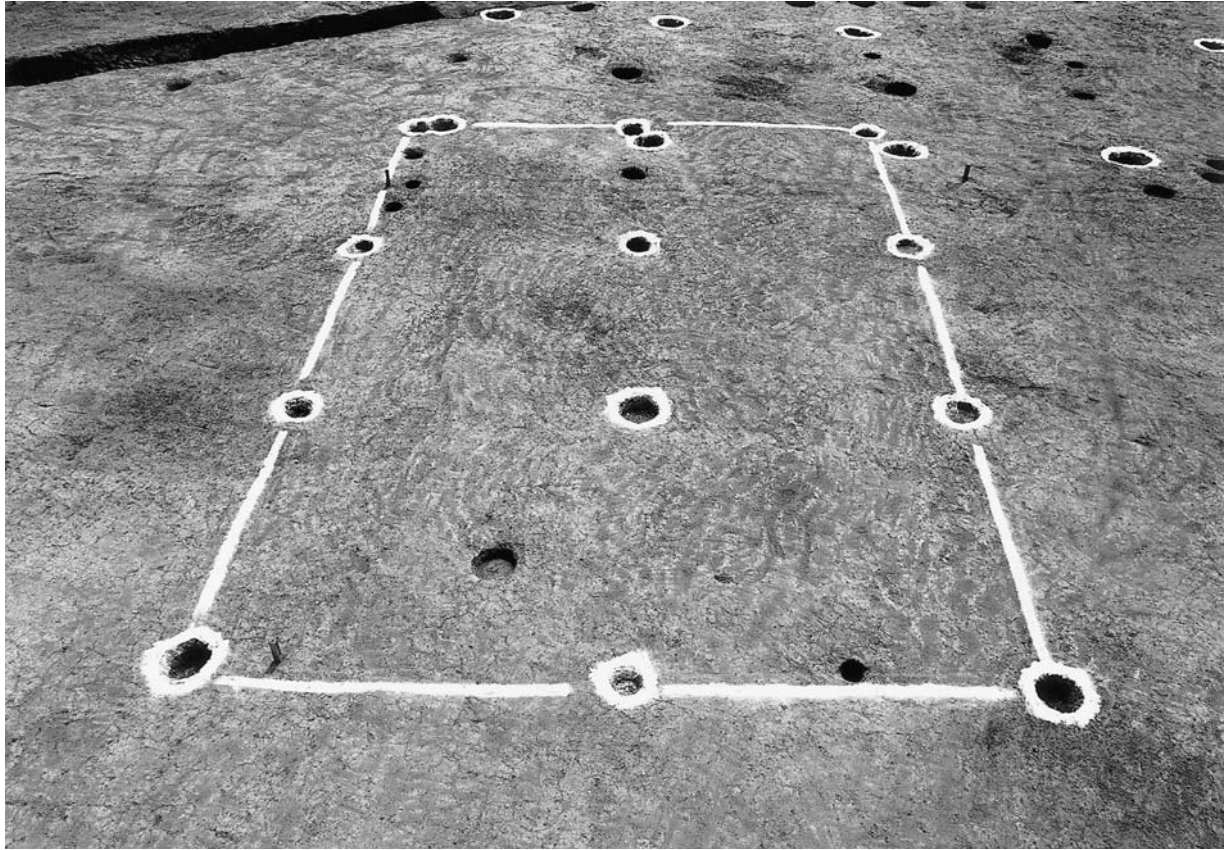


1. 第5号掘立柱建物跡

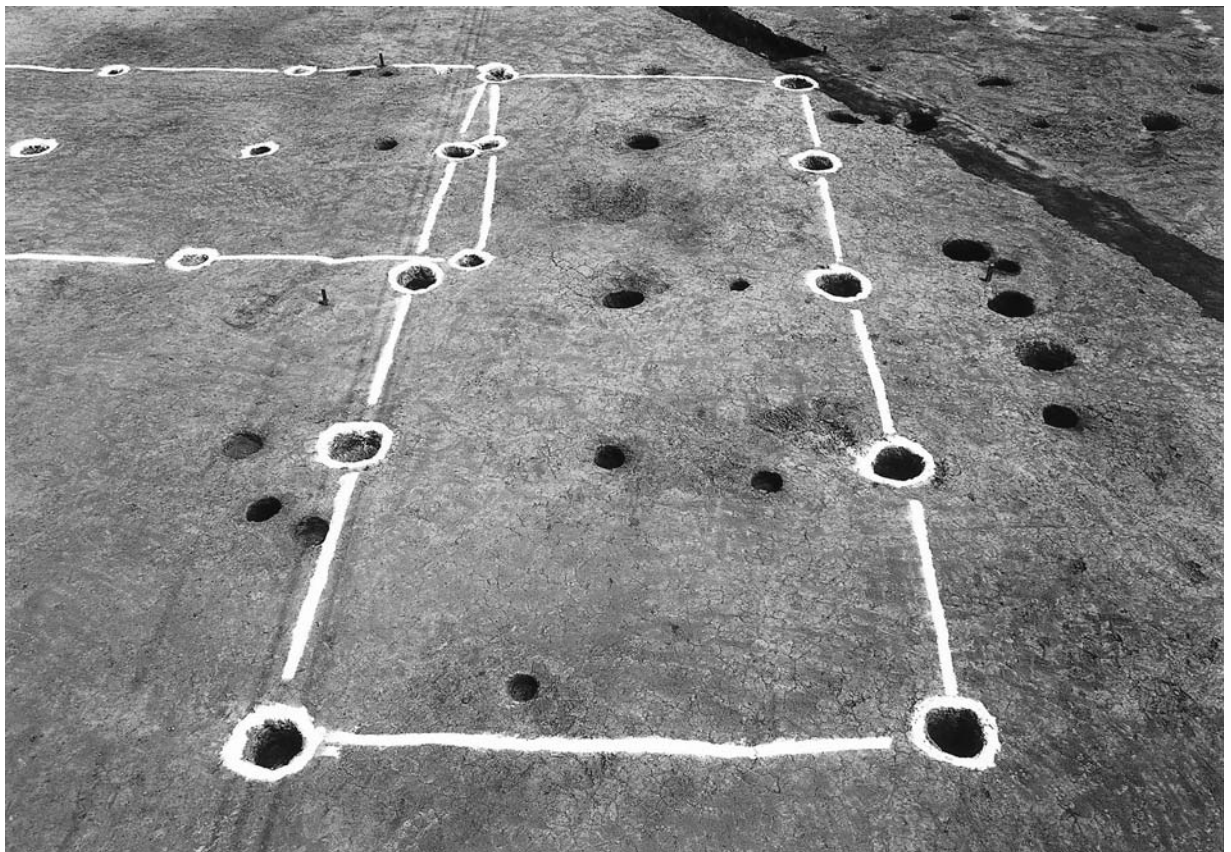


2. 第6号掘立柱建物跡

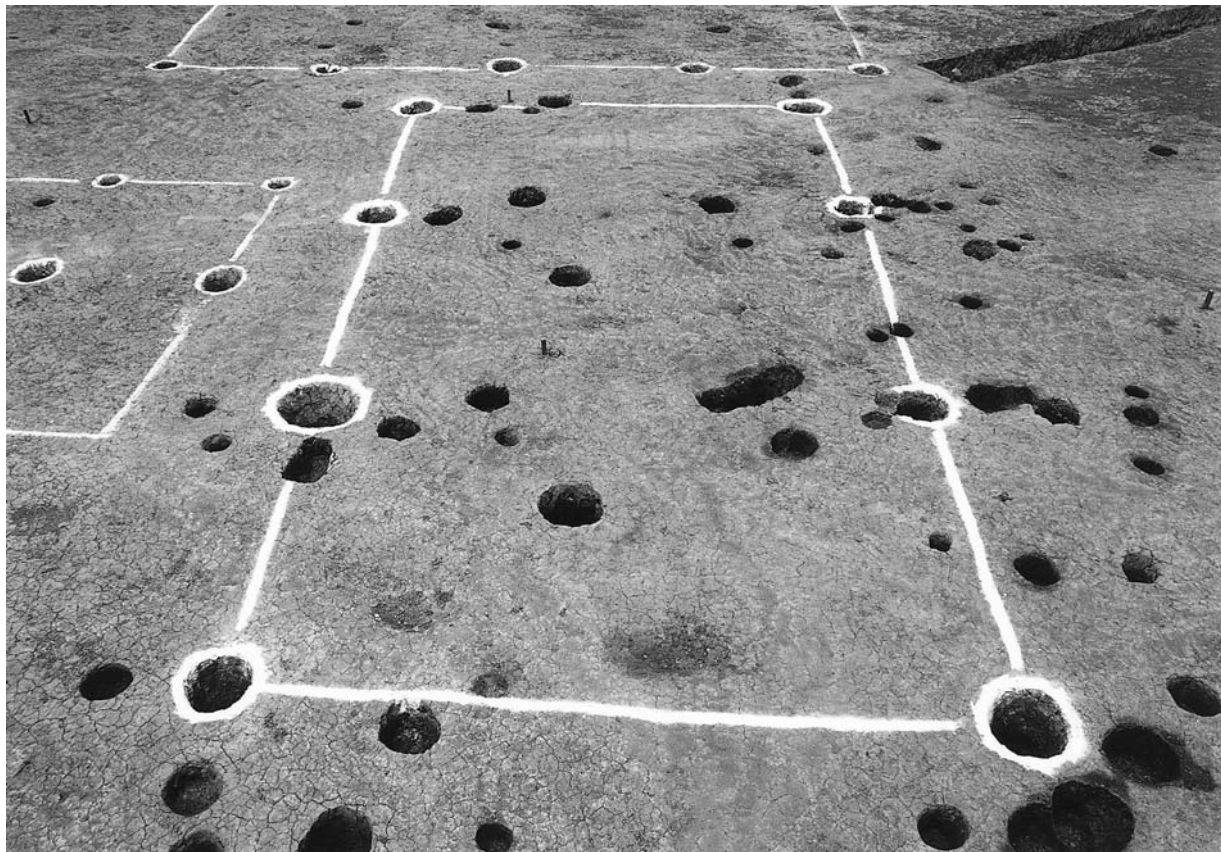
图版17



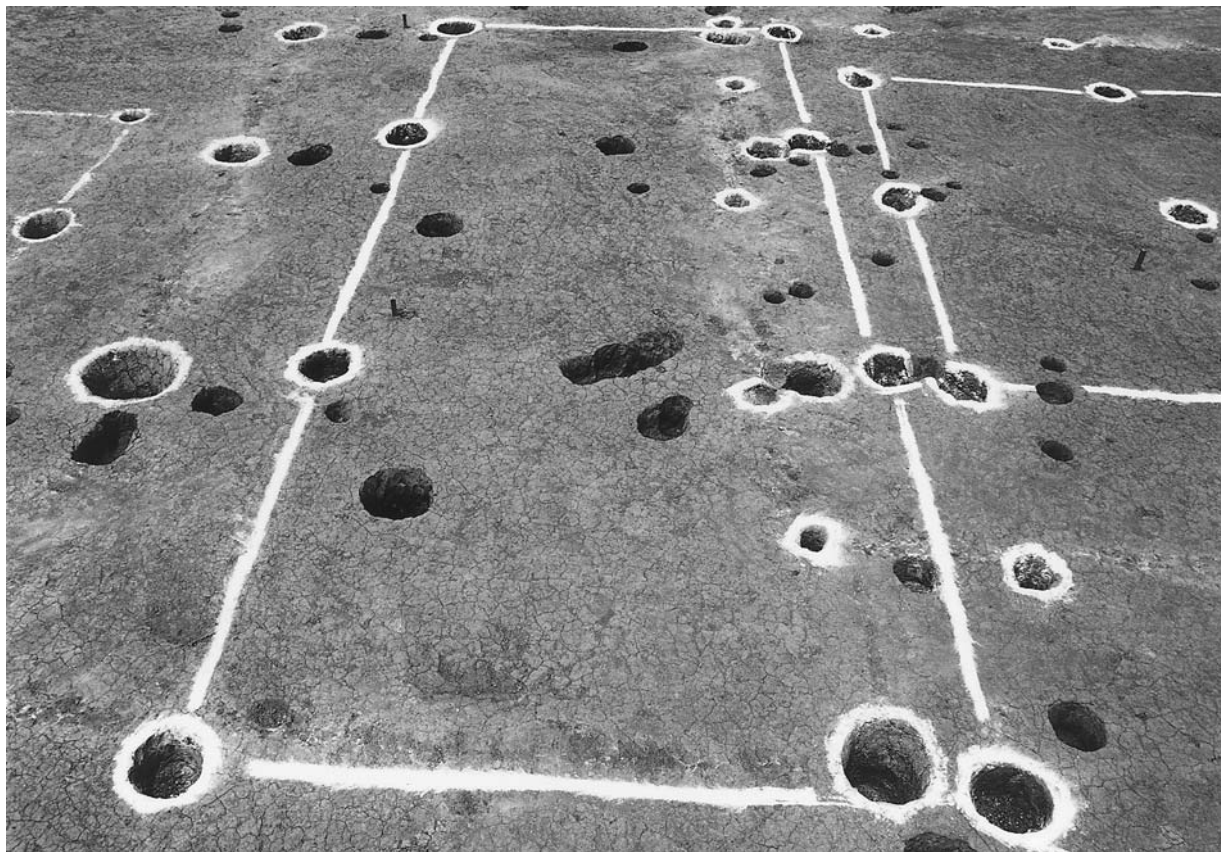
1. 第7号掘立柱建物跡



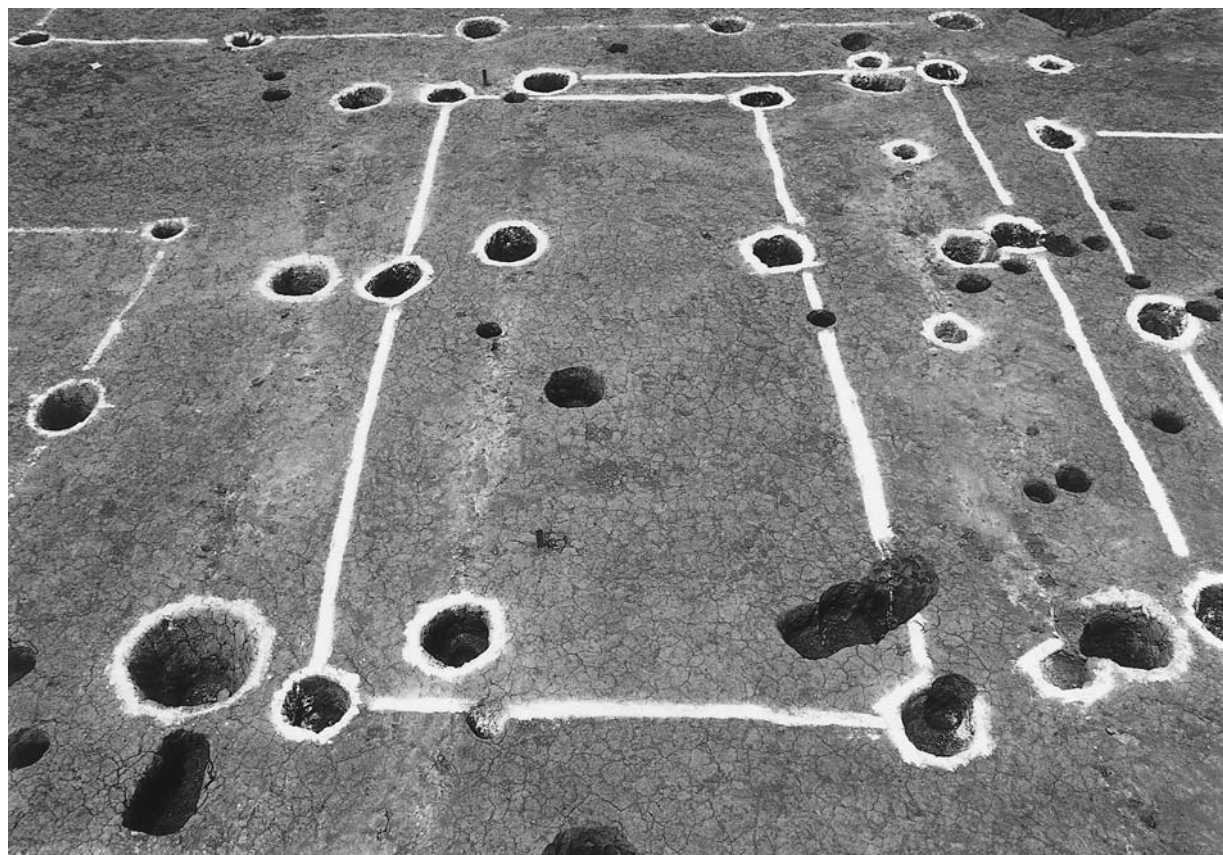
2. 第8号掘立柱建物跡



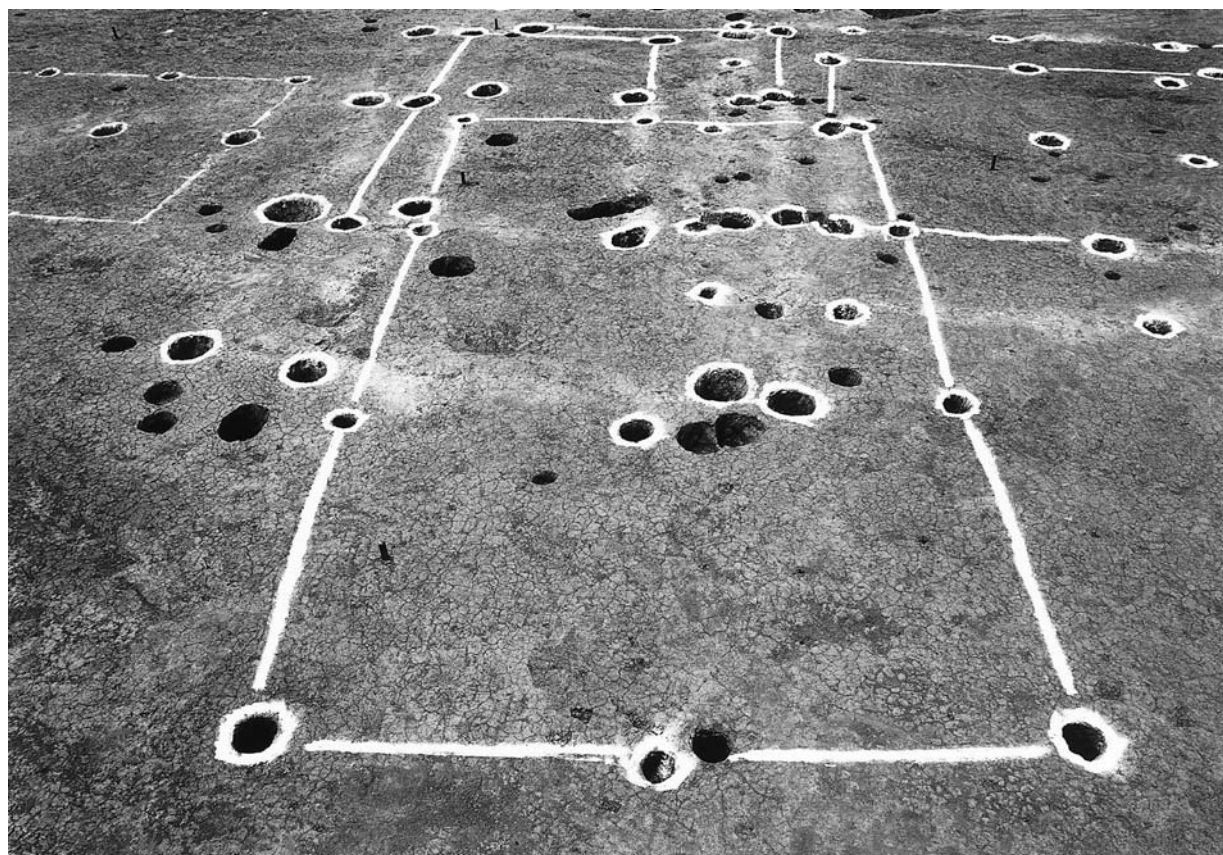
1. 第9号掘立柱建物跡



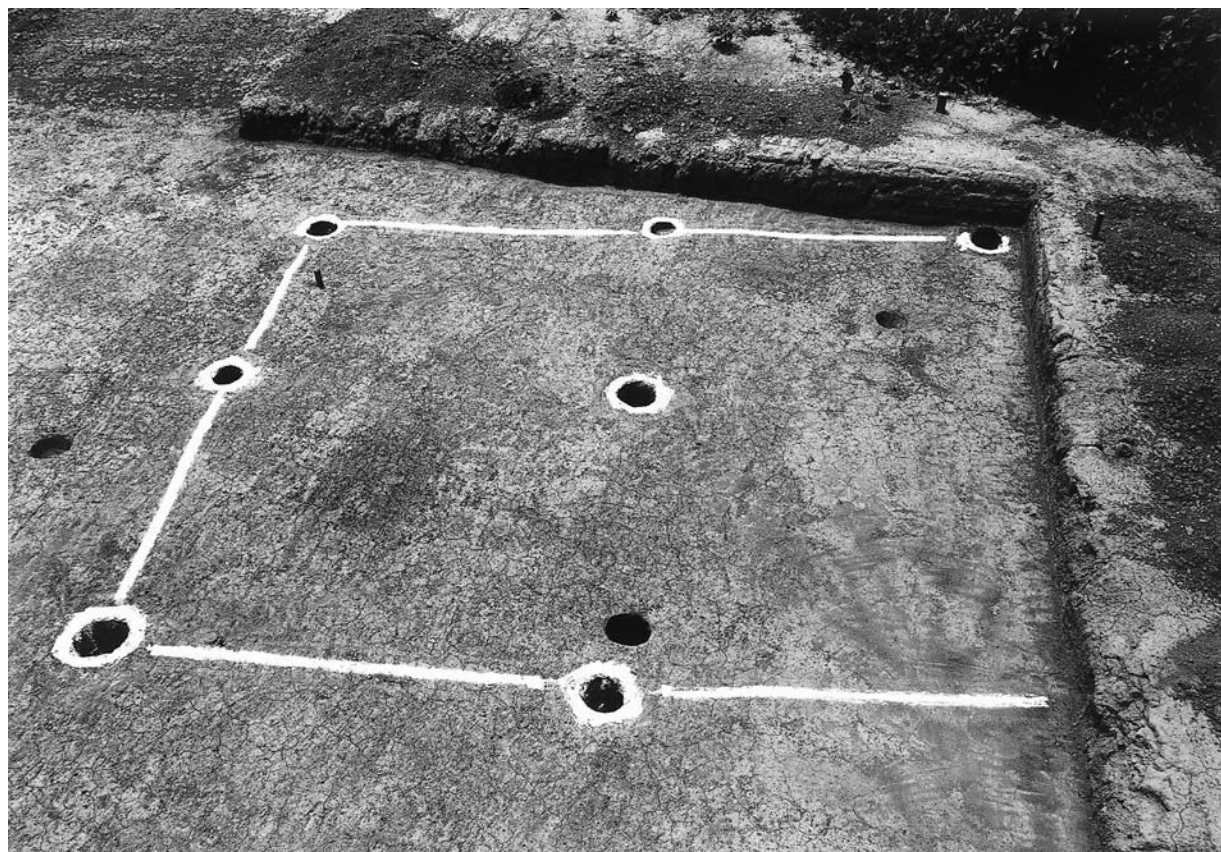
2. 第10号掘立柱建物跡



1. 第11号掘立柱建物跡



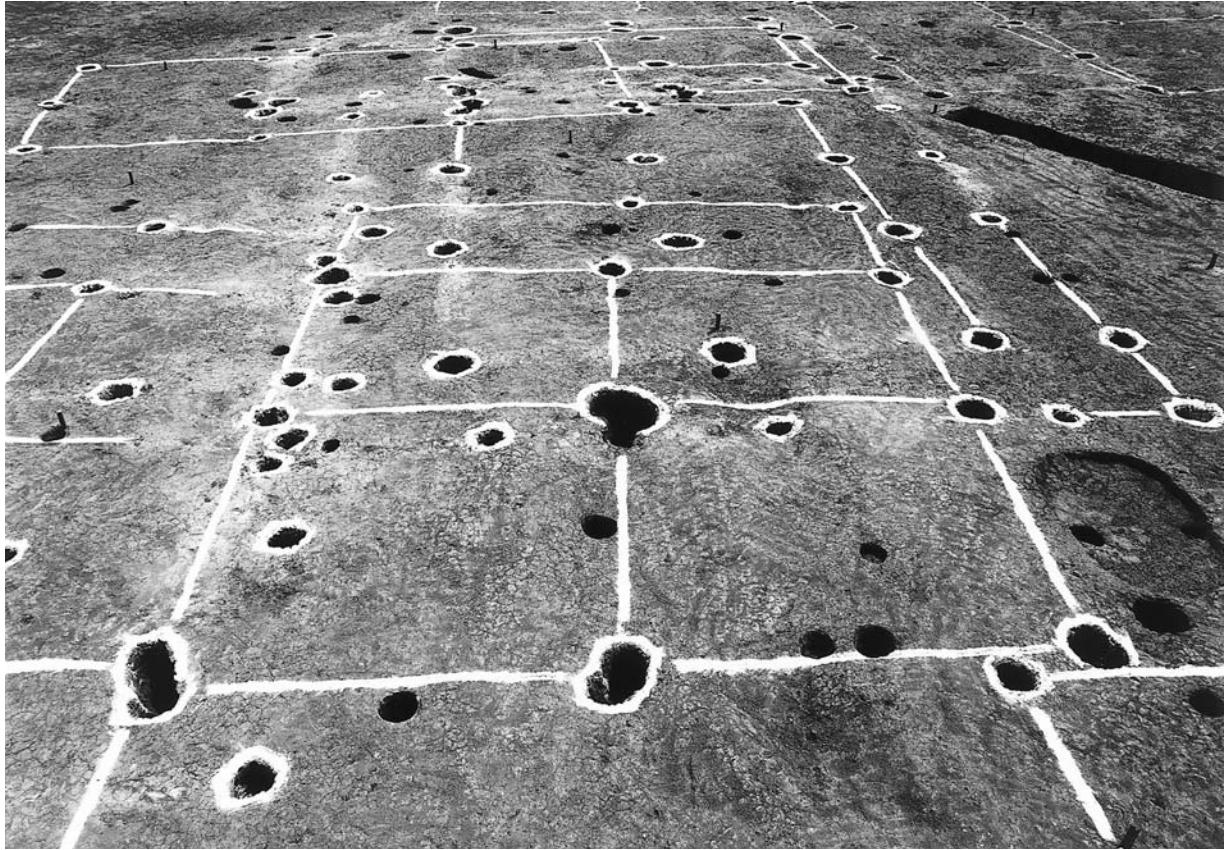
2. 第12号掘立柱建物跡



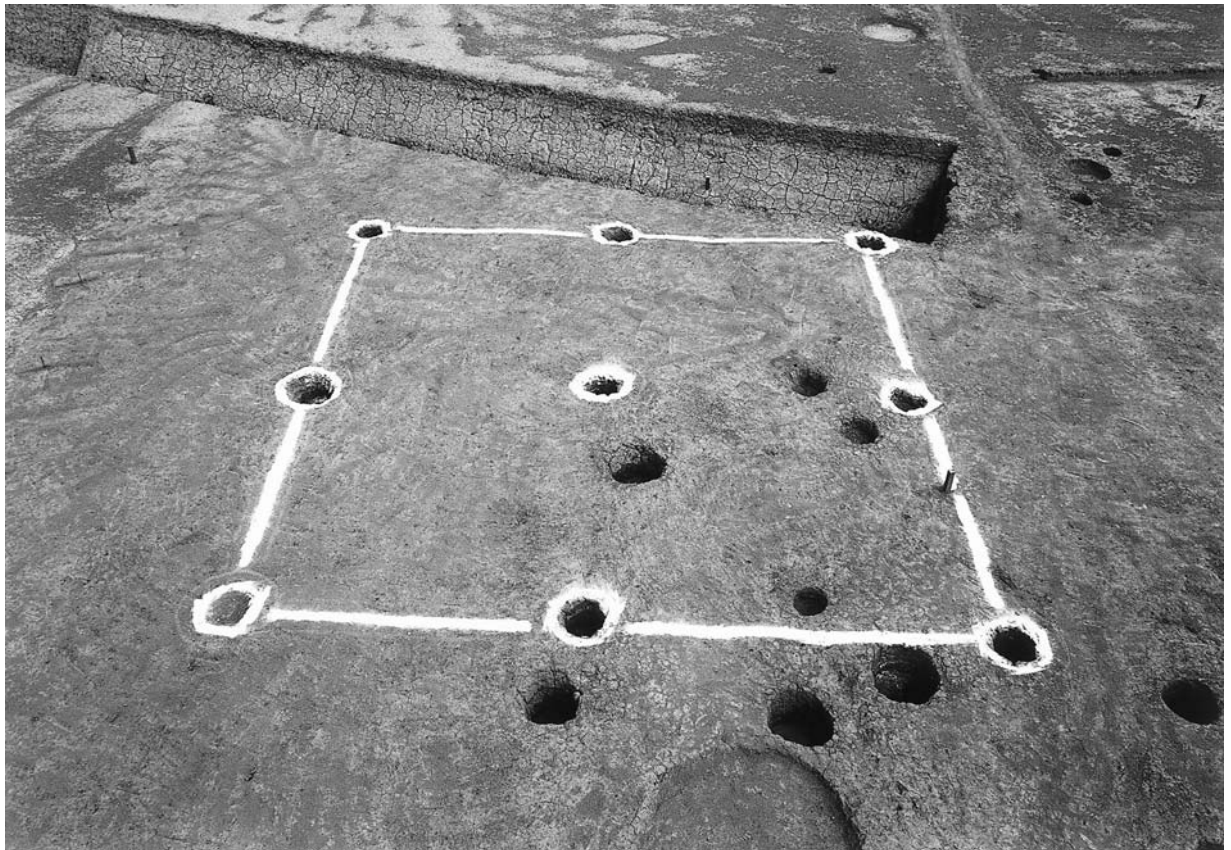
1. 第13号掘立柱建物跡



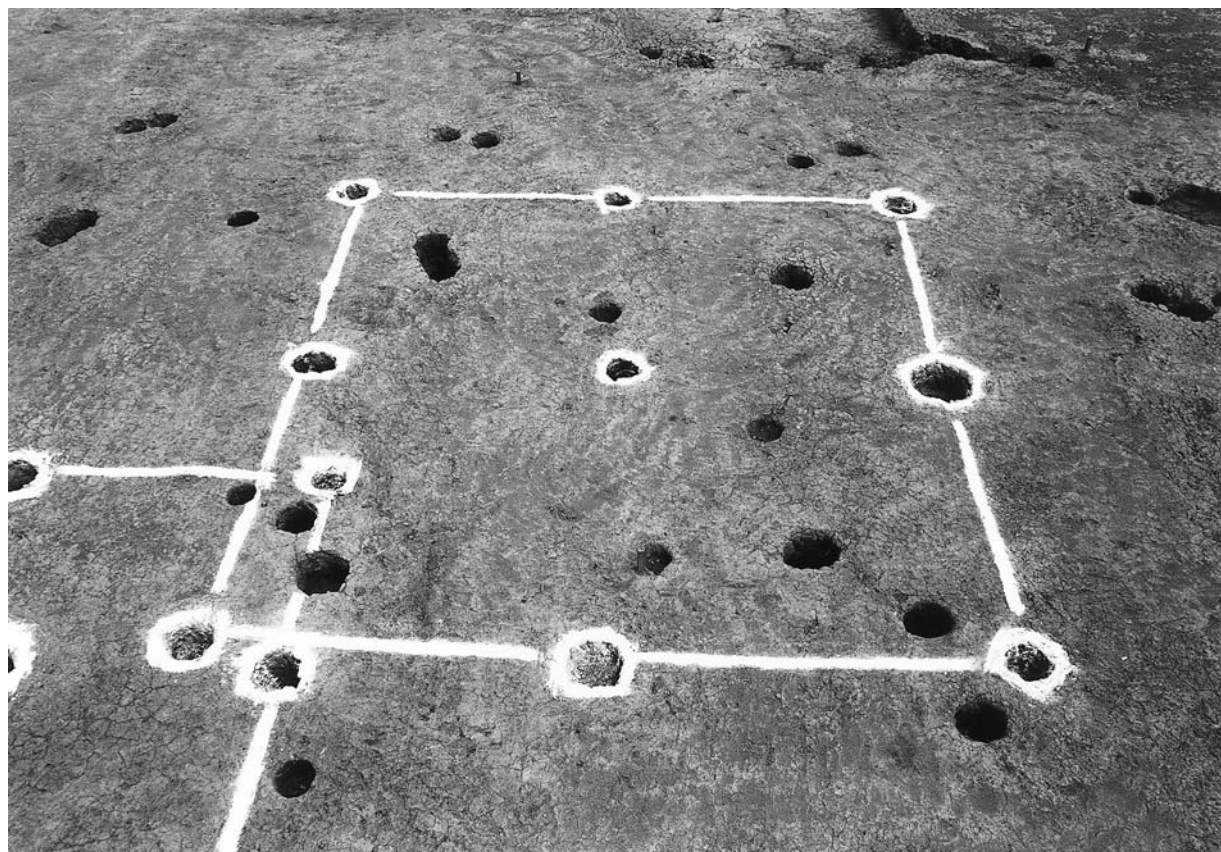
2. 第14号掘立柱建物跡



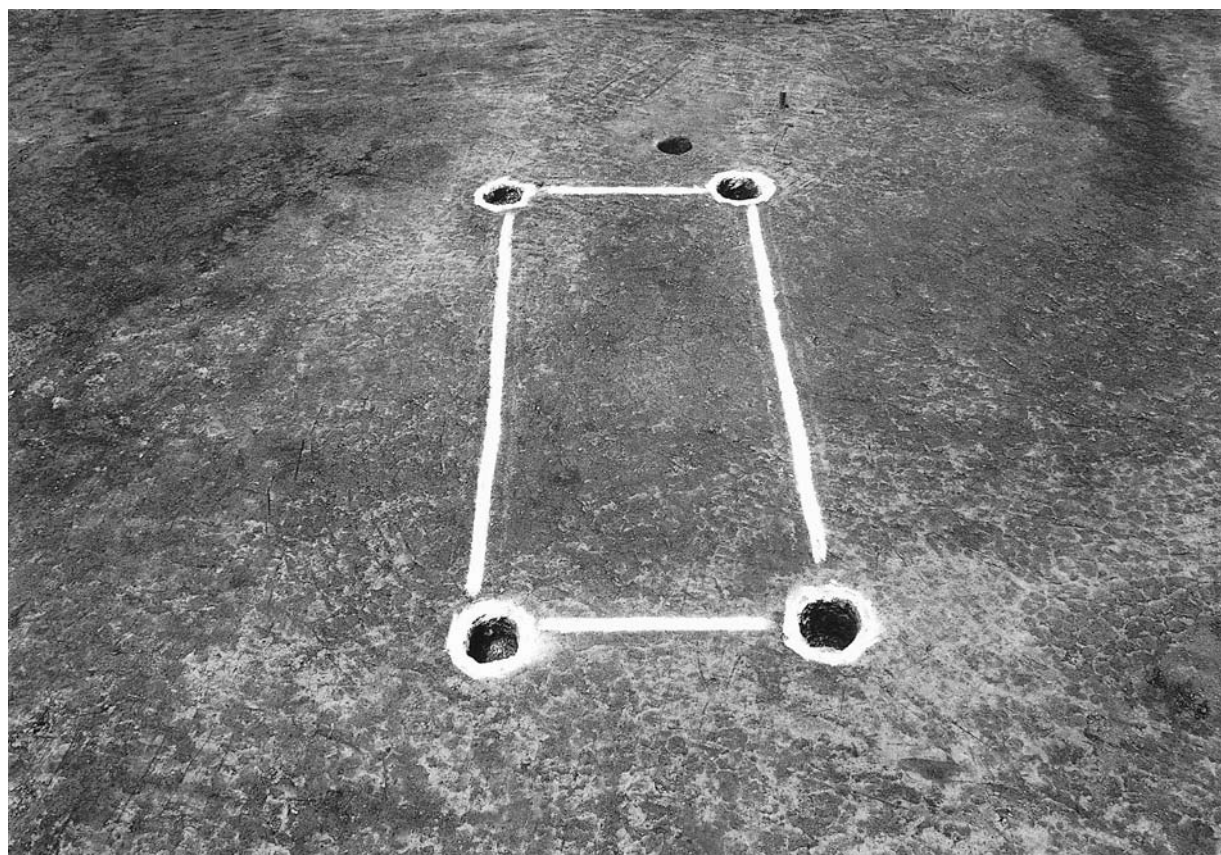
1. 第15号掘立柱建物跡



2. 第16号掘立柱建物跡



1. 第17号掘立柱建物跡



2. 第19号掘立柱建物跡

图版23



1. 第1号土坑

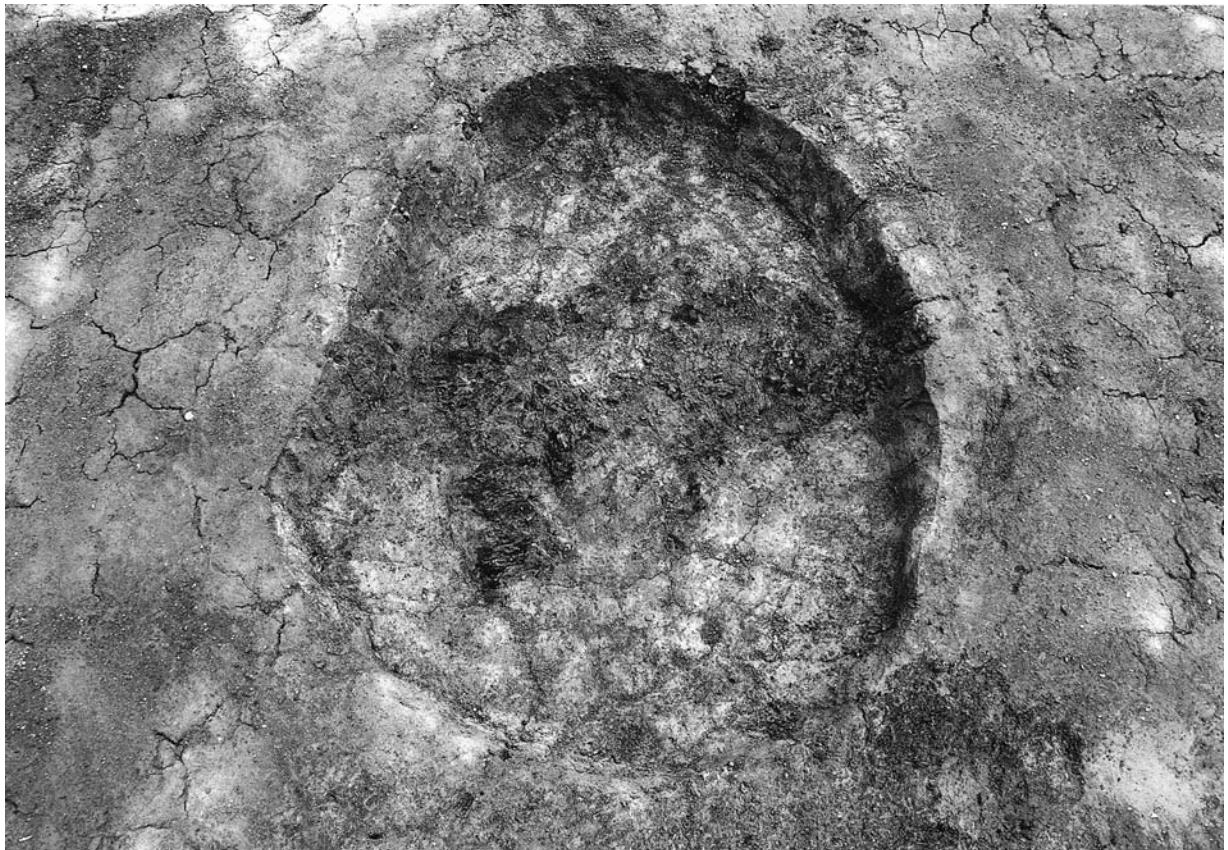


2. 第2号土坑

图版24

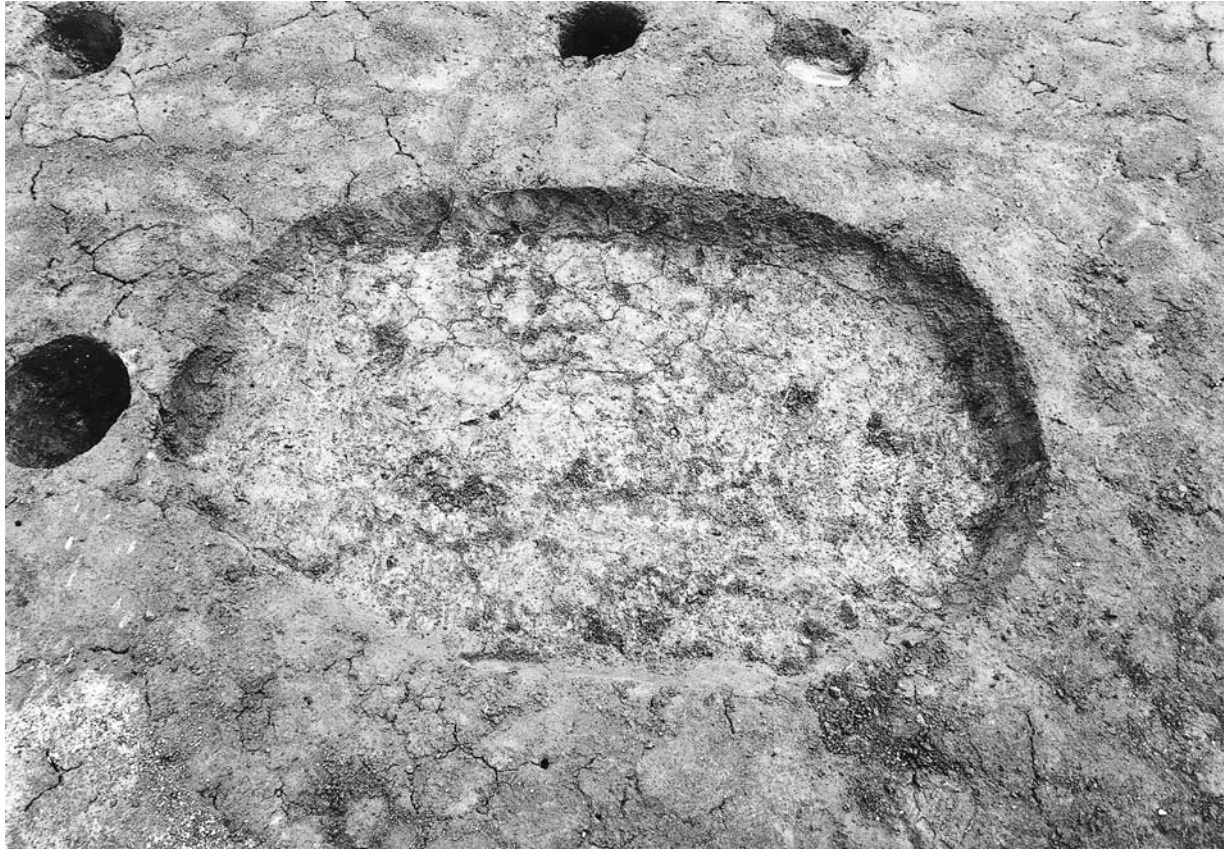


1. 第3号土壤

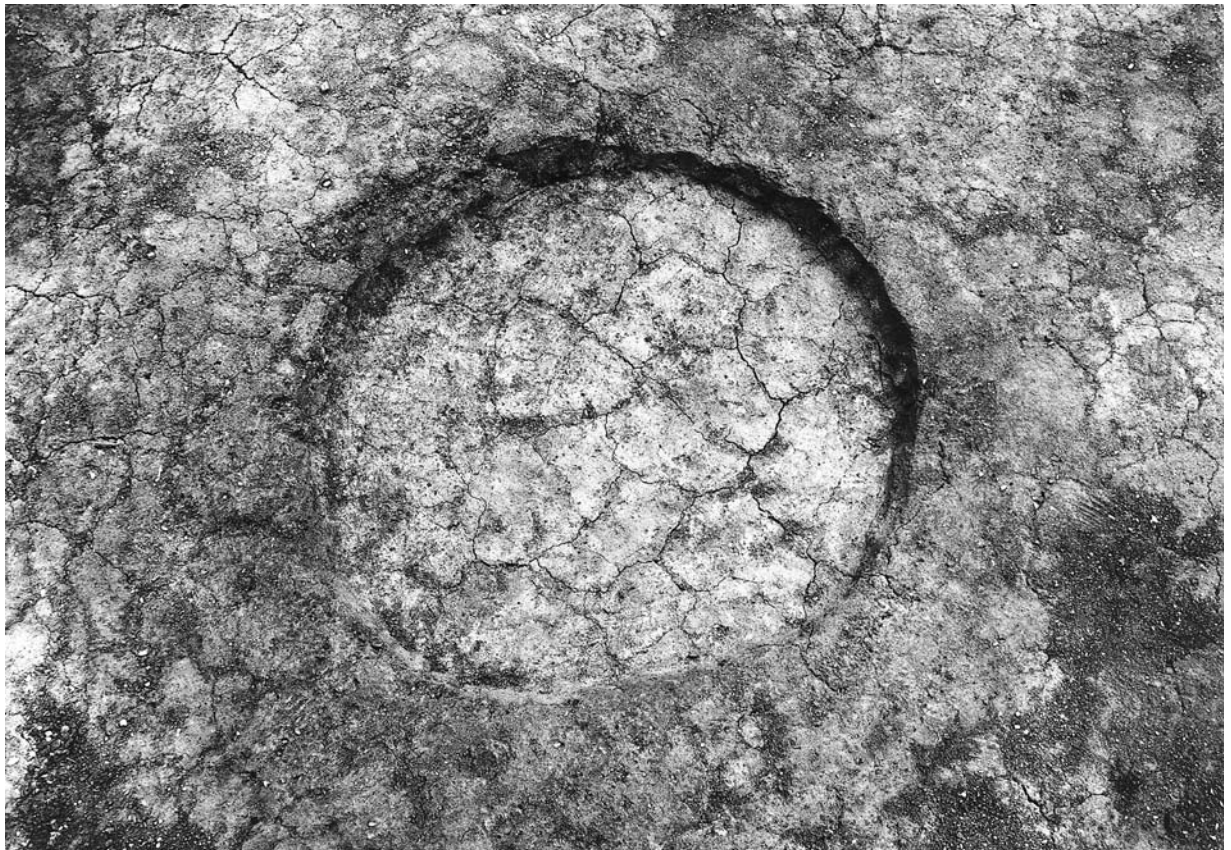


2. 第4号土壤

图版25

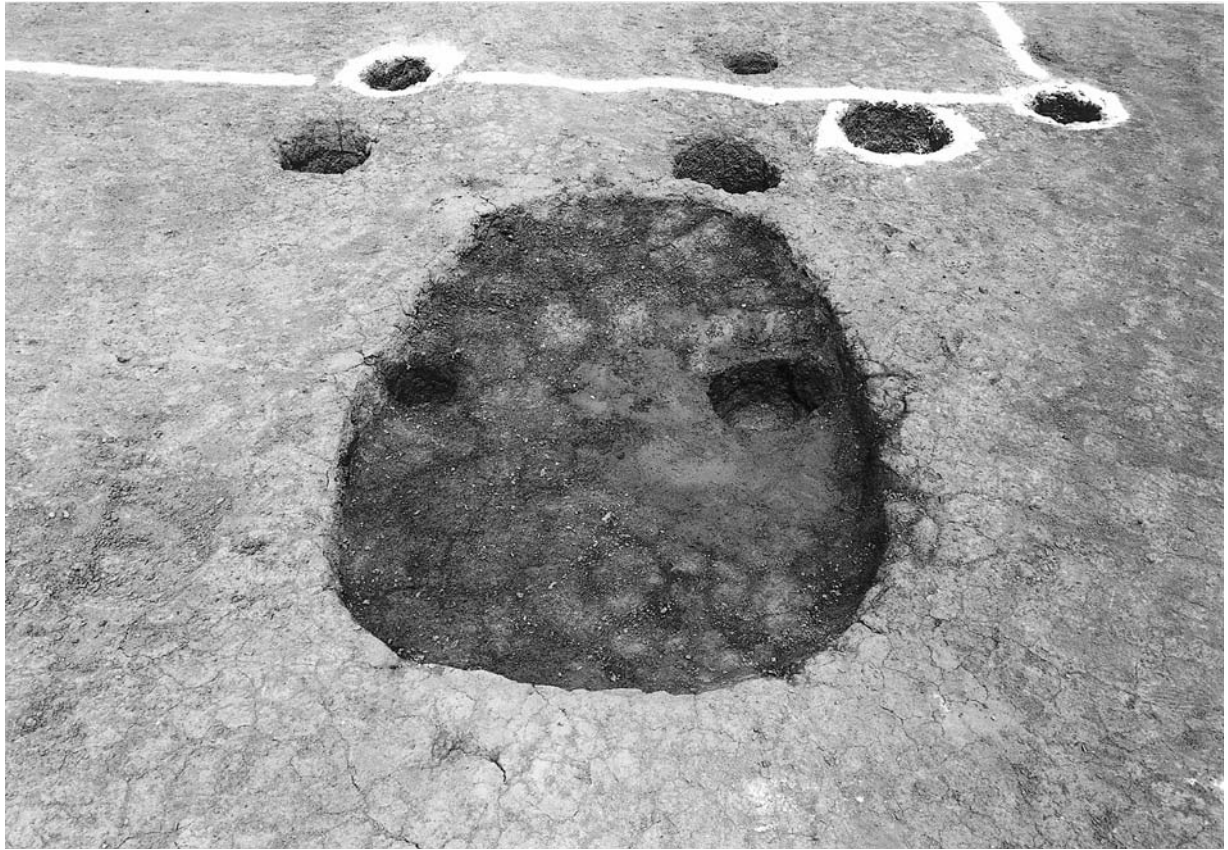


1. 第5号土壤



2. 第6号土壤

图版26

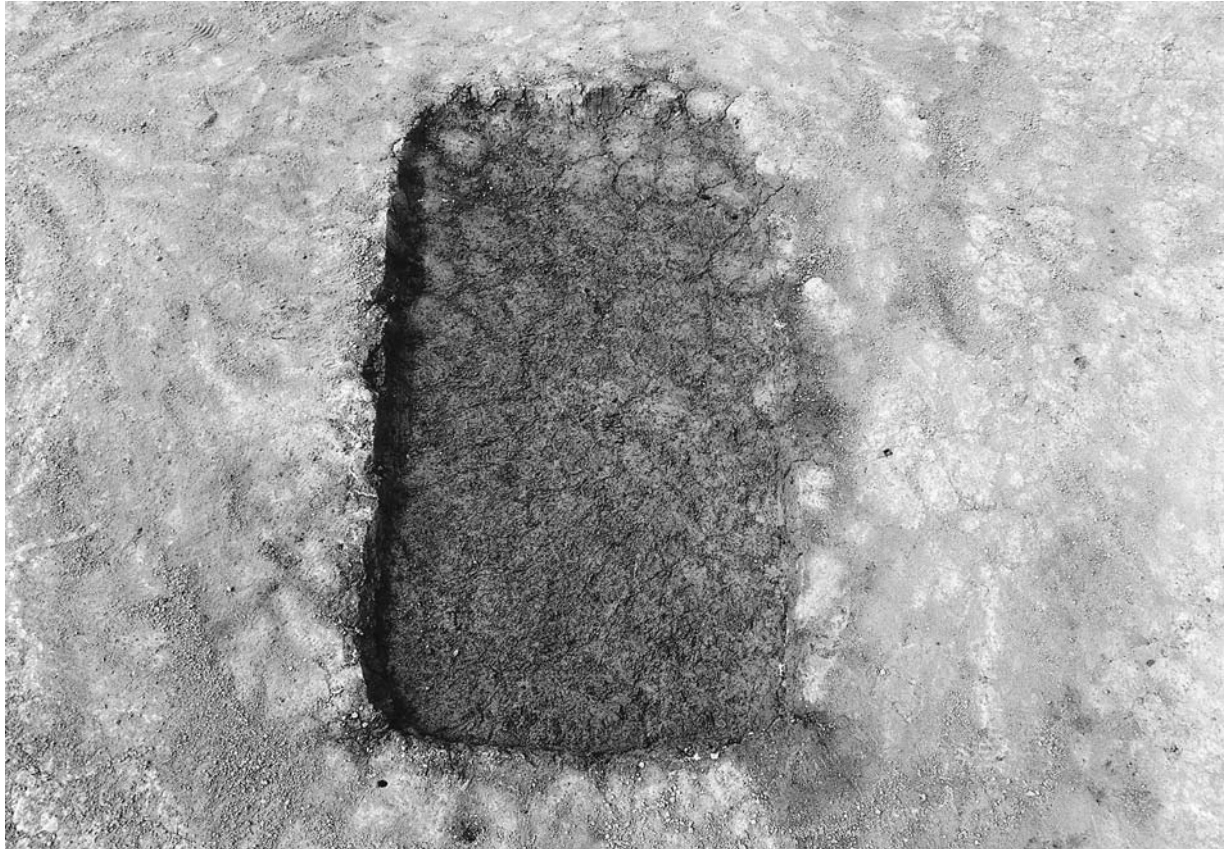


1. 第9号土坑

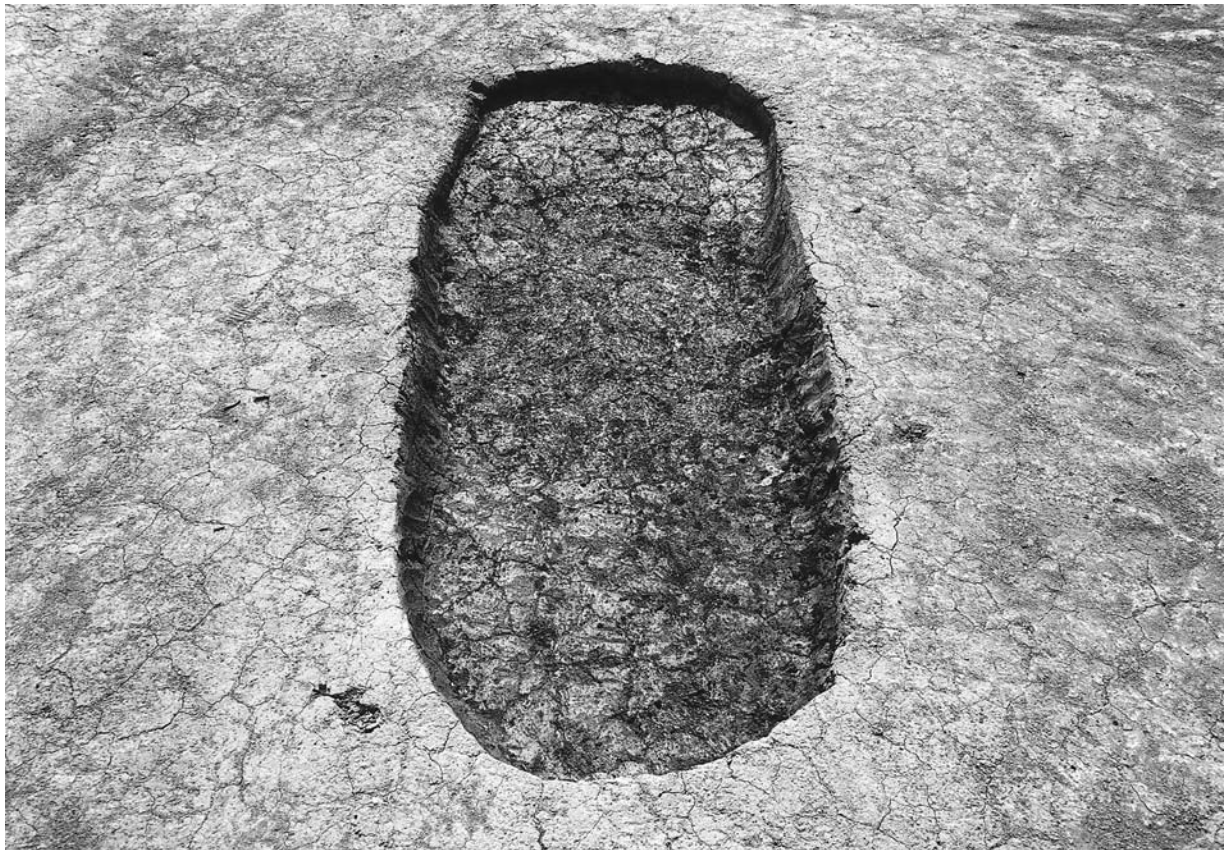


2. 第10号土坑

图版27



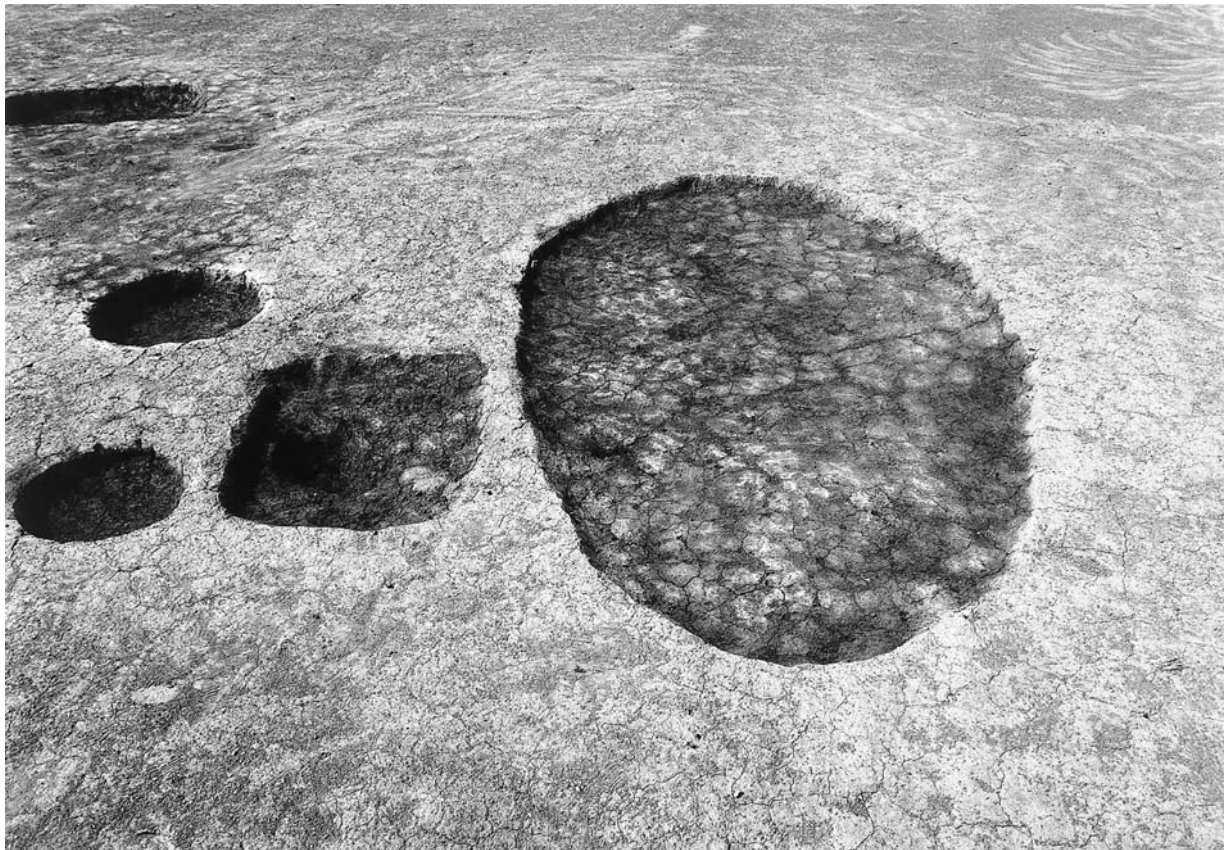
1. 第11号土壤



2. 第12号土壤

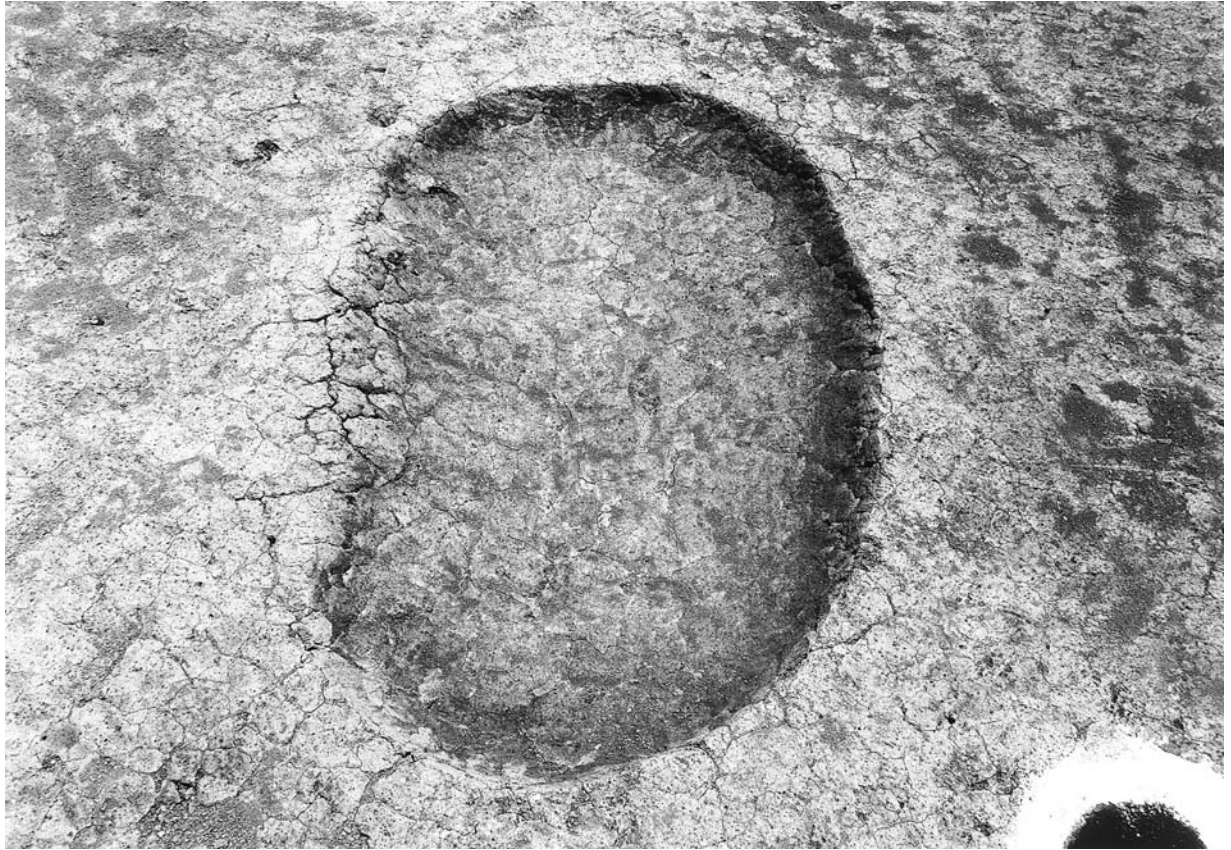


1. 第13号土壤



2. 第14号土壤

图版29

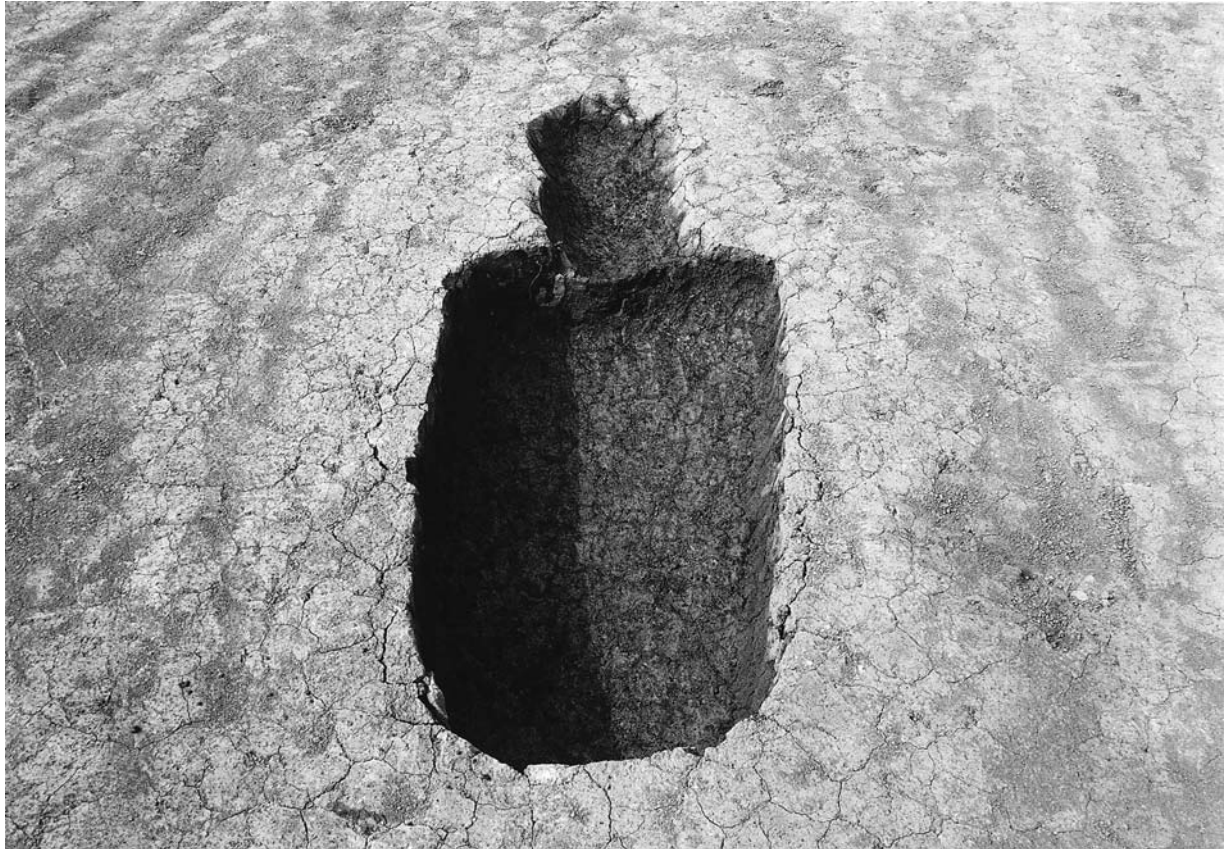


1. 第15号土坑



2. 第16号土坑

图版30



1. 第17号土壤



2. 第28号土壤

图版31



1. 第2号沟迹北端部

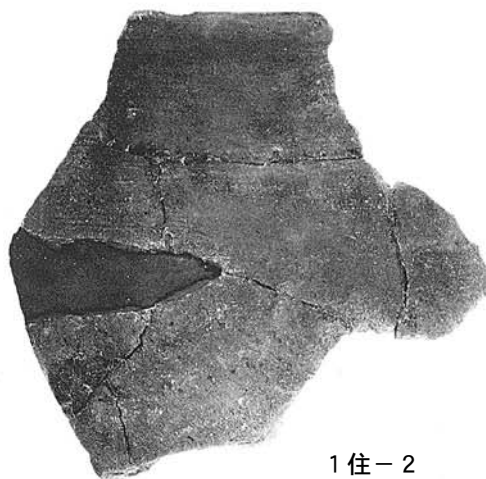


2. 第6号沟迹

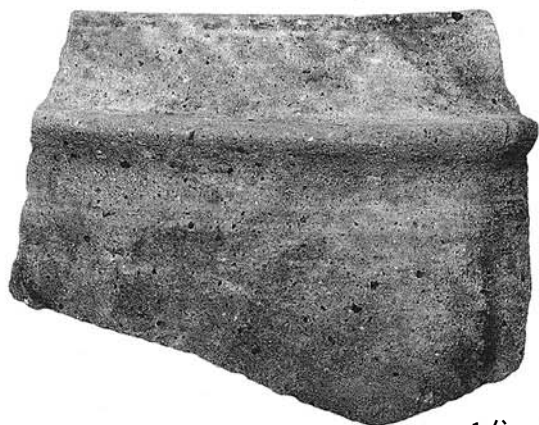
图版32



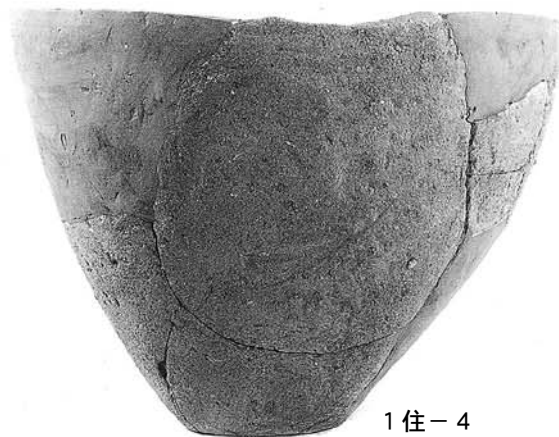
1住-1



1住-2



1住-3



1住-4

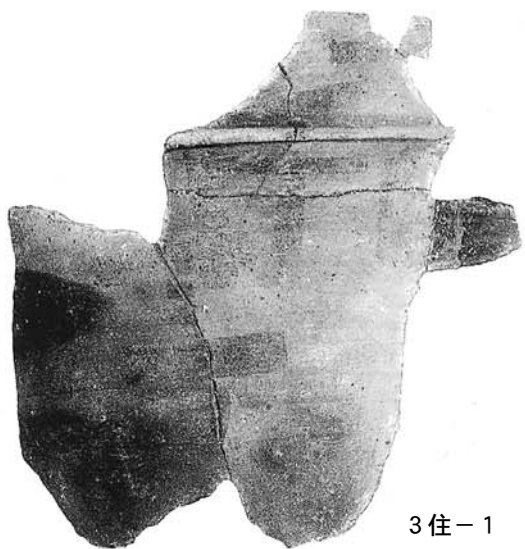


1住-5



2住-1

住居跡出土遺物(1)



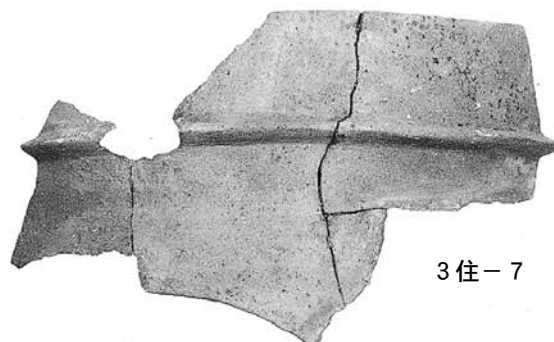
3住-1



3住-2



3住-3



3住-7



3住-8



3住-5

图版34



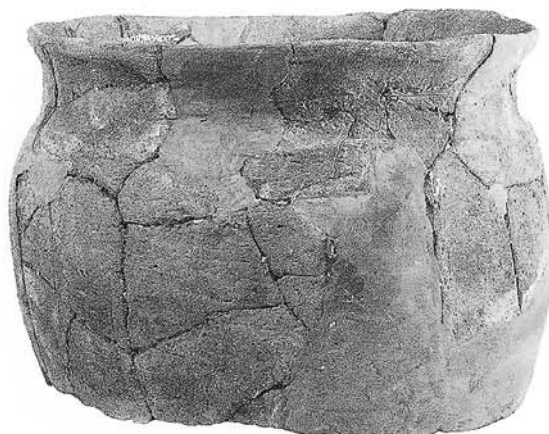
3住-4



3住-6



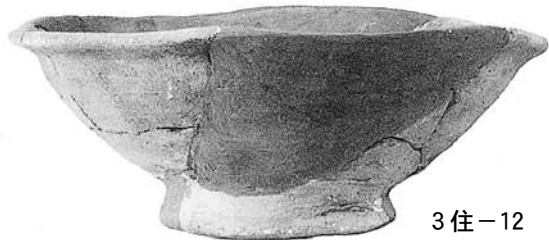
3住-9



3住-10



3住-11



3住-12

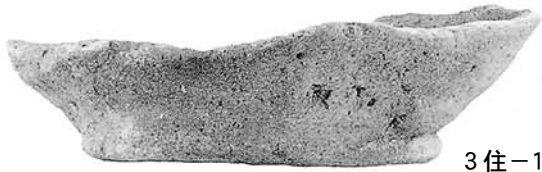
图版35



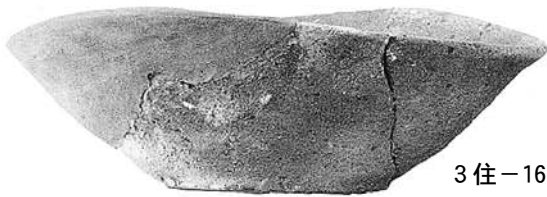
3住-13



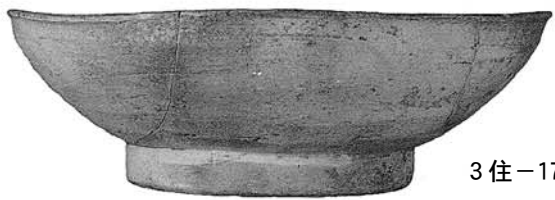
3住-14



3住-15



3住-16



3住-17



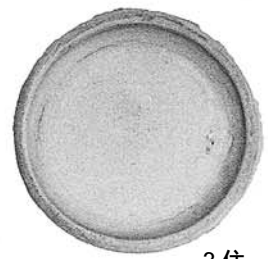
3住-21



3住-18



3住-20



3住-19

图版36



4住-1



4住-2



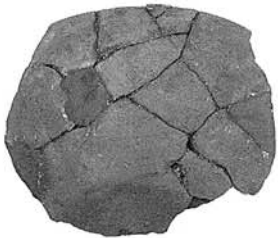
4住-3



5住-1



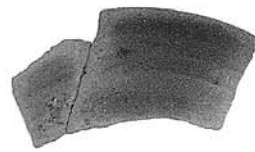
5住-2



5住-3



5住-7

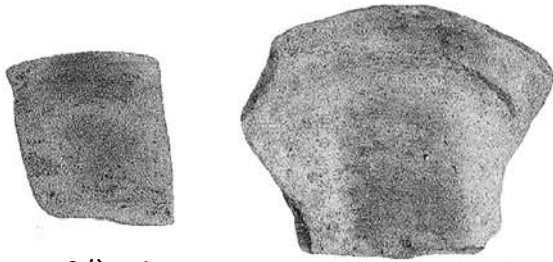


5住-4



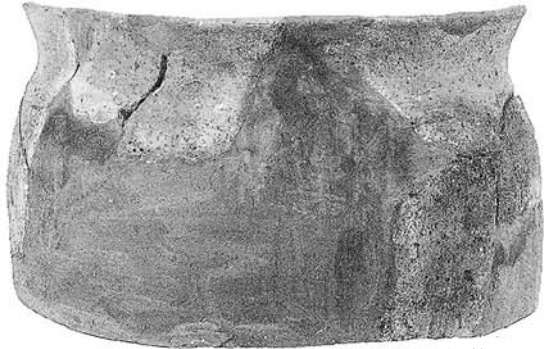
5住-6

图版37



6住-1

6住-2



8住-2



8住-3



8住-4



16土壙-1



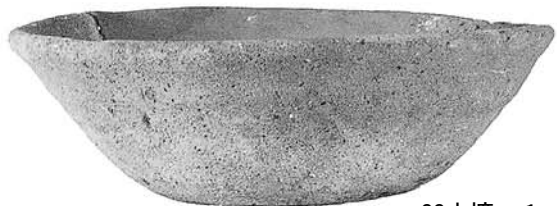
8住-1



8住-5

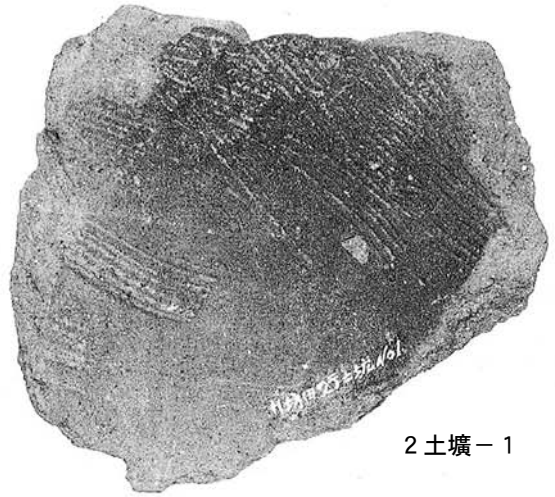


4掘立-1

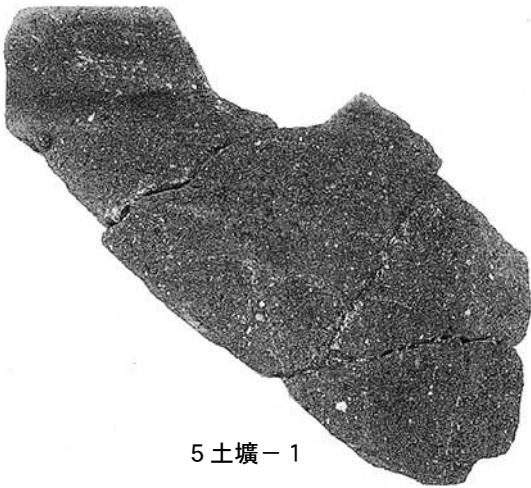


22土壙-1

住居跡出土遺物(6)、掘立・土壙出土遺物(1)



2 土壤 - 1



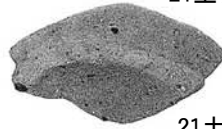
5 土壤 - 1



21 土壤 - 1



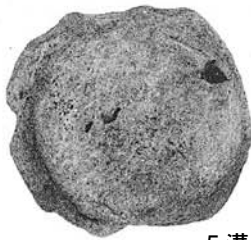
21 土壤 - 2



21 土壤 - 3



5 溝 - 1



5 溝 - 2



6 溝 - 1



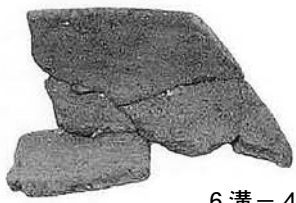
6 溝 - 3



6 溝 - 2

土壤出土遺物(2)、溝跡出土遺物(1)

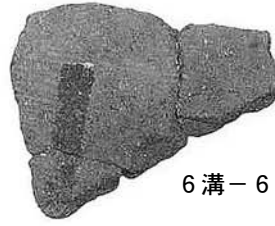
図版39



6 溝-4



6 溝-5



6 溝-6



6 溝-7

溝跡出土遺物(2)



4 住-4



7 住-2



2 掘立-1

出土石製品



3 住-22



3 住-23



5 住-8



6 住-3

出土鉄製品

報告書抄録

フリガナ	ヒルカワボウダイセキ							
書名	蛭川坊田遺跡							
副書名								
シリーズ	本庄市遺跡調査会報告書					巻次	第15集	
編著者	恋河内昭彦							
編集機関	本庄市遺跡調査会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 TEL 0495-25-1185							
発行日	西暦2007年（平成19年）3月30日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード 市町村 遺跡		北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査期間	調査 面積	調査 原因
ヒルカワボウダイセキ 蛭川坊田遺跡	ホンジョウシコダマチョウヒルカワ 本庄市児玉町蛭川 239他	112119	54- 294	36°12'30"	139°08'40"	19900514 ~19900713	3000㎡	ライス センター 建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
蛭川坊田遺跡		古墳時代	溝1		土器片、埴輪片			
	集落 屋敷	古代～ 中世初頭	竪穴住居8、掘立柱建物19、 土壇25、溝4		土器、鉄製品、石製品、 土師器皿			

本庄市遺跡調査会組織

会 長	茂木 孝彦（本庄市教育委員会教育長）
理 事	清水 守雄（本庄市文化財保護審議会委員） 佐々木幹雄（ ” ” ） 丸山 茂（本庄市教育委員会事務局長）
監 事	八木 茂（本庄市監査委員担当副参事） 門倉 実（本庄市会計課長）
幹 事	前川 由雄（本庄市教育委員会文化財保護課長） 鈴木 徳雄（本庄市教育委員会文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長） 恋河内昭彦（本庄市教育委員会文化財保護課埋蔵文化財係主査） 太田 博之（ ” ” ） 松澤 浩一（本庄市教育委員会文化財保護課埋蔵文化財係主事） 松本 完（ ” ” ） 的野 善行（本庄市教育委員会文化財保護課埋蔵文化財係臨時職員）
調査員	尾内 俊彦（本庄市遺跡調査会職員）

本庄市遺跡調査会報告書第15集

蛭川坊田遺跡

平成19年3月20日 印刷

平成19年3月30日 発行

発行／本庄市遺跡調査会

埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

(本庄市教育委員会文化財保護課内)

印刷／たつみ印刷株式会社